

陰 地 遺 跡

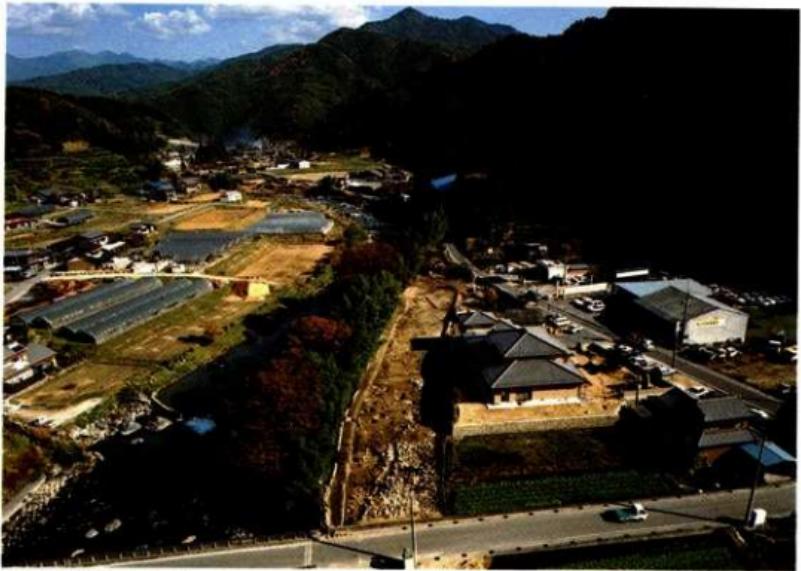
1993

岐 阜 県

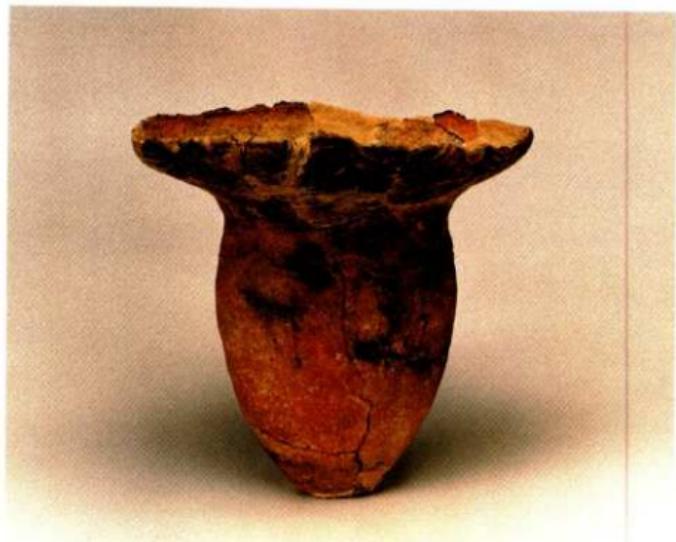
財団法人 岐阜県文化財保護センター



陰地遺跡付近遠景



陰地遺跡近景（西から）



1号住居跡 埋甌



1号住居跡

序

昨今は、大規模開発に伴って、遺跡の調査面積も増加し、今まで知りえなかった歴史的事実が次々と明らかにされつつあります。このような中で、今回、東白川村の地において発掘調査がなされました。清流白川のほとりにて、その瀬音に耳を傾け、うっ蒼たる森の中を太古の人々が歩いた自然の情景に思いをはせますと、遠い過去との対話を覚え、先人の残した足跡が身近に感じられます。

白川流域における初の発掘調査となりました陰地遺跡は、出土した土器が時期による変遷を教え、検出された遺構が縄文時代の集落の存在を知らせてくれます。多くの出土遺物を見ますと、白川を遡る方向にある信州方面と、白川の流れにのる方向にある東海方面の二つの文化圏と接し、各地域との交流があったことがわかりました。このような成果は、発掘調査のみならず、地域の方々の文化財に対する理解があったからこそ導きだされたわけであります。

発掘調査で得られた土器は、たとえそれが小さな破片であろうとも、縄文文化から現在にいたる歴史と創造を伝える貴重なものであります。それらの記録保存の成果はもとより、資料の数々は過去だけでなく、将来においても豊かなイメージを与え、調査の果たした役割は大きいものといえます。遺跡・文化財については「国民共有の財産」という言葉で久しく語られてきておりますが、今後においても「後世に伝えること」を大切にし、未来をみつめていかねばと思います。

発掘調査及び出土品の整理・報告書の作成にあたりましては、関係諸機関・各位の温かいご理解とご協力を頂き感謝申し上げます。また、現地における調査に際しましては、地元の方々に多大なるご協力を賜り厚く御礼を申し上げる次第であります。

平成6年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 吉田 豊

例　　言

1. 本書は、岐阜県加茂郡東白川村越原字陰地に所在する陰地遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、国道256号公共道路改良工事に伴うもので、岐阜県土木部から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査から報告書作成までの費用は、岐阜県土木部が負担した。
4. 発掘調査は愛知学院大学教授大參義一氏の指導のもとに各務光洋が担当した。
5. 発掘調査作業には次の方々の参加・協力を得た。

高井好一 安江久夫 中島芳造 栗本康夫 田尻り江 高井良子 大坪美保 安江こう
安江多重 安江吉夫 安江房夫 安江和男 安江ちよ 島倉松江 大坪正明 桂川英記
安江忠孝 河田あや子 田尻いつえ 島倉とくの 熊沢きよみ 安江けさの
6. 調査記録および出土品の整理等については次の方々の参加・協力を得た。

江間香代子 奈木文恵 進藤有美子 高嵩桂子 酒向邦子 目加田哲 服部みどり
松岡美代子 竹内恒子 浅野紀美代
7. 本書の執筆は第4章第2節を小野木学が、第1章、第2章、第3章、第4章・第1節・第3節・第4節、第6章を各務光洋が担当した。また、第5章は京都大学原子炉実験所の薦科哲男氏より玉稿を賜った。ここに記して感謝申し上げます。
8. 発掘調査および報告書作成にあたって次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいたいた。記して感謝の意を表する次第である。

大江　命 伊藤重雄 田村大器 内堀信雄 橋詰佳治 渡辺博人 西村勝広 中島勝国
田口昭二 山内伸浩 小野木学 薦科哲男 平子順一 鹿島保宏 山田正昭 下畠五夫
安江昭平 藤根　久 岐阜県可茂土木事務所 東白川村 可茂教育事務所 (順不同)
9. 調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡　　例

1. 遺構跡図の指示は、下記のとおりとする。

(縮尺)	○住居跡	1/60
	○住居跡内施設	1/60
	○土 坑	1/60
	○ピット	1/60

(その他)

○図中の方位はすべて磁北を示す。

○水系レベルは標高を示し、土層図の右又は左肩に記した。

○住居跡の図中に示したPitの深さは、現存する床面からの換算値である。

○本文・表・図中に必要に応じて遺構記号を使用したが、これらは次のように遺構の種類を表す。

S B = 住居跡 S K = 土坑 P = ピット

2. 遺物跡図の指示は、下記のとおりとする。

(縮尺)	○土器、陶磁器類	1/6
	○石器・打製石斧	1/2
	○その他の石器	1/3

縮尺の異なるものについては、そのつどスケールを添付した。

(遺物番号)

遺物番号は4桁の数字をもって以下のように表記する。

○実測対象土器.....頭番号を0とする。(0 0 0 1~)

○拓本対象土器.....頭番号を1とする。(1 0 0 1~)

○石 器.....頭番号を2とする。(2 0 0 1~)

○陶磁器.....頭番号を3とする。(3 0 0 1~)

○その他.....頭番号を4とする。(4 0 0 1~)

目 次

序

例 言

第1章 遺跡の環境	1
第1節 遺跡周辺の地形と立地	
第2節 歴史的環境	
第2章 発掘調査の経過	7
第1節 発掘調査の方法	
第2節 発掘調査の経過	
第3章 遺構	11
第1節 基本的層序	
第2節 遺構と遺物の分布	
第3節 遺構	
1 住居跡	
2 土坑	
3 ピット群	
第4章 遺物	35
第1節 土器	
第2節 陶磁器	
第3節 石器	
第4節 その他	
第5章 自然科学からの検討	90
除地遺跡出土のサヌカイト、黒曜石製造物の原産地分析	
第6章 考 察	95
参考文献	
図 版	

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 東白川村内河川図	2
第3図 周辺遺跡位置図	5
第4図 地区設定図	9
第5図 層序模式図	12
第6図 陰地遺跡構造配置図	15
第7図 5B区周辺の遺物出土状況	17
第8図 1号住居跡	19
第9図 1号住居跡・炉	20
第10図 1号住居跡・埋甕	20
第11図 1号住居跡遺物出土状況	20
第12図 2号住居跡	22
第13図 2号住居跡・炉	23
第14図 2号住居跡内土坑	23
第15図 2号住居跡遺物出土状況	24
第16図 4~9号土坑	25
第17図 1~3号・10~12号土坑	27
第18図 13~17号土坑	29
第19図 18~21号土坑	31
第20図 22~26号土坑	32
第21図 ピット群	33
第22図 繩文土器I~III群	38
第23図 繩文土器III・IV群	40
第24図 繩文土器IV群	43
第25図 繩文土器IV~VI群	44
第26図 繩文土器VII群、その他	46
第27図 陶磁器(1)	49
第28図 陶磁器(2)	50
第29図 陶磁器(3)	52
第30図 打製石斧形態模式図	61
第31図 石鏃形態模式図	62
第32図 打製石斧(1)	67
第33図 打製石斧(2)、石鎌	68
第34図 石鎌・石錐・楔形石器	69
第35図 削器・敲石・石錐・石匙・石槍	70
第36図 砥石・石核・二次加工のある剥片	71
第37図 使用痕のある剥片	72
第38図 下呂石剥片重量分布図	85
第39図 チャート剥片重量分布図	85
第40図 黒曜石剥片重量分布図	87
第41図 その他の石材剥片重量分布図	87
第42図 その他の出土遺物	89
第43図 サヌカイト原産地	94
第44図 黒曜石原産地	94

表目次

第1表 土坑一覧表	34
第2表 遺構・遺物番号対照表	45
第3表 年代対応表	56
第4表 時期別総個体数	56
第5表 時期別產地別構成比	57
第6表 時期別用途別構成比	57
第7表 陶磁器計測表(1)	58
第8表 陶磁器計測表(2)	59
第9表 陰地遺跡石質別剥片出土状況(1)	65
第10表 陰地遺跡石質別剥片出土状況(2)	66
第11表 打製石斧1類計測表	73
第12表 打製石斧2類計測表	73
第13表 打製石斧3類計測表	73
第14表 打製石斧4類計測表	74
第15表 打製石斧5類計測表	74
第16表 打製石斧6類計測表	74
第17表 打製石斧7類計測表	74
第18表 石鎌計測表(1)	75

第19表 石鎚計測表（2）	76	第27表 使用痕のある剥片計測表（2）	83
第20表 石鎚計測表（3）	77	第28表 使用痕のある剥片計測表（3）	84
第21表 石鎚計測表（4）	78	第29表 陰地遺跡出土のサヌカイト製石片 分析結果	93
第22表 石錐計測表	79	第30表 陰地遺跡出土の黒曜石製石片の分 析結果	93
第23表 楔形石器計測表	80	第31表 陰地遺跡出土の黒曜石・サヌカイ ト製石片の原材産地推定結果	93
第24表 削器計測表	80		
第25表 二次加工のある剥片計測表	81		
第26表 使用痕のある剥片計測表（1）	82		

写真図版目次

巻頭図版

巻頭図版1 遺跡周辺航空写真（上空・西から）

図版

図版1-1	1号住居跡
図版1-2	1号住居跡 炉
図版1-3	1号住居跡 埋甕
図版1-4	1号住居跡 据削状況
図版1-5	2号住居跡 炉
図版2-1	2号住居跡
図版2-2	S K 4 ~ 7
図版3-1	S K 8 ~ 9
図版3-2	S K 10
図版4-1	S K 12
図版4-2	S K 21
図版5-1	I群土器
図版5-2	II群土器
図版6-1	III群土器 1 ~ 3類
図版6-2	III群土器 4類①
図版7-1	III群土器 4類②
図版7-2	IV群土器 1類
図版8-1	IV群土器 2 ~ 3類
図版8-2	IV群土器 4類
図版9-1	III群 把手
図版9-2	V群土器

巻頭図版2 1号住居跡・埋甕

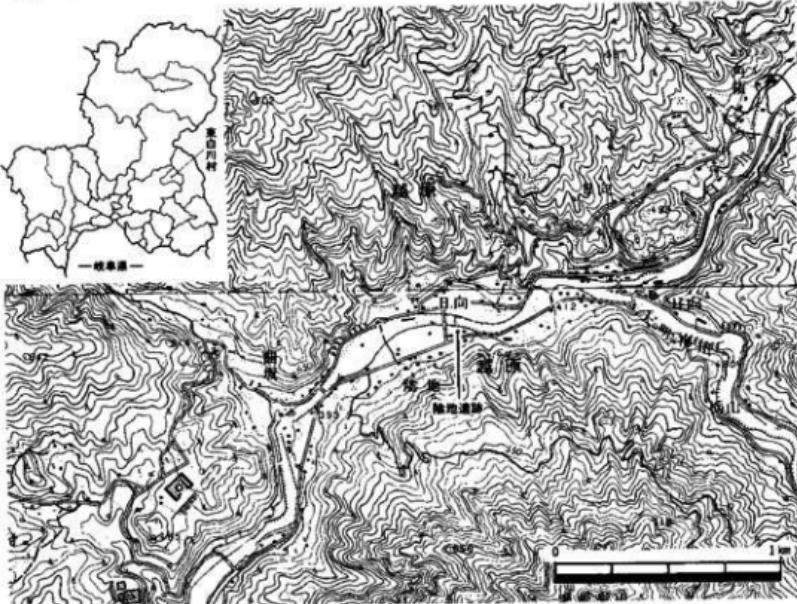
図版9-3	VI・VII群土器
図版9-4	弥生時代中期の土器
図版10-1	2号住居跡炉体土器
図版10-2	III群土器 4類
図版10-3	石鎚
図版11-1	打製石斧 1類
図版11-2	打製石斧 2類
図版12-1	打製石斧 3類
図版12-2	打製石斧 4 ~ 6類
図版13-1	打製石斧 5類
図版13-2	打製石斧 7類・石錐
図版14-1	石錐・U F・R F
図版14-2	石核
図版15-1	楔形石器
図版15-2	石槍・石錐・敲石・削器
図版16-1	山茶碗
図版16-2	青磁・白磁
図版16-3	青磁製品
図版16-4	青磁製品・その他の中世陶器
図版16-5	大窯製品・近世陶磁器
図版16-6	近世陶磁器

第1章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の地形と立地

岐阜県東白川村は県の東部、いわゆる「東濃地方」の北端に位置し、総面積は87.18km²を占める。土地の形状はほぼ三角形を呈し、東西に14km、南北に11kmを測る。

この地方は地形区分のうえで、美濃山地の南東部にあたる。美濃山地は飛騨高原からほぼ南北に連なり、高度800~1,200mに山頂を有するいわゆる定高性をもつ山地である。徴観的に見れば、北西から南東方向へ走る阿寺断層によって二分され、阿寺山地と二ツ森山地に区分される。東白川村は白川を境に二ツ森山地（註1）と佐見山地（註2）に細分される。村内における山稜は、最も高いところで越原新巣山の1,146m、次いで尾城山の1,133m、寒陽気山の1,108mと統くが、概ね800~1,000mといった標高である。これらの山地の山腹から山麓には堆積した岩屑からなる山麓傾斜面が発達している。山麓傾斜面は土石流堆積物や崖崩落物からなる場合が多い。



第1図 遺跡位置図

東白川村や隣接する付知町、加子母村は「東濃松」の主産地として全国的に知られるとおり、全村の地目別面積の中で約9割が山林（手入れされた人工林）である。その他、山麓の傾斜面は茶畠、桑畠が主に利用されている。

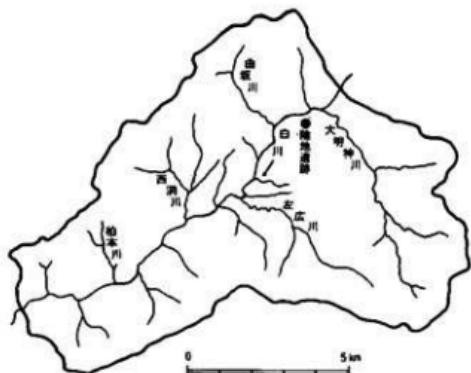
地質について略記すると、美濃山地の南東部は火山性岩石の飛流紋岩のまっただ中にあるといえる。飛流紋岩の他には、深成岩の花崗岩質岩石および花崗斑岩、火山性岩石のディサイト質岩石が分布する。

山稜を縦横にめぐる水系の中心は白川である。白川は源流部を加子母村の三国山（1,161m）のふところにもち、阿寺山地において南西流しながら途中約90度流向を転換し、東白川村の中央部を北東から南西にめぐる。このように流曲するのは阿寺断層による横ずれ逆断層に起因する現象である。その他、第2図に示すように大明神川、左広川、西洞川、曲坂川、柏本川があるが、どれも白川に注いでいる。この白川は飛驒川の本流と西に接する白川町において合流し、巨視的にみればここは飛驒川中流域をなす。

陰地遺跡は白川の河岸段丘上に位置し、調査地番は越原字陰地1003、1006などが相当する。現地目は畠地となっており、標高は406m前後を測る。遺跡をのせる段丘は白川によって形成された東西にのびる地形であり、その北端の川沿いに位置する。

（註1）二ツ森山地：二ツ森山（1,223m）を最高峰とし、美濃山地の南端部に位置する山地である。北東端を阿寺断層に、北西端・西端を白川と赤河断層に、南端を木曾川本流によって包囲された山地である。

（註2）佐見山地：尾城山（1,133m）を最高峰とし、北西端を阿寺断層に、南東端を白川に、西端を飛驒川本流によって包囲された山地である。



第2図 東白川村内河川図

第2節 歴史的環境

陰地遺跡は、調査前まで畑地として利用されていた。それ以前には水田として使用されていたが、畔道などで古くから地元の収集家によって石器等の採集が行なわれ、その存在が知られていた遺跡の一つである。昭和47年に旧越原小学校の教員であった今井透氏によって、県の遺跡地図作成作業の一環として分布調査がなされ、あらためてこの地が埋蔵文化財の有力な包蔵地であることが確認された。次いで村誌編纂事業の際、中島勝国氏による踏査が行なわれ、村内外に紹介されるに至った。飛驒川や木曾川など大河川流域の遺跡に視点が集まっていた中で、その中間に位置する白川流域の遺跡を調査しつつ、収集家から遺物の実見をし、記録に取めたことに先駆の成果を知ることができる。

村内における白川流域には、その河岸段丘上に大明神遺跡・車屋台遺跡・陰地遺跡・池之島遺跡・宮代遺跡がある。それぞれ縄文中期中葉から後期にかけての遺跡である。段丘の後背部に位置する舌状台地には日向遺跡・菊久里遺跡・神付遺跡・高根遺跡がある。いずれも出土遺物から縄文時代のものであるが、詳しい時期等は不明である。さらに山麓傾斜地には同木林遺跡・平遺跡・西洞遺跡・大口遺跡がある。陰地遺跡周辺の縄文遺跡は車屋台・菊久里・池之島であるが、これらは白川左岸にはほぼ300~400mおきに分布し、いわば越原遺跡群としてとらえられる。白川の河岸段丘は低位と高位の二つに分かれるが、この4遺跡は低位段丘にあり標高も同様な数値を示している。

村外に目を移すと流域には約30の遺跡が確認されている。これも含み、陰地遺跡が白川流域における初めての発掘調査となった。



調査風景

4 第2節 歴史的環境

以下、東白川村内の主要な遺跡について概要を記す。

- 1 日向遺跡（東白川村越原大林洞）石鎌、石匙の採集がある。先土器の遺物の出土の可能性あり。
- 2 車屋台遺跡（東白川村越原陰地）石鎌、縄文土器片の採集がある。
- 3 陰地遺跡（東白川村越原陰地平）平成5年度発掘調査
- 4 菊久里遺跡（東白川村越原陰地）石鎌の採集がある。
- 5 池之島遺跡（東白川村越原陰地）石鎌、石匙の採集がある。平成1年圃場整備により一部滅失。村誌には畦地遺跡と記載されている。
- 6 同木林遺跡（東白川村越原曲坂）石鎌の採集がある。
- 7 平遺跡（東白川村神土上小林）縄文中期・後期土器片、石鎌、打製石斧、異形石斧の採集があった。昭和45年滅失。
- 8 神付遺跡（東白川村神土西根）石鎌、打製石斧、磨製石斧の採集がある。村誌には中通遺跡と記載されるが、これは神付から約150m南に存在する。
- 9 西洞遺跡（東白川村神土西洞）石鎌、石刀片、山茶碗の採集がある。
- 10 高畑遺跡（東白川村神土高畑）石鎌の採集がある。昭和63年圃場整備により一部滅失。
- 11 大口遺跡（東白川村神土早稲田）石鎌、石匙、磨製石斧の採集がある。昭和63年圃場整備により一部滅失。
- 12 高根遺跡（東白川村五加高根比良）石鎌、石錐、石匙、磨製石斧、石刀の採集がある。村誌に記載される柏本遺跡は同一地点である。
- 13 宮代遺跡（東白川村五加宮代）石鎌、打製石斧、古墳時代後期の土師器の採集がある。
- 14 大明神遺跡（東白川村越原大明神）石鎌、乳棒状磨製石斧の採集がある。白川の支流である大明神川流域にあたる。



遺跡付近航空写真（北西から）



（東から）

第2章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の方法

現地での発掘調査は平成5年5月13日に開始し、平成5年11月21日に終了した。

発掘調査に入る前に、現地形の測量、ボーリング等の予備調査を行ない、遺物散布の中心は西側の畠地にあること、東側は家屋の移転後の土地で遺物包含層が薄く、遺構の存在の可能性が低いこと、表採された石器の剝片・碎片から石材にいわゆる下呂石が多用されていることを把握した。また、家屋隣の駐車場に敷設されていたコンクリート敷を重機によって除去した。調査区の西南隅には室町後期のものと推定される五輪塔が立っていたが、この位置そのものが原形のものではなく、田直しなどの際に移動し、田の畦の一角に据え置かれていたこと、さらに林洞地内の庚申塚とともに道路改良工事に伴い、一箇所に集められること等により、今回の調査に収めないこととした。(註1)

調査方法としては、グリッド方式による平面発掘を採用した。調査区全体に4m×4mのグリッドを設け、北から南にA列・B列・C列………、西から東に1列・2列・3列………、とした。方位は磁北に合わせてある。後述するように、表土から地山（完新世における岩石の風化堆積物）まで比較的浅く、表土中からも遺物が顕著に出土するため、初めから手堀で掘り下げていった。また、III層遺物包含層における縄文時代の遺物は搅乱層を除いて、遺構の有無、遺物の大小にとらわれず、いわゆる全点記録方法をとることにした。また、土層の堆積状態を記録するため30K区を深掘した。

(註1) 高さ68cmを計るもので、各輪に梵字は認められない。由来については不明な点が多く、上級の武士・僧侶の墓、あるいは供養塔であると考えられている。

(昭和58年 東白川村の石造物 第1集より)



五輪塔



調査前風景

第2節 発掘調査の経過

5月13日に調査始め式を行なったが、その前に現場事務所の設置、ベルトコンベアーや道具の搬入、杭打ち作業を行なった。当初の問題点は、調査区域周辺に空地がなく、排土排石の場所を確保できることであった。やむなく調査区域内の東側にそれを仮に設け、本調査は藤の木橋に近い西側に設定したグリッドから順に行なうことになった。この付近は畠地であったことから表土は柔らかく掘り進めやすい。しかし、農耕機械等による耕作の結果か出土する遺物、特に山茶碗等の陶磁器は小さな破片となってあらわれた。また、下呂石の剥片・碎片の出土が頻繁にみられ、予備調査で得た本遺跡の傾向を証明した。

表土下は旧水田の床土が固く敷きつめられており、これを掘り下げると黒褐色の土層があらわれた。これをその性状から遺物包含層と位置付けたが、これら畠地の直下すべてに包含層が安定してみられたわけではなく、北側つまり白川に近付くほど厚く、反対に南側、高位段丘に近付くほど薄くなっていくという状況であった。

1・2・3列及び4C・5C区より南側は、この黒褐色土層すなわち遺物包含層を掘り下げると人頭大の河原石が露出する状況で、確認される遺構は皆無という結果に終った。これらの河原石は過去にこの地が川床底部であったことを推測させた。

遺物の出土、遺構の検出の期待が高まる中で、4A区において縄文後期前半の土器片や打製石斧等の石器類の出土が徐々にみられ、遺構確認面とした黄褐色土の地山面において多くのピット群が検出され始めた。隣接する5A区・5B区においては黒褐色の堆積土が円形を描いて確認され、直径約5mの豊穴住居跡の検出に至った。南北に10m幅を計る調査区域で白川側に近いグリッドほど縄文の遺物が多く出土した。さらに東進し、7D・8D区では円形又は長椭円形の土坑が単独あるいは重複した状態で検出されたが、包含層の堆積は認められず、縄文時代の遺物は少數で、中世の陶磁器類が主に散見された。調査区中央部の13E区においては、まず石囲い炉が検出された。石組みの中央には口縁部まで縄文が施された小形の土器が設置されており、住居跡の存在を予想させた。検出においては細心の注意を払ったが、壁の立ち上がりが薄く、埋土内の遺物も耕作等の作業において削平を受けるなどして多くは散逸してしまったものと思われる。幸いにして、炉そのものは原形をとどめていた。16F区より東は家屋移転後であること、表土の直下に崖錐堆積物が広がることなどにより、遺物遺構は確認されなかった。

以上、確認された遺構は、8月中旬より1号住居跡、2号住居跡の順に着手し、その他の遺構はほぼ確認の順序に沿って行い、11月中旬に終了した。

長雨で現地の調査が継続的に展開されないこと、排水に時間を要した調査であったが、空撮の後に現地説明会を11月21日に催し、それ以降は報告書作成にかかる作業を続けてきた。

第3章 遺構

第1節 基本的層序

陰地遺跡は北に緩傾斜する段丘上に立地するため、土層の堆積状態、厚さは地点によってかなりの違いがある。遺物包含層が比較的安定して堆積していた4A区の土層を基本層序とする。これは第I層（表土）より第VII層まで区分される。

以下、各土層の性状を概述する。

第I層：表土 色調はやや灰青色がかった暗褐色を呈する。粒子が細かい耕作土である。全般に軟質で粘性がややある。山茶碗や下呂石製のフレイクを多出す。

第II層：赤茶褐色土 鉄分やマンガン分の沈殿により色調は錆色とでもいう感じである。旧水田の敷土のため極めて硬質である。炭素粒子を含むが肥料として播かれたものであろう。

第III層：黒褐色土 色調は黒褐色の單一層。少量の円礫を含むが、土質は軟質で粒子は細かい。この層から縄文後期の遺物が出土し始めた。なお、III層からV層を遺物包含層とした。

第IV層：茶褐色土 色調はIII層と厳密に区分しにくいか、比較的明るい色調であることと若干硬質であることで分層した。

第V層：黒褐色土 III層と同じ色調である。粒子は細かく、粘性に富む。当層において検出した試料をもとに¹⁴C年代測定を鶴バレオ・ラボに依頼した。その結果4,430±90(B.P)という縄文時代中期に相当する年代が得られた(Gak17447)。

第VI層：黄褐色土に移行する漸移層（黒褐色土と黄褐色土の混入土）が部分的にみられた。

第VII層：黄褐色土 砂質シルト層である。完新世における岩石風化物の堆積による。地点によつては黄褐色土よりも人頭大の河原石が密に分布する。現在の白川は低位段丘との落差が5m程であるが、過去においては広く浅く分流していた時期があったことを物語る。

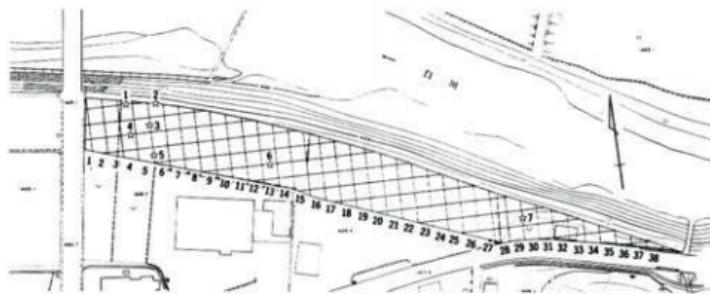
IV層でいったん遺物の出土量が減る傾向がみられた。この層辺りが陰地遺跡の生活面、遺構構築面と考える。色調の判別の困難さから遺構確認面は第VII層上面において。

それぞれの層厚であるが、I層が10~20cm、II層が約5cm、III層が5~15cm、IV層が5~15cm、V層が5~10cmを計った。各層厚に開きが出てくるのは、地形がもたらす自然作用もあるが、遺跡が畑地あるいは水田として利用されてきた関係も大きい。この基本土層のとおりに考えてよいのはおよそ8列か9列までで、それより東は表土の下に水田敷があらわれ、次に厚さ

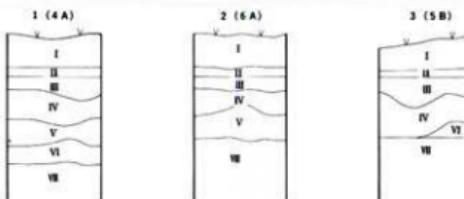
12 第1節 基本的層序

5 cm程の暗褐色土が広がり、再び水田敷（改田前の旧水田）があらわれるという状況で一筋縄にいかない結果となった。

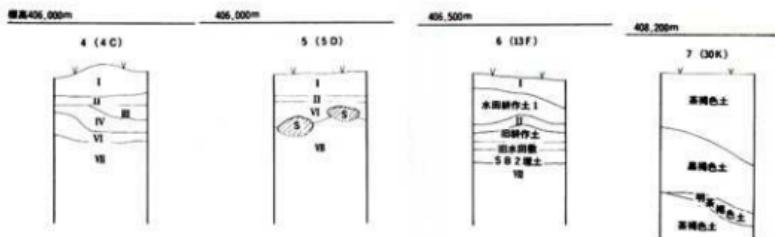
以上を、本遺跡の基本堆積土層及び特性として、次章以下の記述の際に使用する。



標高405,000mライン



S = 1/30



第5図 層序模式図

第2節 遺構と遺物の分布

遺跡は北を白川、南を南東方向から入る山麓傾斜地に囲繞された東西方向に延びるほぼ平坦な河岸段丘上に立地している。立地の平均的な標高は405.5mである。

近年の護岸工事によって河川の流向は安定しており、北側直下は崖状になっている。しかし調査区の西側（村営の公園付近）は川に向かって徐々に標高を下げていく地形で、土地が川側にせりだしていることや第5図に示したように北側へ向かうにつれ遺物包含層が厚く、遺物の分布密度が高いことを勘案すると、陰地遺跡の本来の中心は今回の調査地点よりも北西側にあったことが推察される。

検出された遺構は、縄文時代中期中葉・中期後葉・後期前葉・鎌倉時代末から室町時代及び判定不可能なものであるが、大半は縄文時代中期中葉から中期後葉に属する遺構である。

確認された遺構は以下の通りである。

竪穴住居跡 2軒

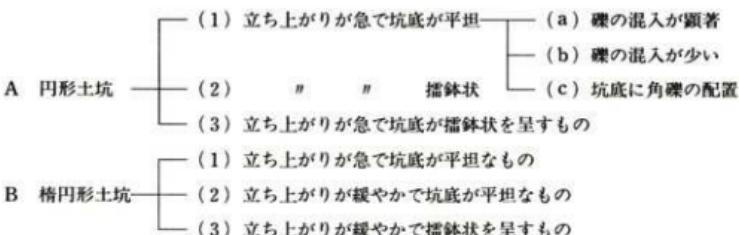
土坑 26基

その他ピット群が北西部に存在する。

検出された範囲内で見れば、住居跡は標高405.1mから405.7mの間に占地し、他遺跡の類例と同じく、水はけの良い若干の傾斜地を選択していることがわかる。1号住居跡の周辺に存在するピット群は、その覆土の性状及び形態や位置関係から住居跡の可能性を残したが、最終的な判定資料が得られず、散在するピット群として扱う。しかし全体からみると有意味な占有域をなしていたことが看取される。

土坑については中世の土壤墓と推定されるものを除き大別すると、住居跡から離れて集中して存在するものと2号住居跡に接する土坑との違いが注目される。

26基の土坑は、内容的には次のように分類される。



- C 長方形土坑
- (1) 立ち上がりが急で坑底が平坦なもの
 - (2) 立ち上がりが緩やかで階段状を呈するもの

D その他、不整形をなすもの

土坑のあり方は個々に特徴があり、このように分類図式化して単純にとらえられないことはいうまでもないが、機能面に由来するものであることは推定されるであろう。覆土中の礫の混入や規模により細分されるが、詳細は次節以下で述べることにする。

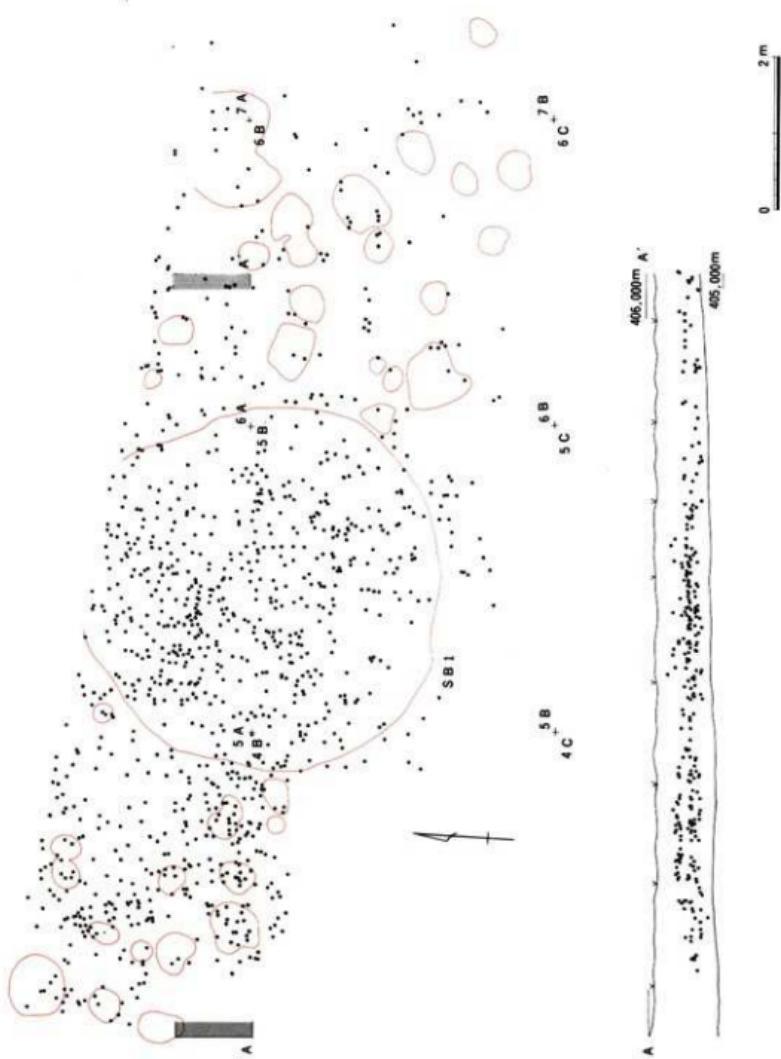
遺物の出土分布にみられる大きな特徴は、調査区域の東西における分布状態（密度）の差である。11列を境として東に位置する遺構は2号住居跡と7基の土坑であるが、遺物出土の割合は低い。改田や畠地耕作は地形を平坦化させる。このために包含層の大半が移動したことが考えられるが、全体的に出土量が少い。西側は1号住居跡を中心とした区域に遺物分布の中心がある。遺構内に出土量が多い傾向が他遺跡の報告で知られるが、覆土が十分に残るもの散漫であった。なお、1・2号住居跡ともに覆土中に人頭大又はそれ以下の礫（河原石）が混入していた。



1号住居跡付近



2号住居跡付近



第7図 5B区周辺の遺物出土状態

第3節 遺構

1. 住居跡

1号住居跡（第8～11図）

調査区域西側、5A・B区、6A・B区にかけて位置する。このグリッドの北側は調査区と民有地の境にあたり、この土層を確認しつつ掘り下げていったが、遺構の掘り込み面は茶褐色土又は黒褐色土層中にあると思われるものの判定は極めて困難であった。しかし、本遺跡の場合はVI層とVII層の色調の差が明瞭で、VII層上面で黒褐色土の分布を調べると円に近い形で遺構のプランを想定でき、最終的に検出された住居跡の形状と一致した。このことは2号住居跡と違い、検出はやや容易であった。また、搅乱もなく保存も良好であった。

規模は長径4.7m、短径4.6mを計り、形態は隅丸方形を呈す。壁は軟弱で急傾斜をなし、壁高は確認面から平均30cmである。しかし壁の北側一部は調査区域外にかかり確認されていない。壁溝は南壁、東壁下に認められ全体の1/3周を巡る。幅は10cmから20cm、深さは平均9cmを計り、壁溝直上の立ち上がりは他よりもいくぶん高いものとなっている。主柱穴は4本で、深さは30cmから38cmを計り、形状とともに概ね均衡している。

炉跡はやや東よりに位置して方形の石囲い炉が存在する。炉の一辺が欠落しているが、炉中央付近に斜位に立石が本来は炉の縁辺を構成していたものと思われる。これは炭化粒子を含む暗茶褐色土に下端部をくい込ませている。また、東側の周溝近くに位置して凝灰岩の角礫が存在する。床直上で検出され、側面から見る形態は三角形状で底径55cm、高さは15cmを計る。炉の残存部分の径は約120×115cmを計り、円礫は流紋岩、角礫は花崗斑岩である。内部には焼土はあまり堆積していないが、径7～10mmの炭化粒子がみられた。床面は西側から炉跡にかけて硬化した面が認められ、硬化部分の厚さは平均8cmを計った。なお、柱穴2と4に近接して小ピットがあるが、これは床面硬化部分を剥いたのちに検出されたものである。

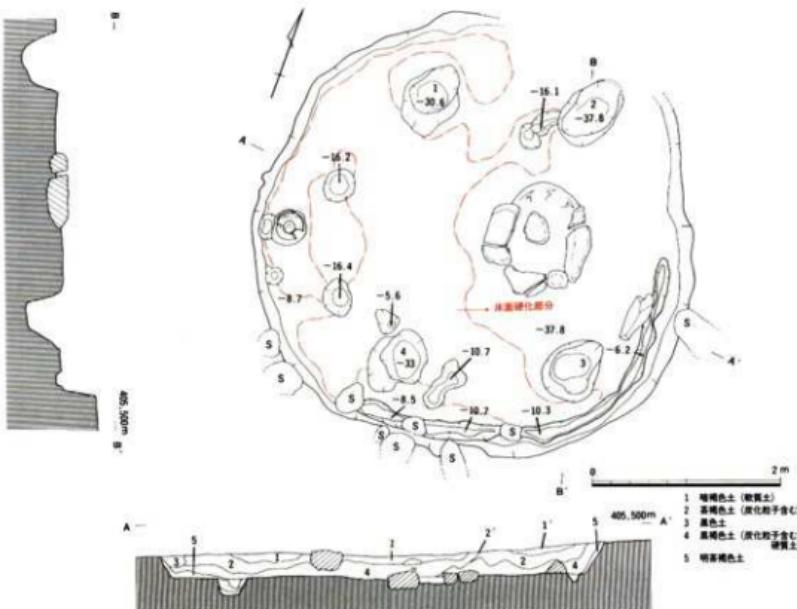
西壁直下には埋甕が1個体発見された。この両側には径約35cm、深さ約15cmのピットが検出され、埋甕と関連した出入口部を構成する機能を持つものと考えられる。埋甕は口縁端部を欠くものの、ほぼ完形で正位埋設されており、土器内部に若干の炭化粒子を含む明茶褐色土が充填されているほか、径2～3cmの小礫が10個、径5.6cmを測る円礫が1個、土器の内部中央より検出された。掘形はほぼ土器の形態にそって掘り込まれており（深さ30cm）、土器と掘り込み間に貯入する土はみられなかった。

埋甕と壁とのわずかな間に小ピットが検出されたが、内部からの遺物の出土はなかった。この冒頭で触れたように住居跡の形態は隅丸方形である。この時期の他遺跡の住居跡検出例で知

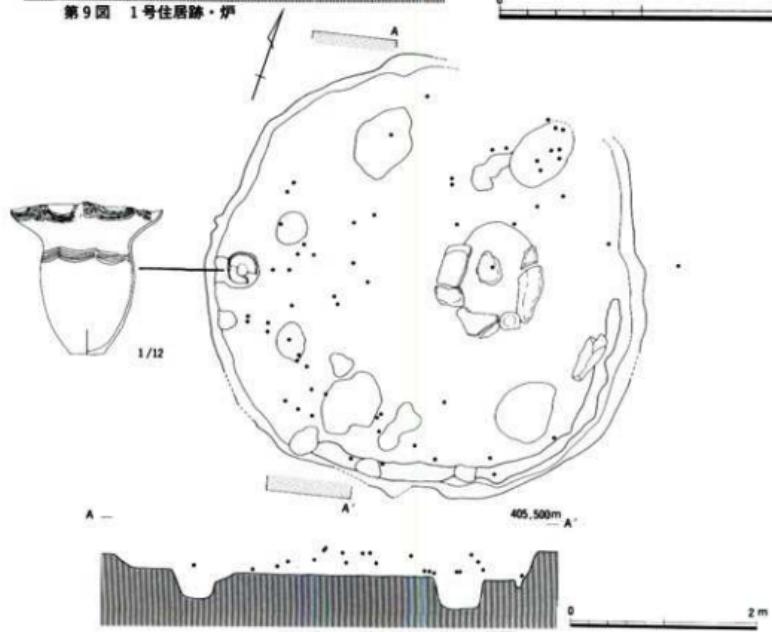
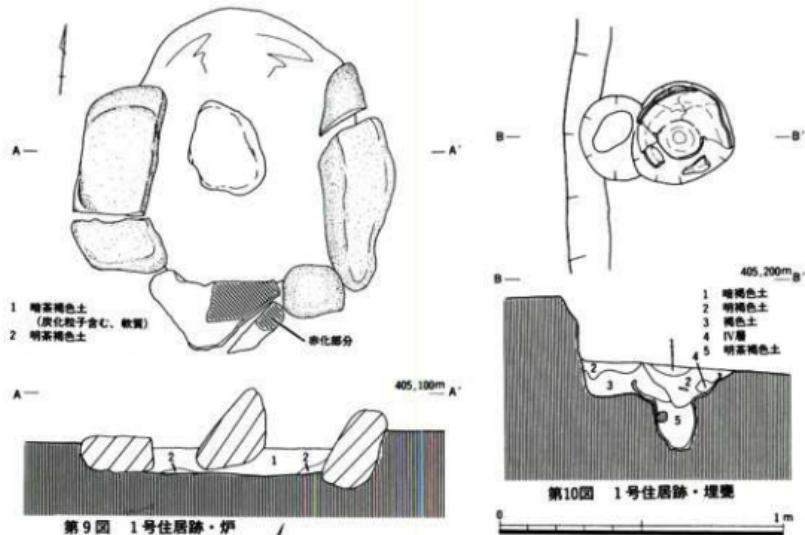
られるごとく、埋甕の位置する一辺についてはいくぶん壁が内湾する傾向がある。埋甕と火跡は直線的に配置され、主柱穴と火跡はこの住居跡の中にあって東側による傾向を示している。住居跡の時期は埋甕の型式から中期後葉、中富IV式期と考えられる。

覆土は黒褐色土を基本に堆積し、色調・混入粒子・粘性の状態で5層に分層できるが差異はわずかである。中にはあたかも土器の胎土と思わせるような黒褐色の硬質土がブロック状に入っていた。中層以上には30個余りの礫（河原石）が混入していた。これが廃棄行為によるものか不明であるが注目される。礫のほか遺物の出土は南西部分に若干集中する傾向があるものの、概して稀薄である。床面及び直上の出土はわずかでこの住居跡に明らかに伴う遺物は埋甕のみである。

なお埋土中からは第I群2類の条痕文土器1002、第II群の羽状縞文を施された土器が1012のほか5点、第III群1類の北屋敷式土器1022、4類の曾利式土器1034・1036、第IV群2類の条線を施す土器1071を含め2点、その他無文土器が8点出土するなど他系統の土器が混在していた。石器類については黒曜石の剥片・碎片が4点、下呂石を主体とした剥片等が21点出土した。



第8図 1号住居跡



2号住居跡（第12～15図）

調査区中央部、13E・F区、14E・F区にかけて位置する。13E区を掘り下げていく過程で遺物の散布する箇所が認められた。本住居跡に伴うものとして初めて確認されたものは炉の縁石5個とその中央に設置された土器であった。表土より約30cm下において炉を確認したため、壁の立ち上がりは耕作等の搅乱によって消滅していると思われたが、各グリッド間を貫く断面観察用の畦を利用して層序の確認を行なった結果、壁と推定される色調の変化を把握し、全体の調査を実施した。

形態は五角形状の不整形を示し、規模は最大幅東西3.4m×南北3.3mを計る。覆土は茶褐色土を基本に堆積しており4層に細分できる。下位にいくほど固く締まり、VII層黄褐色土がブロック状に混入する。壁はゆるやかに立ち上がり床面からの壁高は確認した範囲で平均8cmである。覆土上層と壁の削平を考慮し、F列の土層断面を観察すると20cmは立ち上がるものと考える。

床はVII層上面から20～30cmほど下の面にあり、ほぼ平坦で東側P1からP9の柱間ににおいて硬化部分が認められた。この厚さは平均7cmを計った。

ピットは10口確認され、明らかに柱穴と考えられるものはP1・3・7・9である。小形で深さは13～23cmを計る。柱穴内の埋土は白色粒子を含み、締まりが強い。五角形状を呈すことから柱穴の決定に苦慮するが、先述のピットに加えP5が深さと埋土の色調が近似しており、これを含めた5本を本住居跡の柱穴と考える。また、P10は貯蔵穴様の機能が考えられる。深さは30cmで他に比べ深い。埋土は2層に分層された。下層は小石や炭化粒子を多く含みよく締まっていた。

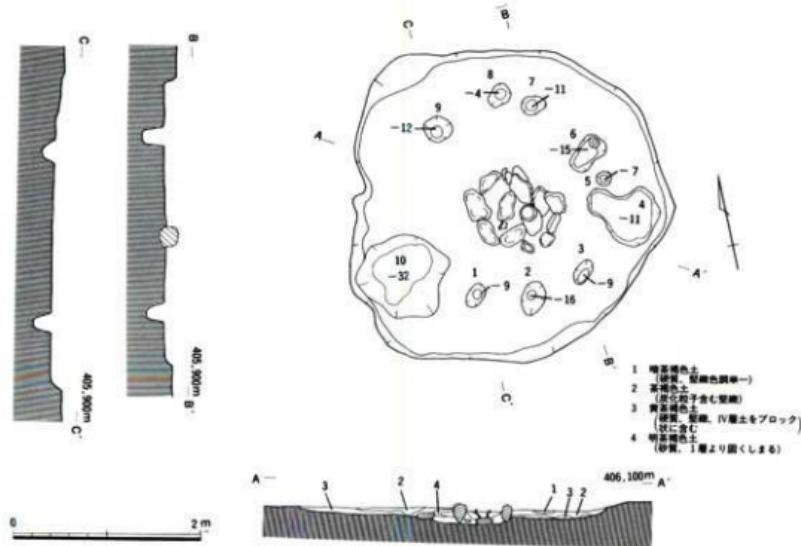
炉は住居跡のほぼ中央部に位置して石囲い炉が存在する（第13図）。比較的平盤な縁石（流紋岩）が複雑に遺存しているが、その性状を観察すると2基存在するようである。これは複数の時期にわたって使用された累積であるとみられ注意を要する。第13図1～9の縁石は先行する時期のものと考えるが、これらは横位で存在する（註1）。住居廐棄に伴う炉の破壊によるものではなく、断面を観察すると床面に埋設された様相を看取できる。なおかつ立位又は斜位で存在する10～15の縁石の多くは下部に埋まっている縁石との重なりがみられ、10の直下からは炭化材が検出されている。いわゆる複式炉の可能性もあるが、各々の炉の主軸にずれがみられることから考えにくい。敷衍すれば2期にまたがる炉の設置がこのような景観をみせるものと考える。しかし住居の建替えに伴うものか、同一住居の複数の時代にわたる使用的結果かは、この住居跡の包蔵する情報からは勘案しがたく、今後の類例を俟ちたい。なお、第25図0004の土器は炉中央に設置された炉体土器であり、旧炉縁石の上に載っていた。

遺物の出土は、保存状態を考慮に入れても少いといえる。本住居跡に伴うものは第25図0004の炉体土器、床面に斜めに突きさざって出土した第33図2014の打製石斧である。第22図0001の各土器片は床面から3～13cm浮いた状態で出土した。この接合関係は第15図に示すとおりであ

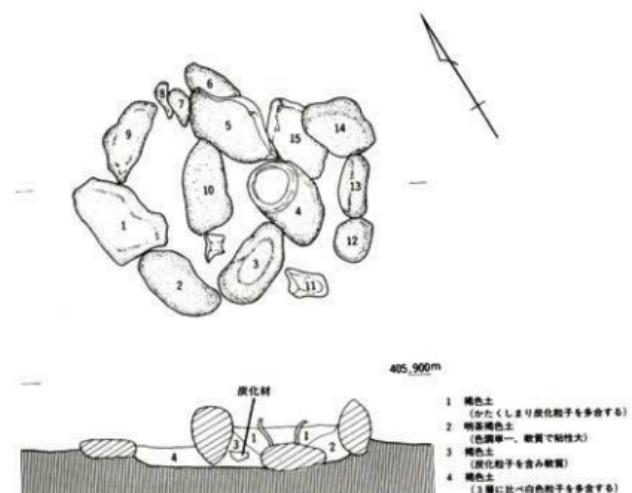
る。曾利I式期に属し、本住居跡の時期は該期ないしは若干古い段階に求められる。

埋土中からは上記のほか、第III群1類の北屋敷式土器が1点、3類の里木式土器1028、4類の曾利式土器が1030をはじめとして16点、第VI群の縄文のみのもの1100、無文土器が14点出土した。石器は打製石斧が3類の2007、4類の2009、5類の2012、6類の2014、石鏃についてはI類の2020が出土した。その他、使用痕のある剥片が2059の1点、黒曜石の剥片・碎片が3点、下呂石の剥片が15点出土した。

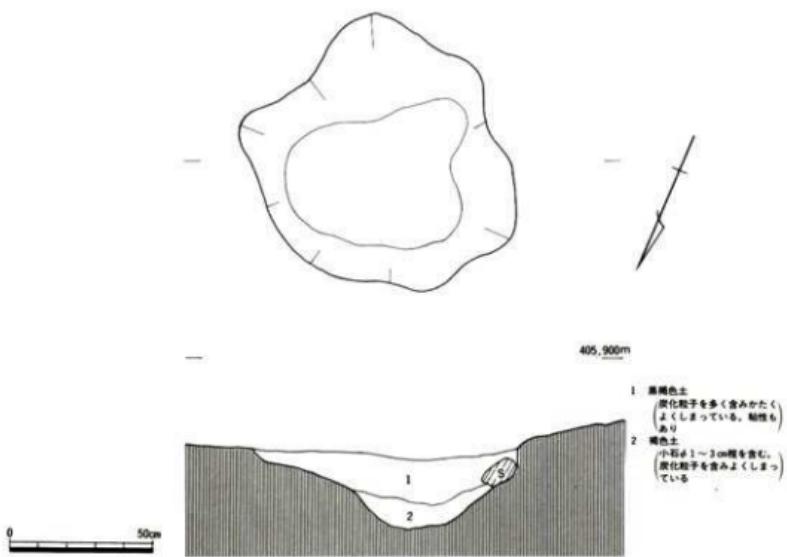
(註1) 第13図で示す10~15の綠石の周辺を掘り下げていく際にこれら横位で存在する綠石が検出された。当初1号住居跡と同様に覆土中にみられる河原石、あるいはこの付近一帯にみられる旧川床の礫かと思われたが、覆土最下層に薄く堆積する黄茶褐色土(非常に固く締まり粒子は細かい)を剥いでいくと、先行すると思われるがの綠石が検出された。



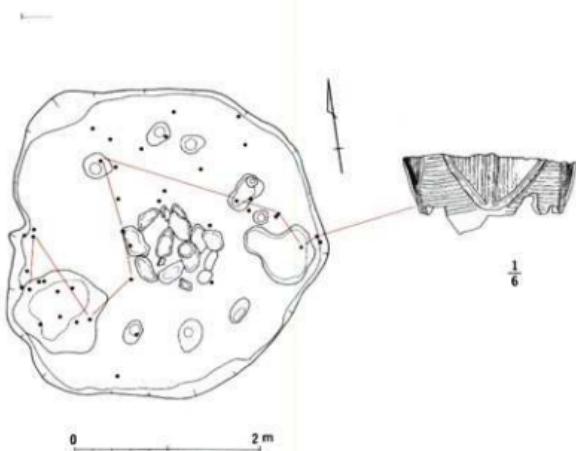
第12図 2号住居跡



第13図 2号住居跡・炉



第14図 2号住居跡内土坑



第15図 2号住居跡遺物出土状況

2. 土坑

1号土坑（第17図）

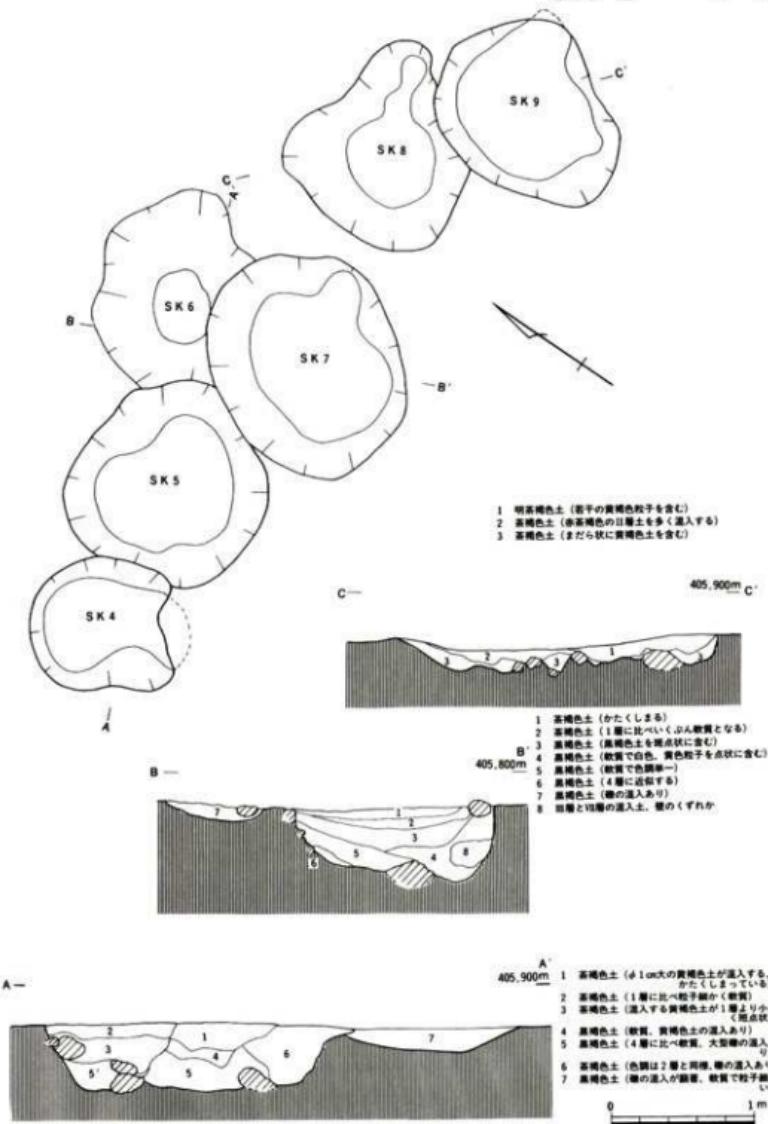
4D区に存在する。周辺に旧河床底礫が多い中でここは比較的礫が稀薄であった。掘り込みは薄く、改田の際上部が削平され、敷土とともに覆土は固く締められている。平面形は橢円形を呈し、規模は125×75cm、深さは20cmを計る。出土遺物は山茶碗の小破片1点のみである。

2号土坑（第17図）

5C区に存在し、南東2mの地点には同形態の1号土坑が位置する。旧河床底礫の中を穿つてあり、覆土は黒褐色土の單一土層の他、拳大の礫が含まれていた。平面形は橢円形を呈し、規模は125×85cm、深さは34cmを計る。覆土に焼土や炭化粒子は無く、出土遺物は確認されなかった。

3号土坑（第17図）

6C・D区から7C・D区にかけて存在する。円形を呈し、坑底は擂鉢状を呈すが坑壁は急傾斜である。他の土坑にもみられることであるが地山に大形の河床底礫を含むことが坑底の形状を整える際に影響したのではないかと思われる。開口部の形状と坑底の形状が一致しないのはこのような土地の持つ特性に左右されたと考えられる。覆土は2層に分層された。上層は黒褐色土を基本にし炭化物を含みしまりがある。下層は黄茶褐色土層であった。



第16図 4～9号土坑

4～9号土坑（第16図）

これらの土坑は互いに重複しあい、7・8D区にかけて存在する。規模は第1表に示したとおりである。形態は8号が不整形、9号が橢円形に近いが、坑底の状況は6号も含め円形を基本にしている。深さは4・5・7号が50cm余りを計るのに対して、その他は20cm余りと比較的浅く、地山の大形礫が露出する。性状から看取できる共通性は覆土のあり方で、どれも黒褐色土を基本にした土層で、IV層の黄褐色土をブロック状又は点状に混入させ軟質な点である。また炭化粒子を含んでいる。人頭大の礫を多く含むものは4号土坑であったが、断面図に示した分層ラインは色調の差というより硬軟の差である。各々は掘り上げた後に一気に埋め戻しを行なったかのような感を持たせる。各土坑の新旧関係についてはその断面を観察すると5号（古）～4号（新）への遷移が認められる他、5号と7号の接する面には坑壁の崩れを防ぐために設けたと思われる河原石の石積みがみられ、7号は5号の一部を切って掘られたと考えられる。その他は不明である。なお埋土中の出土遺物は6号土坑から窯洞～白土原窯式に比定される山茶碗の底部と白土原～明和窯式の山皿の口縁部が出土したほか、8号土坑から明和窯式に比定される山茶碗が出土した。以上から13世紀後半から14世紀初頭の所産と考えられる。

10号土坑（第17図）

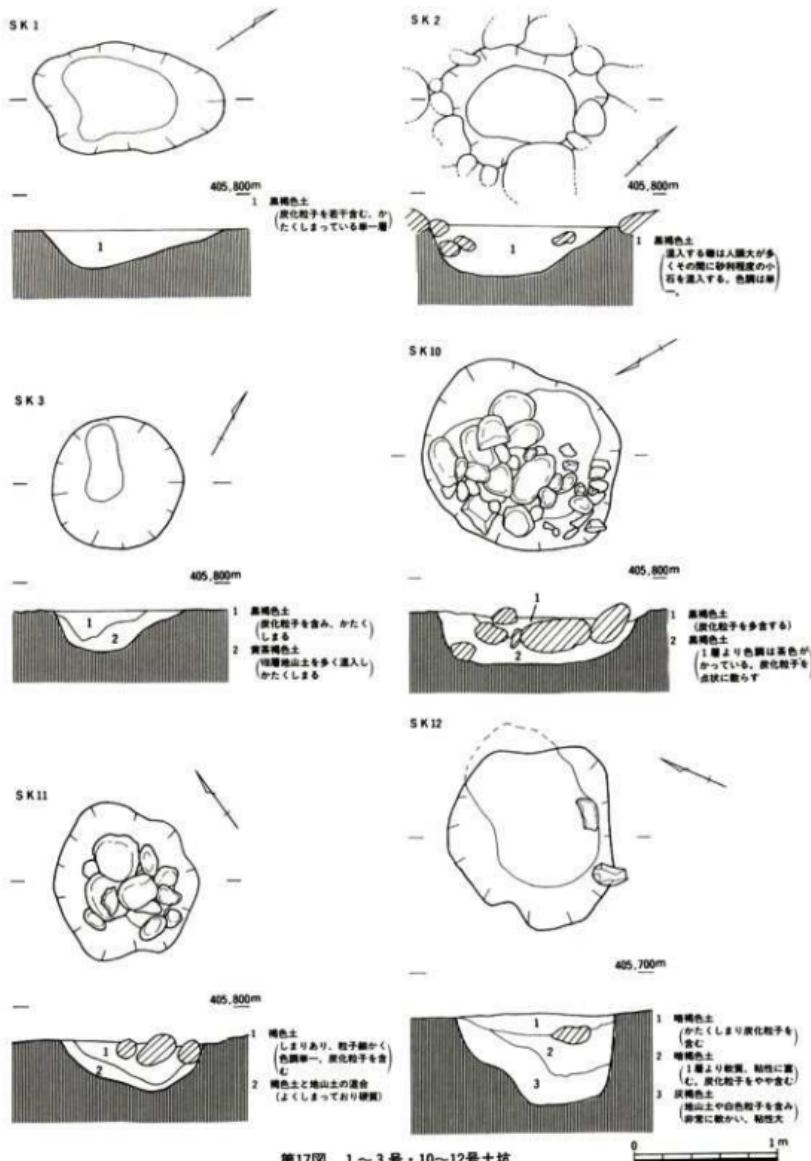
8C・D区にかけて存在する。南側には同形態の土坑群が重複して検出されている。遺構プランの確認段階から人頭大の平盤な礫と破碎した角礫が露呈していた。これらの集石は比較的小形になるものの覆土中層にまで堆積していた。礫と礫の間には軟質の黒褐色土が充填しており、径10mm大の炭化粒が点々と散っている他、礫の中には煤の付着するものや、一部赤化したものがみられた。土坑の開口部の径は135×120cmで形態はほぼ円形を呈する。

11号土坑（第17図）

7C区に存在する。検出された段階で平盤な礫と破碎した礫（一部被熱）が露呈していた。規模は一回り小さいが、覆土の性状も含め10号土坑に共通する点が多い。包藏する礫の大きさは均一ではなく、人頭大をこえるものから拳大まで、破碎したものは円礫を打ち割ったものと山石状の角礫である。断面形は擂鉢状である。

12号土坑（第17図）

7・8B区にかけて存在する。遺構プランの確認と同時に覆土上層に礫が4点検出された。いずれも流紋岩で赤化はみられないが、被熱による剥落がみられる。形態は円形を基本とした若干の不整形を呈し、坑壁の立ち上がりは急傾斜をなす。覆土は3層に分層可能で、1・2層で炭化粒子を含むほか、上層ほど固く締まっている傾向がみられた。



13号土坑（第18図）

8B・C区にかけて存在する。南北に長軸を持つ不整形を呈す。断面形や坑底の状況から判断して、2基の土坑の重複も考えられる。覆土は上層から下層まで各層混在する様子で、炭化粒子の多さ、土質の硬軟等で分層した。地山の黄褐色土を全般に混入していることが特徴である。坑壁の立ち上がりは急傾斜をなす。

14号土坑（第18図）

8・9B区に存在する。長楕円形を呈し、急傾斜な坑壁を持つ。規模は190×85cmを計る。他の多くの土坑にみられる覆土中の礫はなく、色調も他に比べ薄く検出に困難を要した。この覆土は基本土層における第IV層を中心とする。出土遺物は皆無であった。

15号土坑（第18図）

9C区に存在する。坑底の形状はやはり地山中の大形の礫に影響されている。平坦な箇所も一部あるものの概ね擂鉢状を呈す。14号土坑に隣接する位置にあり、その検出は困難であったが、掘り込みは予想外に深いものであった。覆土は赤味がかった茶褐色土が上層にあり、その下部に14号土坑と同様の地山土混じりの茶褐色土が充填されていた。出土遺物は皆無であった。

16号土坑（第18図）

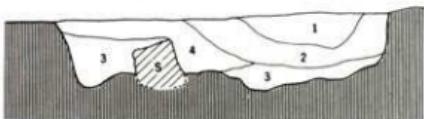
9C・D区にかけて存在する。南側は一部搅乱を受けているが形態は長方形を呈す。坑壁は急傾斜で坑底は平坦であった。覆土は上層から径約5cm大の黄褐色土を含み、これは下層になるほど多く含まれる傾向がみられた。

17・18号土坑（第18・19図）

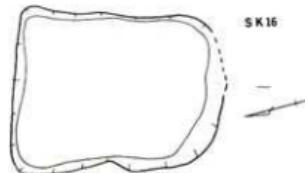
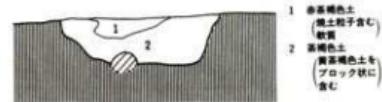
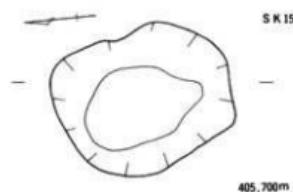
17号土坑は9・10D区に存在する。竪穴状を呈し覆土には黒褐色土が上層から中位にかけて堆積する。坑壁の立ち上がりが2段に構成されており、他の土坑とは規模ともに異質なものである。18号土坑は17号土坑の南側に位置する。坑底が不安定であるが、覆土は2層に分層され、上層に17号土坑と同じく黒褐色土、下層にVII層土を混入した暗褐色土が堆積していた。また、第23図1037の土器と下呂石のフレイク4点、打製石斧の刃部破片が1点出土した。

19・20号土坑（第19図）

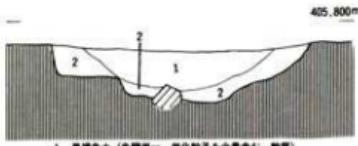
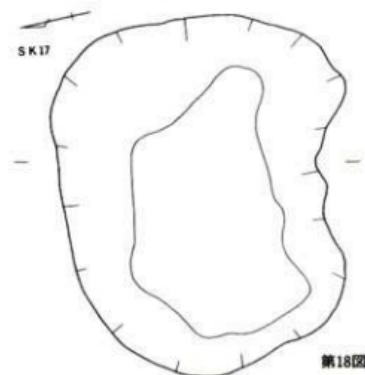
10C区に存在する。19・20号土坑ともに包含される礫はない。20号土坑は楕円形を呈し坑底の最深部は中央よりやや西側にずれる。ここは一段深くなつており、VII層下部まで達し川砂の



405,600m



405,900m



0 2 m

第18図 13~17号土坑

多い土層の上面にいたる。出土遺物はない。19号土坑との間に浅い落ち込みを挟むが、これは大形礫の抜けた跡である。19号土坑は20号土坑と形態が似ているが坑底が広く、坑壁の立ち上がりも急傾斜である。遺物は下呂石のフレイクが3点と沈線文土器が4点、第I群1004の縄文早期土器片が1点、無文土器が8点出土した。

21号土坑（第19図）

10D区に存在する。円形を呈し、坑底は平坦である。覆土は黒褐色土にVII層土を混入した土層であり、拳大の円礫を含むが、坑底直上に角礫を4個確認した。中心を囲むようにコの字状に配された状況は他の土坑にはみられないことである。被熱化し炭化粒子が周囲から多量に検出されている。

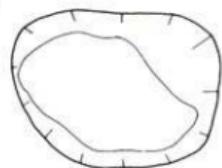
22～25号土坑（第20図）

これらの土坑は2号住居跡周辺に位置する。断面形は22号が擂鉢状を呈し、坑底が狭くなっているが、その他は平坦な坑底をもつ。覆土は黒褐色土に炭化粒子を含入させ粘性が強く軟質である。また中層に入頭大の円礫ないし角礫を3～5個含む。当初2号住居跡との有機的な繋がりを感じたが、覆土の性状から同時期とはみなしがたく、またこれらの土坑間においても規模と形態に同質な点を強調するのは逡巡される。なお、23号土坑からは無文の縄文土器片1点、下呂石の剥片が2点、山茶碗の小破片が1点出土した。また25号土坑からは無文の縄文土器片が1点、山茶碗の破片が2点出土している。

26号土坑（第20図）

2号住居跡の東壁に接する。覆土中から2号住居跡出土の第III群0001と同一個体土器片が出土した。住居跡との同時性を考えたが、覆土の色調の差異と坑底レベルの差をみると決定しがたい。むしろ2号住居跡廃絶後に穿たれ、上記土器片が覆土中に混入したと考える。深さは12cm、坑底は平坦で軟質な土を堆積する。

SK 18



SK 21

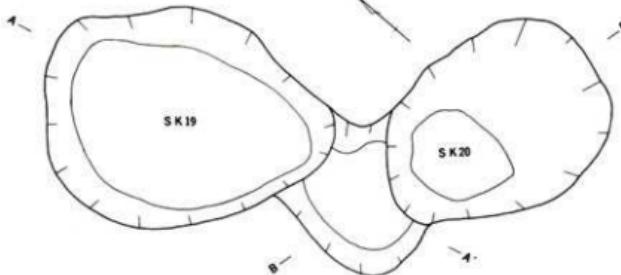


405,900m

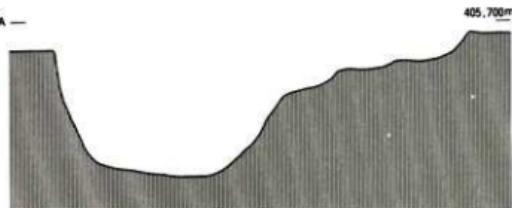


- 1 黒褐色土
(かたくしまり、色調單一)
- 2 暗褐色土
(少量の炭化粒子を含む、かたくしまる)
- 3 暗褐色土
(2層より色調明るく、やわらかい)

405,800m



A—



405,700m A'

B—



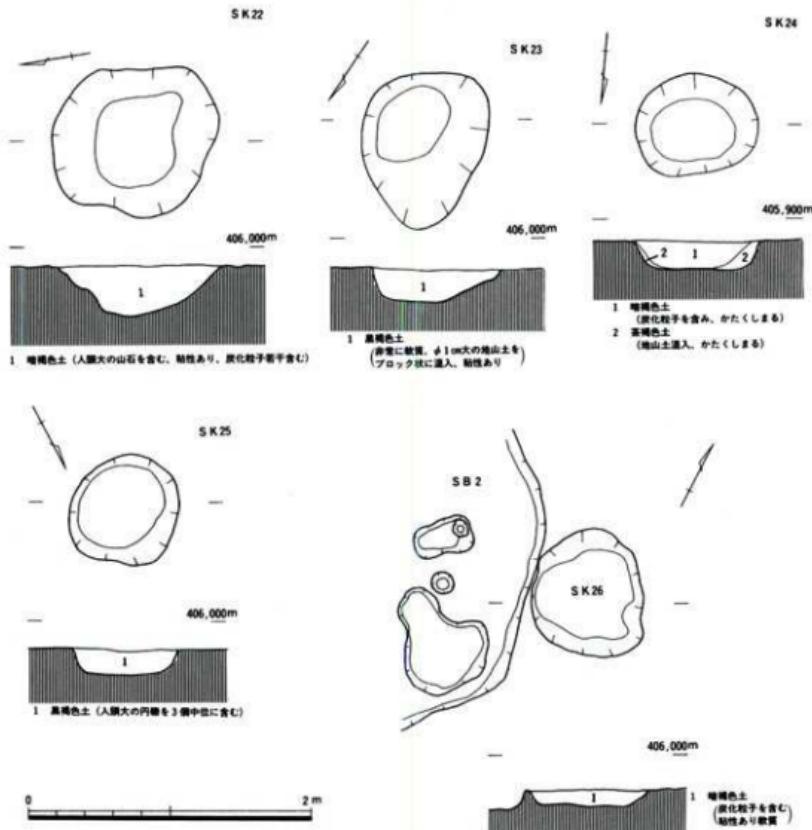
405,700m B'



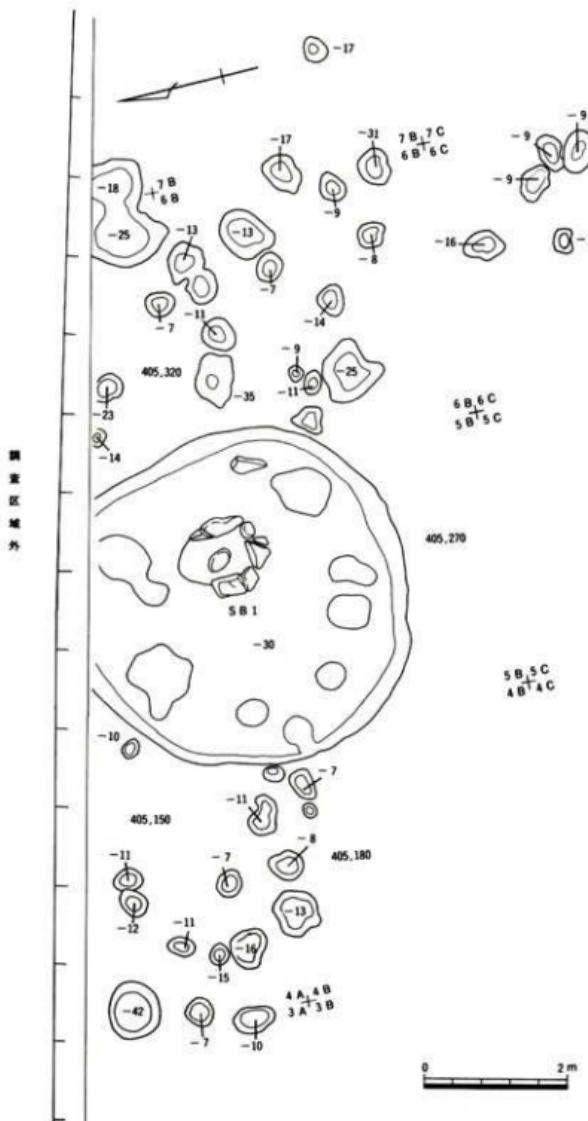
第19図 18~21号土坑

3. ピット群 (第21図)

4 A ~ 6 C区の緩斜面上に広がる。これらは1号住居跡を囲む周辺部に位置し、住居跡の西側に16箇所、東側に26箇所を数える。径は30~40cm、深さは7~20cmのものが多く、4 A区北西隅のピットは柱穴様の掘り込みである。覆土はⅢ層あるいはIV・V層の黒褐色土が充填されており、ピット埋土内からは石鏡が1点検出されたのみで、土器片は皆無であった。しかしこれらピット群の上層には縄文後期の土器が多数出土しており(第24図)、後期の遺構であることが推察される。柱穴等の配列を考えたが住居跡を想定することは困難であった。



第20図 22~25号土坑



第21図 ピット群

第1表 土坑一覧表

番号	形狀	規模	立ち上がり	縁の混入	坑底	分類	出土遺物	長軸×短軸(cm)	深さ(cm)
1	楕円	中	ゆるやか	無	平坦	B 2	北部系山茶碗1点	125×75	20.0
2	楕円	中	ゆるやか	有	平坦	B 2		125×85	34.0
3	円	中	急	無	擂鉢状	A 2	北部系山茶碗2点・廻戸美濃(通房期)1点	95×90	44.5
4	楕円	中	急	有	平坦	B 1	チャートフレイク2点	108×91	48.5
5	円	大	急	有	平坦	A 1 a	北部系山茶碗1点・石鏡3類2028	143×140	47.0
6	円	中	非常に浅い	有	平坦	A 1 b	山茶碗窓洞・白土原・山茶白土原・他2点	150×(110)	12.0
7	楕円	大	急	無	平坦	B 1	北部系山茶碗1点	163×124	22.5
8	不整形	中	ゆるやか	無	平坦	D	山茶碗明和1窓式1点・下呂石フレイク1点	122×111	22.5
9	楕円	大	急	無	平坦	B 1	無文土器1点・下呂石フレイク3点	141×112	18.0
10	円	大	急	有	平坦	A 1 a	無文土器1点	135×120	44.0
11	円	中	ゆるやか	有	擂鉢状	A 3		88×64	41.0
12	円	中	急	有	平坦	A 1 a	常滑製品1点	134×114	73.0
13	不整形	大	急	無	平坦	D		237×164	62.0
14	楕円	大	急	無	平坦	B 1		190×85	53.0
15	楕円	中	急	無	平坦	B 1		133×110	38.0
16	長方形	大	急	無	平坦	C 1	下呂石フレイク1点	167×113	10.0
17	長方形	大	ゆるやか	無	擂鉢状	C 2	無文土器1点	254×228	59.5
18	楕円	中	ゆるやか	無	平坦	B 2	北部系山茶碗1点・田群土器1037・打斧1点	150×124	19.0
19	楕円	大	急	無	平坦	B 1	I群土器1004・IV群土器3類3点他	196×158	79.0
20	楕円	大	急	無	平坦	B 1		193×126	61.0
21	円	中	急	角礫配混	平坦	A 1 c		90×90	24.5
22	円	中	ゆるやか	有	擂鉢状	A 3	下呂石フレイク2点	120×106	32.5
23	楕円	中	ゆるやか	無	平坦	B 3	北部系山茶碗1点・無文土器1点他	113×86	31.0
24	円	中	急	無	平坦	A 1 b		85×70	29.0
25	円	中	急	有	平坦	A 1 b	北部系山茶碗2点・無文土器1点	83×74	30.0
26	不整形	中	ゆるやか	無	平坦	D	北部系山茶碗1点・田群土器4類1点	92×88	12.0

○分類記号については13ページを参照されたい。

○規模については120cmを超えるものについて(大)、120~70cmのものを(中)、それ以下のものを(小)とした。

第4章 遺物

第1節 土器

本遺跡出土の土器の出土量は2000点近くにのぼる。出土総量は全調査面積からみると散在的な様相を呈すかにみえるが、これらは遺構の分布と同様に調査区域内における西側のグリッドから主に出土した。分布の中心は5B区付近である。その所属時期は縄文時代早期から晩期に亘り、僅かながら弥生時代中期の所産の土器も含まれる。ことに縄文時代中期中葉から後期中葉にかけての土器は、検出された遺構や出土した石器の形態と合わせ、該期の文化を推察する手がかりとなるものであり、この時期に最も活発な生産及び生活が営まれていたことを知ることができる。

しかし、1号住居跡の埋甕(0003)がほぼ完形を呈す他は、土器破片が極めて細かく、3~5cm程の破片が大部分であった。また、互いに接合する破片もわずかであり、同一個体と判断できるものはほとんどなかった。このため全体の文様構成を推察したり、器形を図上にて復元し得る個体は皆無で、識別困難な分類過程となつたが、施文や調整の観点から、明らかに型式に分けられるものは各型式ごとに、外來の要素が認められるもの、つまり他地域からの搬入・模倣、さらに他地域で盛行する文様要素を取り入れて製作したと思われるものについては外來系土器の諸特徴を中心にして以下のとおり分類した。

なお遺構出土の土器は文中に記した他、遺構・遺物番号対照表として明記した。

第I群土器 縄文時代早期の土器

- 1類 押型文土器
- 2類 早期後半の条痕文土器
- 3類 早期末の東海系土器
 - a種 乳頭状の尖底部を有する土器
 - b種 器壁の薄い土器の壁面に粘土紐を貼りつけた早期末の土器

第II群土器 縄文時代前期の土器

羽状縄文を施す土器

第III群土器 縄文時代中期の土器

- 1類 北屋敷式土器
- 2類 船元式土器
- 3類 里木式土器
- 4類 曾利式土器

5類 中富式土器

第IV群土器 繩文時代後期の土器

- 1類 磨消繩文を施すもの
- 2類 条線を施すもの
- 3類 沈線を施すもの
- 4類 縁帶文系の土器

第V群土器 繩文時代晚期の土器

大洞式土器

第VI群土器 繩文のみのもの

第VII群土器 時期・型式等不明の土器片・底部

第I群土器 繩文時代早期の土器（第22図1001～1009）

1類 押型文土器（第22図1001）

6B区のIV層から1001のみ1点確認した。穀粒文とも呼ばれる楕円文が施されるもので、高山寺式に比定されると思われる。原体の回転押捺の度合いにより個々の楕円形の凹凸に差が生じ、楕円粒は平均して5×3mmで、断面形はかまぼこ状である。破片の形状から押型文の原体は縦位に軌跡を描いたと推測する。器壁厚は0.9mm、色調は器表面が黄褐色、内部が淡灰褐色を呈す。胎土に植物纖維は認められないが、長石類の白色粒子を多く含む。

2類 早期後半の条痕文土器（第22図1002～1007）

茅山下層式に比定されるものを本類に含めた。9点確認し、内2点は底部破片、他は胴部破片で、無文のものもある。しかし口縁部を残存するものはない。1002と1003は胴部の段とその上に位置するくびれ部の破片である。1002の地文は条痕で、円棒状工具で凹線を引き、それに沿うように刺突を連続させる。内面には条痕が施されている。これは1号住居跡の柱穴2の埋土（床面から約10cm下）から出土した。1003は段を有し、凹線を引きながら文様帯をかたちづくる中でDの字状の押し引き刺突文を配している。この2点は胴部をめぐる貼り付け隆帯の棱が甘く、屈曲部が退化していく傾向を示すものであり、茅山下層式の中でも後出的な位置を占めるものである。1004は比較的密に刺突を配した破片である。SK19の埋土から出土したもので、流入であろう。多くの器表面が黄灰色の中で3005は黒褐色を呈す。太く浅い凹線と爪形にも似た列点文が認められる。1006・1007は平底を示す底部破片で一部に条痕が認められる。これら胎土中に纖維を多量に含有することは明確に他の土器群と区別され、一つの特色を示すものである。

3類 早期末の東海系土器（第22図1008・1009）

a種 乳頭状の尖底部を有する土器（第22図1008）

船形式に比定されるものを本類a種とした。底部に属する破片が4D区から1点出土した。早期末の一組の土器の特徴に通じる乳頭状の尖底部である。尖底部の器厚は1.5~1.7cm、径は3.6cmで、内外面ともに条痕は認められない。色調は茶褐色で、焼成が弱くやや脆い。2類の茅山下層式に比し繊維は少ない。尖底部の断面を観察すると2ないし3枚の層状を呈すことが分かる。手捏ねにより重ね合わせ、乳頭状の尖底を付着した結果であろう。

b種 器壁の薄い土器の壁面に粘土紐を貼りつけた早期末の土器（第22図1009）

塩屋式に比定されるものを本類b種とした。6D区から1点出土した。1009は低い粘土紐を貼り付けた後に、その上から斜行する条痕を施文したもので、器壁は4mm程度、焼成良好な土器片である。胎土に繊維はまったくみられない。

第二群土器 繩文時代前期の土器（第22図1010~1021）

羽状繩文を施す土器

前期中葉の北白川下層II式に帰属すると考えられるものをこの類におさめた。20点出土し、器壁は薄く3~5mm、焼成良好で堅致なものが多い。また、内面に指頭による整形が認められる。色調は灰黄褐色を呈すものがほとんどだが、1点1010のみ灰燈色を呈す。この1010を含め5点が1号住居跡の埋土中層から出土した。その他は埋土上層や周辺のグリッドから出土した。1010~1012は地文が縄文で、その上に爪状の施文具でハの字状になった刺突が連続する。爪形の両端部で深く、中間部で浅く文様が鮮明でない。口唇部が残存していないがおそらく口縁と並行方向に施されるものであると考える。資料がいずれも小破片であるため断片的にしか窺えないが1013以下は該期の土器に一般的な、胴部に斜縄文を施された例であると思われる。

1010・1015~1018がL {^R}, 1011~1014がR {^L}の縄文が認められる他、原体を結束せずに縄文を施したもので1019がある。これはL {^R}とR {^L}を交互に配したものである。

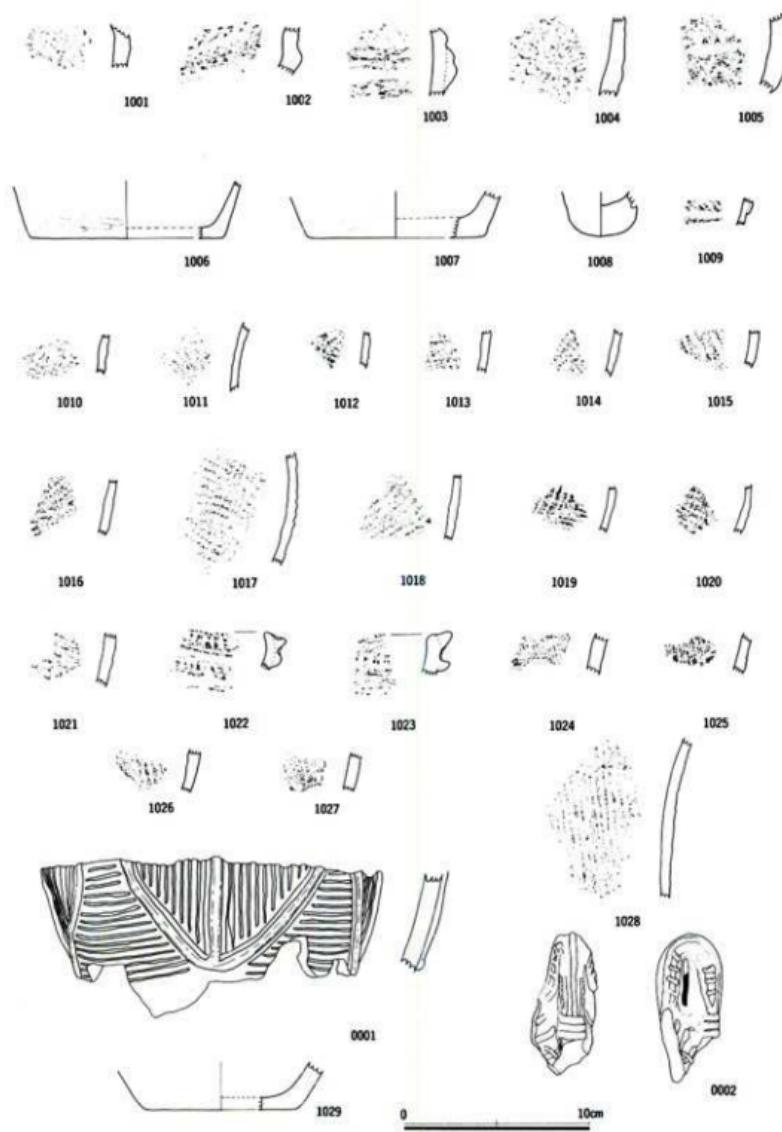
第三群土器 縄文時代中期の土器（第22図1022~第23図1044）

1類 北屋敷式土器（第22図1022~1023）

先端を三角形に尖らせたヘラ状器具を施文具として用い、ハの字状に連続爪形文を口縁の下方及び貼付した隆帯に沿って施している。比較的粗雑な施文である。2点出土した。焼成良好で胎土は緻密、色調は1022が赤褐色、1023が灰茶褐色を呈す。

2類 船元式土器（第22図1024~1027）

里木貝塚の報文において船元I式H類に相似するもので、地文が無節縄文のものを本類におさめ、6点確認された。船元I式の主体的な諸特徴を示さない小破片であるが、船元系の中で古い段階に属するものであると解釈する。器厚は各片6mm前後を測り胎土には砂粒を多く含む。条の間隔の広く粗いもの1027、緻密なもの1024など様々である。



第22図 純文土器 I ~ III群

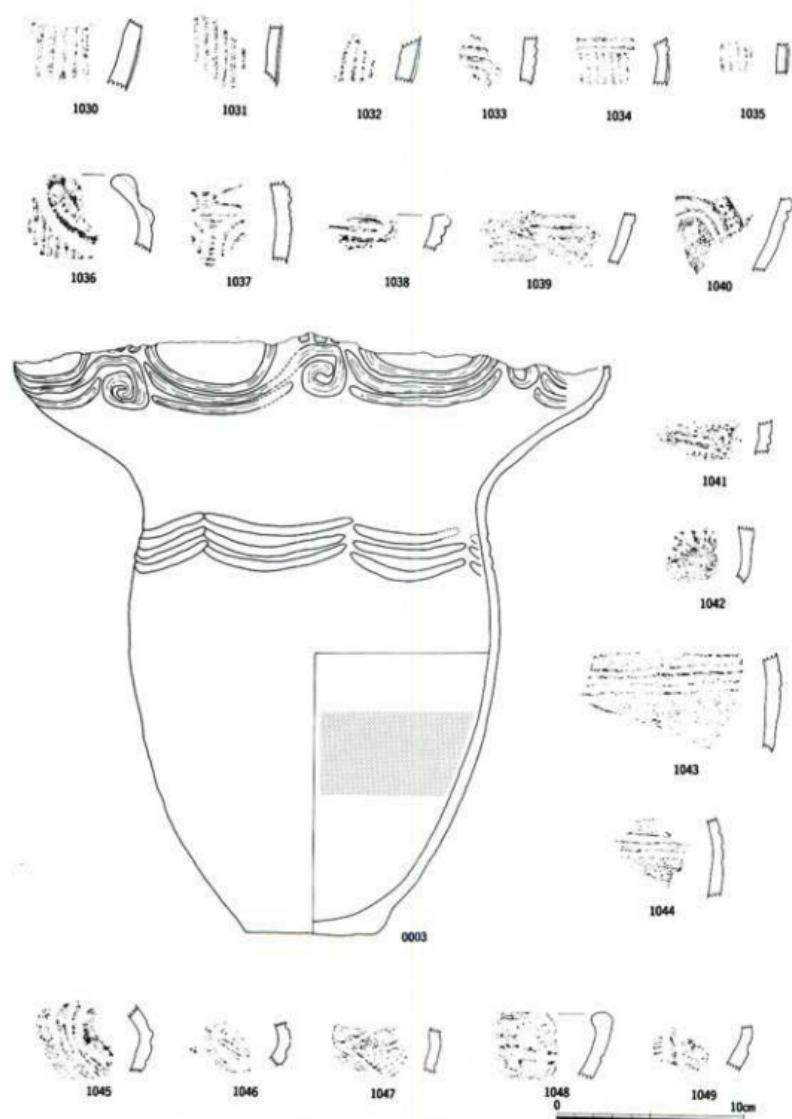
3類 里木式土器（第22図1028）

撚糸文が縦位に施文されるもので、里木II式に比定される。2号住居跡の埋土上層から1点出土した。胴部破片でやや外反している。内面の調整を丹念に行なったようで、一部滑らかな部分がある。地文はRの撚糸で、条は深く明瞭に残る。器厚は6mm、色調は赤褐色を呈し焼成は普通、胎土には長石類の砂粒を多く含む他、雲母も認められる。

4類 曾利式土器（第22図0001・0002・第23図1029～1042）

曾利系の土器を本類とする。以下にあげる資料は器壁が厚く、焼成が良好で、器表面の色調は赤褐色、胎土に黑色粒子を散在させること、及び施文方法において半截した竹管状の工具により並行沈線を集中して施すことなどの諸特徴から、伊那地方からの搬入品の可能性が高いものである。県内における類例は久々野町堂之上遺跡、坂下町門垣戸遺跡、美濃加茂市神明遺跡に求めることができる。

0001は深鉢形土器の胴部で、曾利I式期に相当する。2号住居跡の床面近くから点在して出土したもので、文様構成に近似したものに長野県岡谷市の梨久保遺跡3・4号住居跡出土の資料がある。本遺跡出土のものはこれより胴部径が一回り大きく、残存部における最大径は18.5cmを測る。胴部中位に椭形文の変形による派生とおぼしき隆帯区画を4単位設け、文様帶内部に半截竹管による沈線文を縦位に、外部には横位に引く。その後に隆帯との接点を棒状工具にて整形し、隆帯文と沈線文を明確に分けている。この文様帶より下位は無文帶で、1029がこの土器の平底底部をなす破片であると思われる。土器上部の粘土紐の合わせ目で破損したことが窺える。内面は炭素粒が面的に濃く付着する。先述した資料を参考にするとキャリバー形の土器が盛行した中で、これは胴部から口縁にかけて内湾する器形をなすものである。1030～1035も集合沈線が施されたものであるが、1030～1033は範描沈線で1034・1035のように竹管状工具によるものと区別される。前者の沈線間の断面形は長方形を呈し、後者は半円状をなすもので曾利式に先行する土器とも考えられる。1036は内湾する口縁付近の破片で、貼付した隆帯を連弧状に施し溝底になった部位に竹管状工具で押し引き文帶を施す。曾利I式期の所産であろう。0002はソウメン状の細い粘土紐を格子目状に貼りつけた把手である。土器本体との接着部で剥落し把手の上端から垂下した先端部が欠けている。蛇頭を模したものであろうか。曾利II又はIII式期に帰属すると思われる。1037は竹管状工具にて条線を地文として施した後に、粘土紐を貼付する。1038～1042は半截竹管による曲線文と刺突列が施される。胎土に長石、雲母など砂粒を含み器壁は6mm程である。井戸尻式又は中期前葉に遡る可能性がある。



第23図 繩文土器III・IV群

5類 中富式土器（第23図0003・1043・1044）

0003は1号住居跡の埋甕である。口辺部はキャリバー状に内湾し、頸部で括れ、上胴部に膨らみをもつ。モチーフは口辺部にやや角張った溝文を主体として区画され、溝文の上には短沈線列、その間には弧状文、頸部には3条一組の連弧文が太い沈線で構成される。口辺部施文帯には磨きが施されたのか滑沢である。口縁部はほぼ同じ高さで欠損するが、内湾しながら丸く納まるものであろう。溝文は8つ確認される。これは各区画の幅と破損部位の位置を勘案すると9つあったとも推定できる。口縁部と内面低位は炭化物の付着が顯著である。色調は赤褐色を呈し、器厚は5~8mmを測る。1043・1044は本類の土器の上胴部にみられる2条または3条沈線に相当するものと考える。

第IV群土器 繩文時代後期の土器（第23図1045~第24図1089）

1類 磨消繩文を施すもの（第23図1045~第24図1068）

磨消繩文を施した土器を本類とした。出土層位はⅢないしⅣ層である。正確には充填繩文を施す一群も含めたが、器形や文様構成をうかがい知ることのできるものがなく、明確な基準をつかみ得ない。区画構成に用いられる沈線は各片相似しており、沈線幅はやや細く文様も纖細な感じのものが比較的薄い器壁のものに多くみられる。1066のように幅広で浅いものも若干含むが厚手の土器に限られる。沈線は丸みを帯びた棒状工具で施文されたと思われ、断面は半円状である。平口縁の形態をとるものとして1048があり、口縁端部を内側に折り上げている。磨消繩文帯は1045のように2本の沈線の間に1本の沈線を加えるものはまれで、多くは2本の沈線で画される。その中で明確に繩文帯をうかがうことができるものは1061で三角形状を呈している。これは1062と同じく波状をなす口縁部で、口縁頂部は肥厚し卷貝によると思われる深い刺突が加えられる。口辺部の径から4単位の構図と判断する。繩文は節が不明瞭で今ひとつ判然としないが、8の字状の貼付文が施された1054はL字の繩文が不均等に配されたものであり、壠之内Ⅱ式期に比定できる。内面はよく研磨されている。その他1065のように細密な原体を用いたものもみられる。胎土に細かな砂粒を混じえたものが多く全般に焼成良好である。1048、1061、1062が中津式に類似するほか、大部分を占めるのは壠之内Ⅱ式並行期から中葉の加曾利B式期の所産である。本遺跡における土器の出土量比率は該期が高いものであったが組成内容を知る数量には及んでいない。

2類 条線を施すもの（第24図1069~第25図1081）

条線を施した土器を本類とした。条線は縦位に施されたものを主体とし、斜格子状1069、傾きをかえながら斜位に引かれたもの1072、椭円を描くかのようなもの1079、がある。その他口縁端部にまで条線が施されるものもあり多様である。口縁部の形態は以下のとおりである。胴部から端部へ肥厚させることなく若干の内曲をつけ端部に丸みをつけたもの1069・1070、面取

りしたもの1078、面取りした端部に小巻貝状の圧痕を配したもの1080、外傾した端面に指頭によると思われる圧痕を加えたもの1081の4種である。条線を施す土器は称名寺式段階からその土器組成に含まれることが知られ、本遺跡においてはおおよそ1類に並行すると考えられる。

3類 沈線を施すもの（第25図1082～1084）

範描の直線文と円棒状工具による直線文が施された単純な施文のものである。胎土が粗く砂粒を含んだものが多い。

4類 緑帯文系の土器（第25図1085～1089）

口縁部を肥厚させ、沈線文を加えたものを本類とする。1085は浅鉢の口辺部で、口縁を肥厚させてわずかに波状をなす端面に、深い末端刺突をもつ沈線を加えている。前葉に属すると思われる。1086・1087は肥厚した口縁に平らな面をつくり、一本の沈線を加える。深鉢形の器形をとると思われ、口縁部文様帶の下位から斜繩文が施される。1088の地文は無文である。肥厚した口縁部はゆるやかな波状をなし、口縁端面に凹線文風の押圧を加える。1089は内傾する口縁外面に沈線文と刺みによって強調された文様構成がみられる。これは突起部が付随し、その側面には刺突が配される。突起部上面は三角形状に面取りされた押圧がみられる。

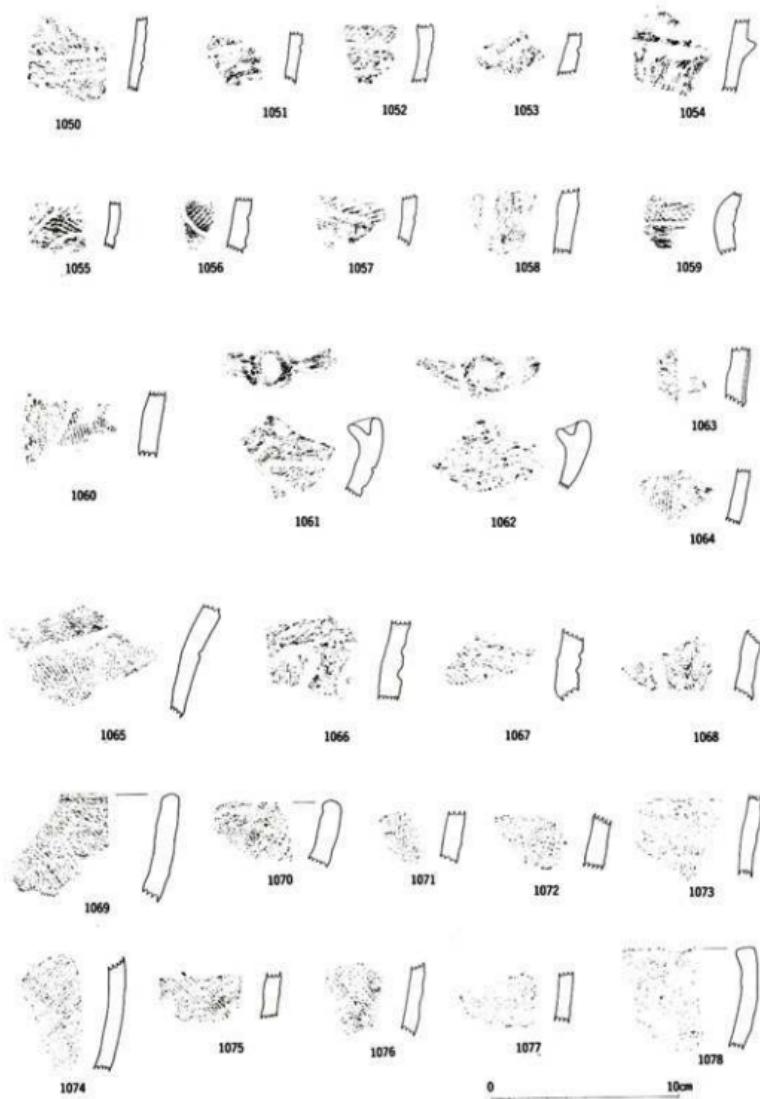
第V群土器 繩文時代晩期の土器（第25図1090）

大洞式土器

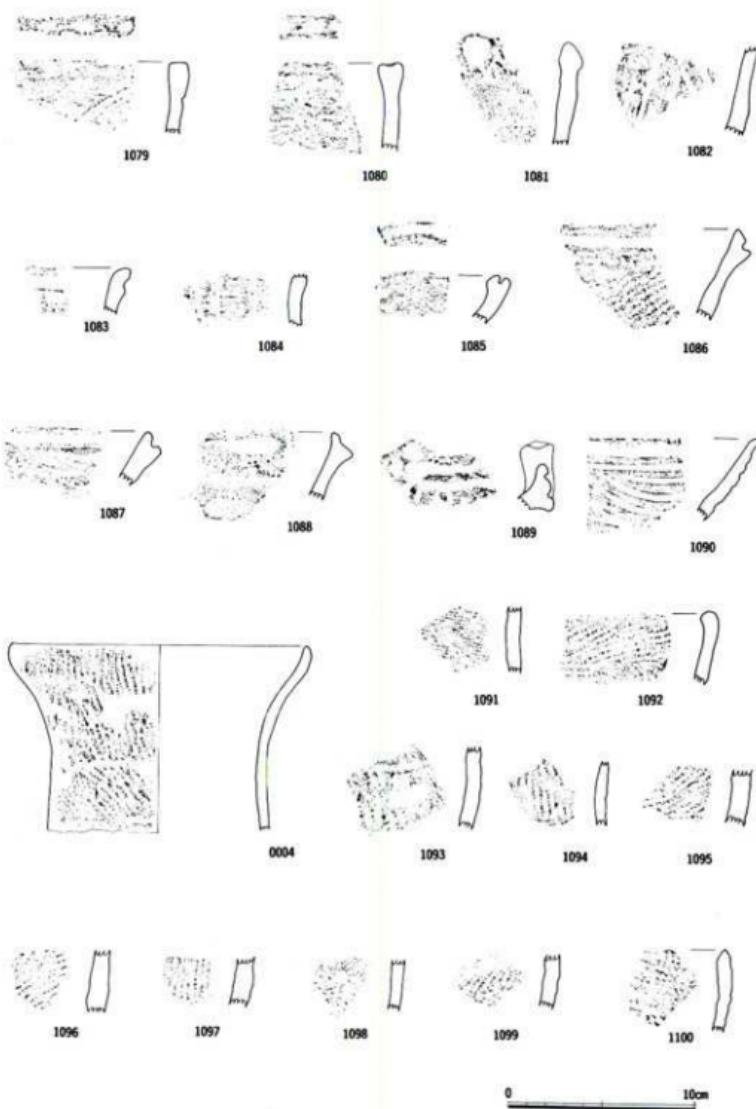
晩期前葉から中葉にかけての土器を1点確認した。器形は浅鉢を呈するもので、頭部を一条の凹線で画し、肩部に多段の連弧文を施す。丁寧なみがきを施した結果、沈線状ではなくゆるい凹線状をなし、隆帶部は平坦面として仕上げられている。肩部から口縁部への明瞭な屈曲は認められない。大洞B～B C式に類似するものである。

第VI群土器 繩文のみのもの（第25図0004・1091～1100）

0004はR {^上}の斜繩文を全面に施す。遺存状態が良好とはいえず、接合復元した器形よりも実際は口縁部がより内湾したものであったろう。色調は茶褐色、一部赤褐色を呈し、器厚は5mm前後で胎土に砂粒を含んでいる。中期中葉末から後葉に属するものと考える。その他繩文のみ認められるものを図示した。小片ゆえに実際にはIV群1類に含まれるものもあると思われ、これらは後期ないし中期に属するものであろう。



第24図 縄文土器IV群



第25図 繪文土器IV～VI群

第VII群土器 時期・型式等不明の土器片・底部 (第26図1101~1111)

底部破片は15点出土した。出土地点は4 A区から6 A区までの範囲に限定される。これらを概観すると、底部から立ち上がりが若干のふくらみをもちながら外反するものと、いくぶん外湾したのに立ち上がるものの2つに分けられる。前者には丹念なみがきが認められ、器壁が厚いものの胎土は緻密、焼成良好であるものが多い。後者にはいわゆる網代底が残り、胎土に比較的大きな砂粒を含み、粗雑なものが多くみられる。1104の底部は図示したとおりであるが、遺存状態は良好とはいえない。これらは概ね中期中葉から後期にかけての所産と思われる。その他、時期・型式等の不明な破片を挙げる。1109は貼り付け隆帯に竹管の刺突が施されたもの。前期中葉または晚期初頭に帰属するものか。1110は口縁部の波頂部に位置すると思われ、こぶ状の突起といった様相である。棒状または笠状器具の先端で深めの沈線をいれる。沈線で区画された内部はみがきの痕跡が認められる。1111は口縁部を凸帯状に肥厚させ端部を尖らせていく。器形は破片の形状から外方へ開く壺形を想定させ、肩部にかかる部位に一条の浅い沈線がめぐる。胎土から晚期の所産と考えるが不明な点が多い。

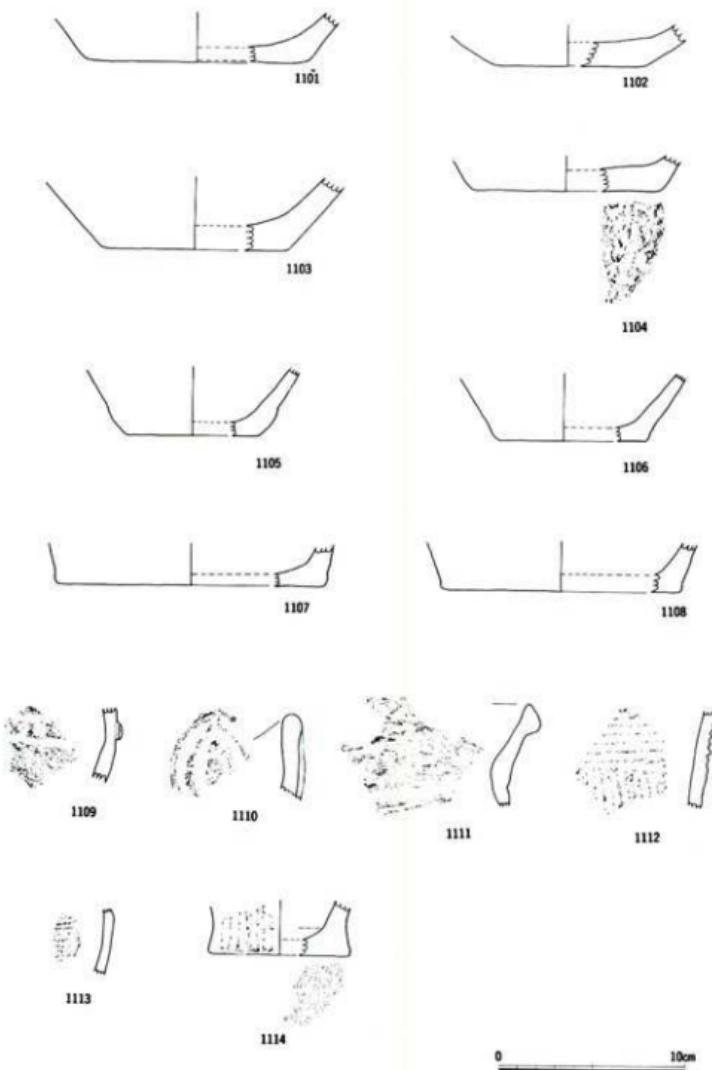
その他

弥生時代中期の土器 (第26図1112~1114)

中期後半に属するいわゆる貝田町式と呼称される一群である。9 D区から3点の土器片を確認した。1112は横位の条痕と縱位の条痕が施される。横位条痕の方が深く、条間胎土の稜がシャープに残る。胴部の上位から口縁に向けての深鉢形土器の破片か。条痕の幅は各々揃っている。1114は条痕幅、胎土、出土地点からみて同一個体と推定する。底辺に至るまで条痕が施され底面には布目圧痕が確認される。1113は器表面に炭化物の付着が著しいもので横位と斜位の条痕がわずかに残る。色調はいずれも黒褐色を呈す。

第2表 遺構・遺物番号対照表

	1号住居跡	2号住居跡	SK18	SK19
I群	1071			1044
II群	1010・1012・1013・1015			
III群	1022・1034・1036・0003	1028・1030・1031・1029・1038~1042・0001	1037	
IV群	1071			
VI群		1100・0004		



第26図 條文土器VII群、その他

第2節 陶磁器

陶磁器類には産地、時代の異なる様々なものが出土しているが、今報告ではこれらを山茶碗¹⁾、古瀬戸陶器（窯窓期）、瀬戸・美濃陶器（大窯期）、瀬戸・美濃陶器（連房期）、常滑陶器、東濃陶器、美濃須衛陶器²⁾、中国製陶磁器（青磁、白磁）などに分ける。そのうち、大部分は確実に伴う遺構面が確認できなかった。なお、年代観については、山茶碗は田口昭二氏の編年³⁾、古瀬戸陶器、瀬戸・美濃陶器（大窯期）は藤沢良祐氏の編年⁴⁾、瀬戸・美濃陶器（連房期）は橋崎彰一氏の編年⁵⁾、常滑陶器は中野晴久氏の編年⁶⁾、中国製陶磁器については太宰府分類⁷⁾に従った。

山茶碗（第27図3001～3015）

山茶碗の細片を除く總破片数は1175点であり、そのうち、南部系山茶碗の占める割合は約5%と非常に少ない。

碗（3001～3009）

いずれも北部系である。3003は唯一完形実測できる資料であり、全体的に薄手で、器高が低い。内底面と胴部の境に明瞭な凹部を認め、口縁端部は内側に若干突出している。底部破片3006～3009はいずれも模擬痕が付着する。3009は外底面に糸切り痕をそのまま残し、高台は紐状の貧弱なものである。外面の糸切り底よりも高台径は小さく、したがって高台脇は糸切り底の外周を生かして5～8mm水平に伸びた飴状を呈する。3006は厚手の底部から八の字状に体部が立ち上がる。高台は欠落している。

皿（3010～3014）

いずれも北部系である。3010は直線的に立ち上がる胴部から口縁端部をほぼ垂直に面取りする。なお、底部糸切りの際に生じたと考えられる痕跡が口縁直下と体部の一部にみられる。3011は内底面と胴部の境が凹み、直線的な体部を形成する。3012は全体的に薄手で内底面中央に一方向から強くナデ調整された凹部がみられる。3013は厚みのある底部から丸みをもって立ち上がり、口縁直下を強く指ナデすることにより口縁端部が肥厚化している。なお、外底面には回転糸切り痕とともに木目状圧痕がみられる。3014は小碗ともいう。精緻な断面逆三角形の高台から丸みをもって胴部が立ち上がり、口縁部は若干外反する。腰部内面から体部外面にかけて薄く施されている灰釉は刷毛かけのようであるが、風化が進んだためか、黄白色、ないしは緑白色を呈している。

鉢（3015）

外底面には回転糸切り痕が残り、精緻な断面逆台形の高台が貼り付けられている。高台接地面には若干模擬痕が残る。内面は非常に滑らかである。

中国製陶磁器（第27図3016～3021）

白磁1点、青磁9点が出土した。

白磁（3016）

口縁部に玉縁を有する白磁IV類の碗である。胎土は粗く、灰白色を呈する。胎土中には若干、黒色粒が混じる。内面は灰白色、外面は黄白色の釉調を呈する。また、玉縁直下には一条の沈線がめぐる。

青磁（3017～3021）

3017は丸彫による線描蓮弁文が体部外面に施される。口縁部はやや内彫し、端部は丸みを帯びる。釉は薄く、にぶい緑色を呈する。3018は片切彫りによる鏽のない蓮弁文が体部外面に施される。比較的厚めの釉は青味を帯びた緑色を呈する。太宰府分類のI-5-a類に分類される。3019は口縁部外面に雷文体が施される碗である。釉は薄く、明緑色を呈する。3020は体部内外面無文の端反碗である。釉は薄く、淡緑色を呈する。3021は断面逆三角形の高台を有する碗の底部である。釉は厚く、濃緑色を呈する。

古瀬戸陶器（第28図3022～3030）**縁釉小皿（3022）**

体部が直線気味に開き、外面はロクロ目が認められる。口縁部内外面にのみ灰釉が施される。

鉢皿（3023）

体部は直線的に開く。口縁部内面にはやや上向きに小突起が形成され、端部を突がらせる。また、体部内面と体部外面上方に灰釉が施される。鉢目の間隔は4mmである。体部外面にはロクロ目が認められる。

祖母懐壺（3024）

頸部上方がやや外傾し、口縁部は外側に折り返され、頸部と密着し縁帯を形成する。鉄釉が施された痕跡が伺えるが定かではない。

平碗（3025）

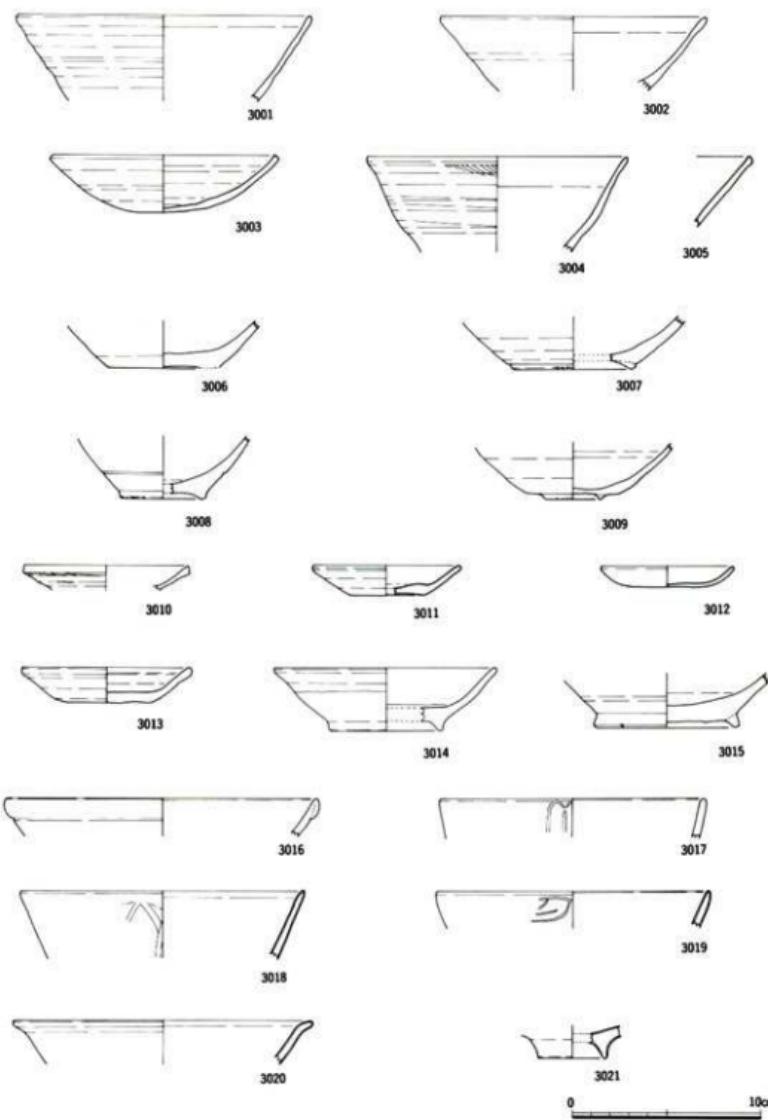
胴部が直線的に開き、口縁部でゆるやかに立ち上がる。体部下方は回転ヘラ削り調整が行なわれ、内面と体部外面上方に灰釉が施される。

片口瓶（3026）

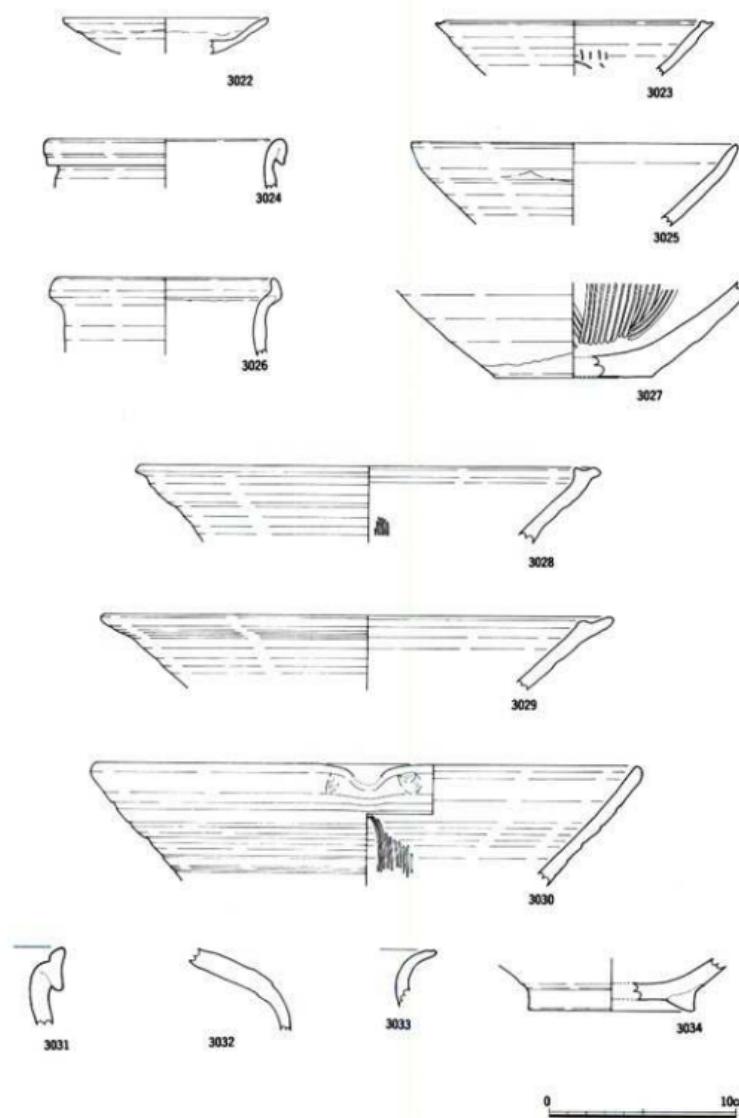
頸部はわずかに内傾する。口縁部は一旦外折するが端部は再び内傾気味に立ち上がり、丸くナデ調整される。また、全面に灰釉が施される。

擂鉢（3027～3030）

3027は回転糸切り痕の残る底部から若干丸みをもって胴部が立ち上がる。擂目は9本を一単位とし、その幅は2.8cmを測る。また、内底面までは施されないが、2～3単位が重なりあって



第27図 陶磁器(1)



第28図 陶磁器(2)

いる。内面はよく使用されたためか、非常に滑らかである。全面に銷軸が施される。3028は口縁部がやや外反するが、端部が内側に折り返され斜方向に突帯を形成する。体部外面のロクロ目は顕著であり、全面に銷軸が施される。3029は口縁内側の突帯がやや下方に下がるもの形態的には3028に類似する。しかし、銷軸は施されず、無軸で灰色を呈する。3030は口縁端部が丸い。体部外面は回転ヘラ削り調整の痕跡が顕著である。内面は非常に滑らかであり、幅2.0cmで10本を一単位とする擗目が施される。注口部は大部分欠落しているものの、注口部の両端外面には指圧痕が認められる。また、全面に銷軸が施される。

その他の中世陶器（第28図3031～3034）

常滑陶器（3031）

いわゆるN字状口縁の壺である。口縁端部を受け口状にし、さらに下方へ引き出すことにより幅広い縁帯を作り出している。表面は茶褐色であり、さらに灰緑色の自然釉が口縁部一帯に付着する。

東濃陶器（3032）

四耳壺、または三耳壺の肩部である。外面には自然釉が降灰している。耳の直下には一条の沈線が施されており、また、耳が貼り付けられた裏面には指圧痕が残る。胎土は灰白色を呈し、若干白色粒が混じる。

美濃須衛陶器（3033・3034）

3033は壺の口縁部である。口縁部を強く外反させ端部を引き出すことにより、内面に凹部が認められる。外面と口縁部内面に自然釉が降灰している。胎土は灰白色を呈し、黒色粒が若干混じる。3034は鉢の底部である。外底面に回転糸切り痕が残り、断面逆三角形の精緻な高台が張り付けられる。内面は非常に滑らかである。無釉で青灰色を呈し、白色粒が混じる。

瀬戸・美濃陶器（大窯期）（第29図3035～3045）

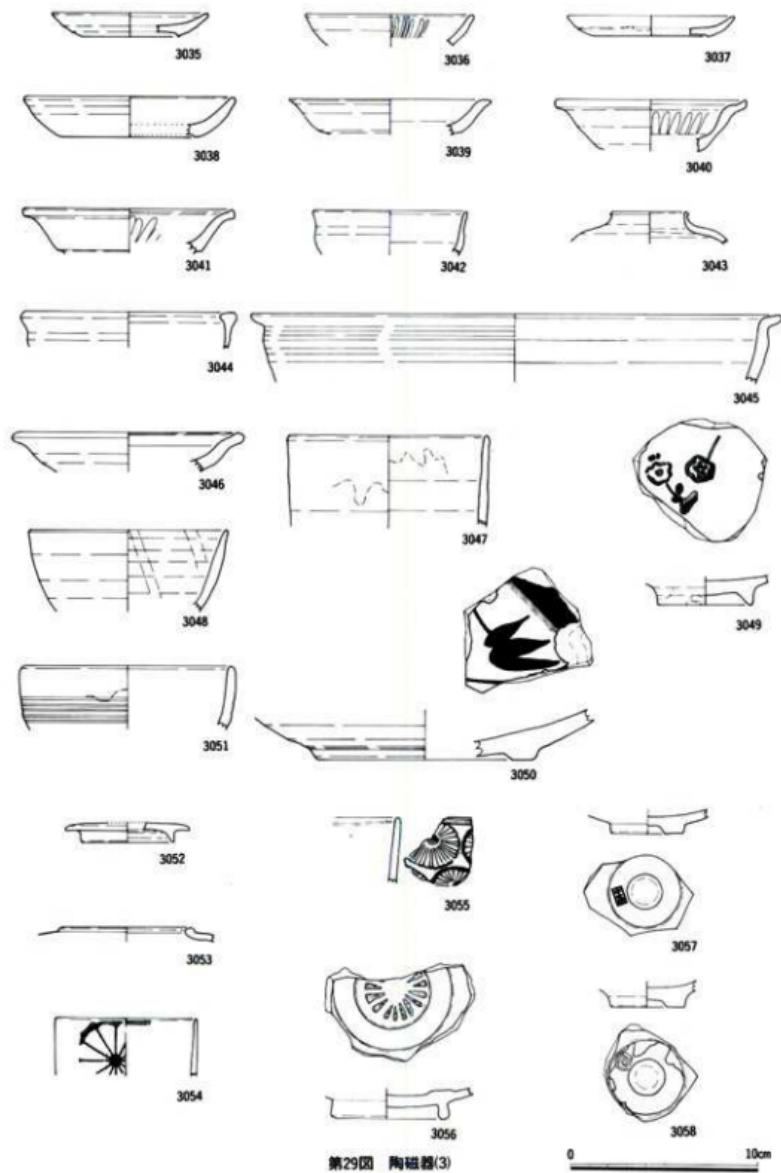
丸皿（3035～3038）

3035・3037は小型である。削り込み高台から体部下方は丸みを帯びて立ち上がり、上方は内湾気味になる。内面と体部上方外面に灰釉が施される。3038は口径が大きくなり、厚みも増す。また、全面に灰釉が施される。3036は体部内面に九ノミ状工具により縦方向に刻文（ソギ）に入る。また、全面に灰釉が施される。

端反皿（3039）

体部下方に稜があり、上方はゆるやかに外反する。厚めの体部で全面に灰志野風の長石釉が施される。

折縁皿（3040・3041）



第29図 陶磁器(3)

0 10cm

いずれも体部は直線的に開き、口縁部は大きく外反し、端部は短く立ち上がる。体部内面に丸ノミ状工具による刻文（ソギ）が施される。全面に灰釉が施されるものの、3041は非常に薄い。また、3041は3040に比べ、やや扁平である。

小天目茶碗（3042）

口縁部はほぼ直立、端部は若干外反する。内面と体部外面上方に柿釉が施される。

水注（3043）

扁平な胴部にはほぼ直立気味の頸部を有する。体部内面上方と外面に鉄釉が施される。

香炉（3044）

胴部は直立気味で、口縁部は内側に折り返して肥厚化する。全面に鉄釉が施される。

甕（3045）

やや丸みのある胴部から口縁部を斜め上方に外折する。全面に鉄釉が施される。

瀬戸・美濃陶器（連房期）（第29図3046～3058）

折縁皿（3046）

丸みを帯びた胴部に口縁部が外反する。口縁部内外面のみに灰釉が施される。また、内底面には蘭竹文が描かれていたと考えられる⁹⁾。

丸碗（3047～3049）

3047は体部がほぼ直立している。全面に黄褐色の鉄釉を施し、その後、口縁部内外面に黒褐色の鉄釉を施す。3048は体部下方は丸みをもち、上方にかけてゆるやかに立ち上がる。全面に鉄釉が施され、灰釉が流し掛けられる。3049は断面逆三角形の高台を有する。内底面には、典須のスリ絵による花の模様が描かれている。また、高台接地面以外に灰釉が施される。

青織部大皿（3050）

やや幅広の付高台を有する底部と体部外面は回転ヘラ削り調整が行なわれる。内底面には鉄絵が描かれ、長石釉が施される。さらに、内底面の一部に銅緑釉が施される。

腰錆湯呑（3051）

体部は丸みを帯び、上方はほぼ直立する。そして、体部外面には4条の横描き沈線がみられる。口縁部外面から内面にかけて灰釉の漬け掛けがなされ、それ以外は鉄釉が施される。

蓋（3052）

笠とかえりの部分からなる。笠部はほぼ水平で、つまみの有無は判断できない。かえり部は断面逆三角形の形状を呈する。笠部上面に柿釉が施され、裏面は無釉である。

土瓶（3053）

扁平な体部を短く折り返し口縁部を形成する。体部外面には糸目が認められる。口縁部上面を除いて、全面に柿釉が施される。

染付箱型湯飲み (3054~3055)

3054は体部がほぼ直立し、外面に呉須による菊花模様が描かれる。また、口縁部内面には横線が引かれる。全面に透明釉が施される。3055は菊花模様の数が増す。また、口縁部内外面に横線が引かれる。透明釉は施されない。

輪禿皿 (3056)

体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整が行なわれ、高台は断面逆台形に近い形状を呈する。内底面には灰釉が施されるが、凸部の釉は拭い取られている。また、外底面は無釉である。内底面中央には菊の印花文がみられる。

漆黒碗 (3057~3058)

いずれも底部破片である。幅広の高台はほぼ垂直に削り込まれ、高台接地面以外に鉄釉が施される。なお、高台接地面にはそれぞれ印が認められ、3057は「中茂」と解読できる。

小結 (第3~6表)

ここでは陰地遺跡の中近世陶磁器の総個体数、供給先、用途などの時期別の変化を考え、遺跡の清長を辿り、その性格について考察してみたい。

陰地遺跡出土の中近世陶磁器の年代は12世紀初頭から19世紀前半までで、様々な産地のものがある。そして、その時期設定は遺物の大半が小片、細片であることから、ある程度年代幅をもたせたものにせざるを得ず、本遺跡の時期区分は第3表で示したように約100年単位で7期に分類した。

I期 11世紀末~12世紀中頃 (北部系山茶碗I期に対応する)

II期 12世紀中頃~13世紀後半 (北部系山茶碗II期に対応する)

III期 13世紀後半~14世紀後半 (北部系山茶碗III期に対応する)

IV期 14世紀後半~15世紀末 (北部系山茶碗IV期に対応する)

V期 15世紀末~17世紀初頭 (瀬戸・美濃大窯第1段階~第4段階に対応する)

VI期 17世紀初頭~18世紀後半 (瀬戸・美濃連房I期~III期に対応する)

VII期 18世紀後半~19世紀末 (瀬戸・美濃連房IV期~V期に対応する)

なお、遺物の分析をする際、個体数の算出には遺物の帰属時期の決定が比較的容易な口縁部計測法³⁹を用いた。また、出土数の少ない時期の構成比グラフは誤差が生じる可能性が高く、分析が不十分になるというそりは免れないが、あくまで遺跡の性格の大要把握を目的とすることを理解しておきたい。

第4表によるとI期からII期にかけて遺物が増加してゆき、III期にピークに達する。しかし、II期を細分すると北部系山茶碗II期~3段階 (窯洞1号窯式)に対応する山茶碗の割合が高い

ことから、この時期を境に集落の営みが確立したと推定できる。そして、IV期以降はほぼ一定の割合で陶磁器が出土しており、集落の安定期と考えられる。

さらに、第5表によるとⅠ期、Ⅱ期では北部系山茶碗の他に南部系山茶碗、美濃須衛陶器、白磁といったタイプの違う陶器が出土するのに対し、Ⅲ期は常滑産の甕を除くすべてが北部系山茶碗で占められる。さらにⅣ期では古瀬戸の割合が全体の28.3%を占めるが、そのうち、古瀬戸後Ⅰ期の遺物は確認されず、すべて古瀬戸後Ⅱ期から古瀬戸後Ⅳ期のものであった。逆に、北部系山茶碗は全体の69.2%を占めるが、Ⅳ期～2段階（脇之島3号窯式）以降のものは確認されなかった。つまり、供給する食器を山茶碗から古瀬戸陶器に換えたと推定できる。これは、遺物数が少ないために断定はできないが、現段階ではこのような結果を得た。

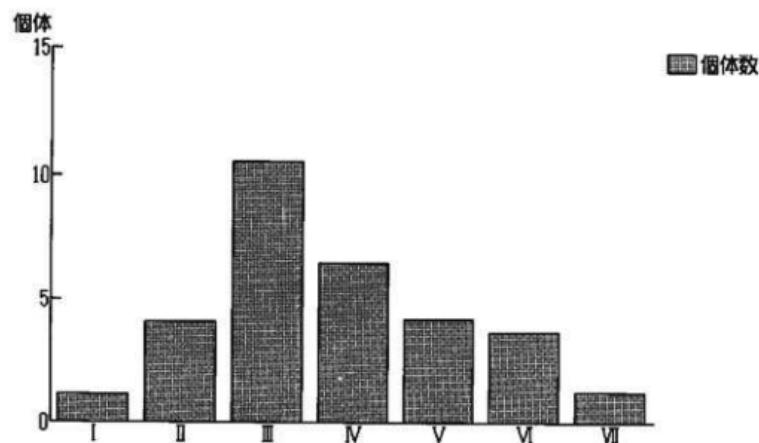
第6表では時期別による用途の変化を考えてみた。これによるとⅣ期以降、調理具が全体の4%～8%の割合で供給されている。これは、古瀬戸後期の擂鉢、卸皿などの量産化が大きく影響していると思われる。また、V期～VI期は茶器が25～30%の割合を占める¹⁰⁾。これは、戦国時代以降に人々の茶への関心が高まったという時代の流れを反映しているといえる。

以上のことから陰地遺跡の集落は、使用する食器が山茶碗から古瀬戸に急激に転換する時期、すなわち、14世紀から15世紀への転換期に画期を見出せる。さらに、Ⅳ期には青磁が出土していることから、陶器に対する人々の意識の変化も伺える。また、この集落の特色として、土師皿（かわらけ）が全く出土していないことが挙げられる。土師皿は城館跡や社寺関係遺跡に出土が目立ち、主に祭祀的色彩が強いといわれている。集落遺跡でも土師皿の出土は、近年増加しているが、陰地遺跡は土師皿の出土が皆無であるため、特別な行事（土師皿を使用するような行事）は行なわれなかつたといえよう。つまり、陰地遺跡の集落全体の身分・階層性に視点を置くと優位性のある占地はなかつたと推定できる。

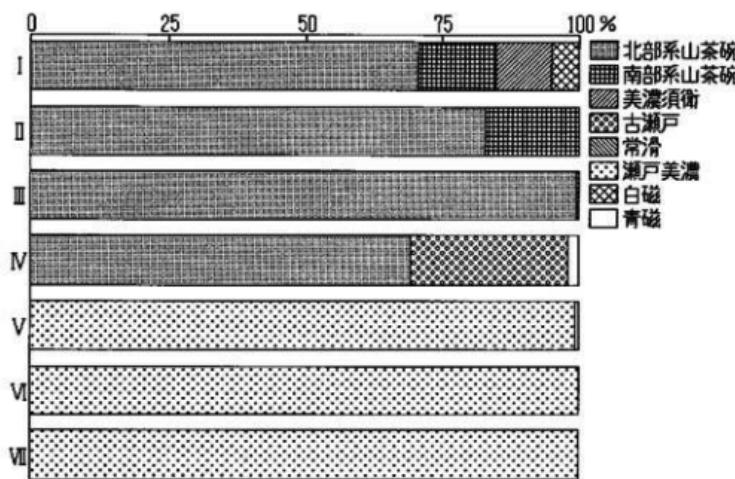
- 1) 山茶碗、白糞系陶器等と呼称されているが、今報告では山茶碗という名称を用いる。なお、山茶碗の内、いわゆる「均質手」のものについては東海地方北部系（北部系）、「荒肌手」のものについては東海地方南部系（南部系）と呼称する。
- 2) 美濃須衛陶器については渡辺博人氏の御教示を得た。
- 3) 田口昭二「美濃焼」『考古学ライブラリー』17 ニュー・サイエンス社 1983
- 4) 藤沢良祐「瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式編年一」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要X』1991
藤沢良祐「瀬戸大窯の変遷」『瀬戸市史 南磁史篇』四 1993
- 5) 檀崎彰一「尾呂」瀬戸市教育委員会 1990
- 6) 中野晴久「常滑窯」「大戸窯検討のための「会津シンポジウム」・東日本における古代・中世窯業の諸問題」大戸古窯跡群検討会、会津若松市教育委員会 1992
- 7) 橋田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」『九州歴史資料研究論集』4 1978
- 8) 田口昭二氏の御教示による。
- 9) 宇野修介「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 1992
- 10) 天日茶碗は製茶以外の使用方法も考えられるが、ここではすべて茶器とした。

	I	II	III	IV	V	VI	VII
陰地遺跡	I	II	III	IV	V	VI	VII
北部系山茶碗	I 1	2 1	2 3	1 2 3	1 2 3		
南部系山茶碗	II 3 4	III 5 6 7	IV 8 9	10 11			
古瀬戸		前期 1 2 3 4	中期 1 2 3	後期 1 2 3 4			
常滑	1 2 3 4 5 6 7 8 9						
瀬戸・美濃大窯				1 2 3 4 5			
瀬戸・美濃達房					I II	III	IV V

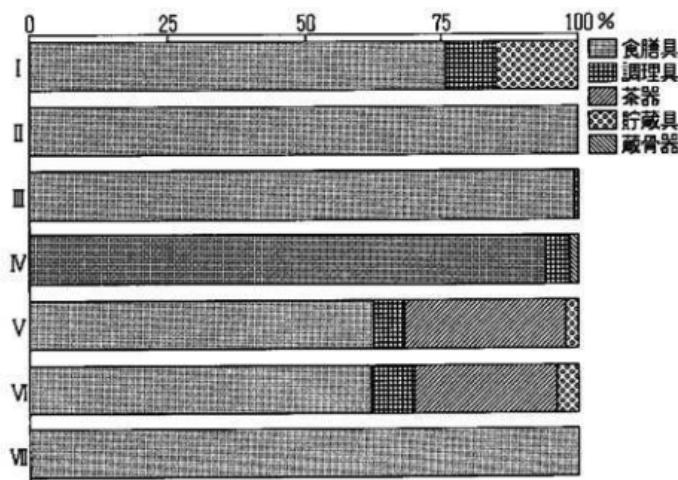
第3表 年代対応表



第4表 時期別総個体数



第5表 時期別產地別構成比



第6表 時期別用途別構成比

第7表 陶磁器計測表(1)

番号	器種	法量(cm)				口径 残存率 (%)	備 考
		口径	器高	底径	台盤		
3001	山茶碗	(15.5)				10	北部系第III期(白土原1)
3002	山茶碗	(14.0)				25	北部系第II期(窯洞1)
3003	山茶碗	(11.8)	3.0	(4.2)		20	北部系第IV期(大洞東1)
3004	山茶碗	(13.6)				10	北部系第III期(明和1)、SK8に伴う
3005	山茶碗					5	北部系第III期(明和1~大畠大洞4)
3006	山茶碗			(5.8)			北部系第II期(九石3~窯洞1)
3007	山茶碗				(6.0)		北部系第III期(白土原1)
3008	山茶碗				(4.6)		北部系第II~III期(窯洞1~白土原1)
3009	山茶碗				(3.2)		北部系第IV期(大洞東1)
3010	山皿	(8.7)				20	北部系第III期(明和1)
3011	山皿	(7.8)	1.6	(3.9)		15	北部系第III期(白土原1~明和1)
3012	山皿	(7.0)	1.2	(3.2)		30	北部系第IV期(大洞東1)
3013	山皿	(8.8)	1.9	(4.5)		25	北部系第II期(九石3)
3014	山皿	(11.7)	3.4		(6.0)	5	北部系第I期(西坂1)
3015	鉢				7.4		北部系第II~III期(窯洞1~白土原1)
3016	碗	(16.5)				10	12C
3017	碗	(14.0)				10	15C末~16C前半
3018	碗	(15.1)				10	14C末~15C後半
3019	碗	(14.4)				10	14C末~15C後半
3020	端反碗	(15.7)				10	14C末~15C後半
3021	碗				(3.6)		14C末~15C後半
3022	綠釉小皿	(10.8)				30	吉瀬戸後III期
3023	鉢皿	(13.8)				10	吉瀬戸後II期
3024	祖母懐壺	(12.4)				10	吉瀬戸後期
3025	平碗	(17.2)				10	吉瀬戸後IV期
3026	片口瓶	(11.4)				20	吉瀬戸後III期~後IV期(新)
3027	擂鉢			(8.5)			吉瀬戸後IV期(新)
3028	擂鉢	(25.0)				10	吉瀬戸後IV期
3029	擂鉢	(27.0)				10	吉瀬戸後II期~後III期
3030	擂鉢	(29.0)				15	吉瀬戸後IV期(新)~大窓第1段階

第8表 陶磁器計測表(2)

番号	器種	法量(cm)				口縁 残存率 (%)	備考
		口径	器高	底径	台径		
3031	甕					5	中野編年第6~7型式
3032	有耳甕						12C~13C
3033	壺					5	12C
3034	鉢				(8.8)		12C前半
3035	丸皿	(8.2)	1.3		(5.1)	10	大窯第3段階~第4段階
3036	丸皿	(9.0)				10	大窯第2段階~第3段階
3037	丸皿	(8.8)	1.1		(6.0)	15	大窯第3段階~第4段階
3038	丸皿	(11.0)	2.1		(7.0)	10	大窯後期
3039	端反皿	(10.9)				20	大窯第4段階
3040	折縁皿	(10.0)				20	大窯第3段階~第4段階
3041	折縁皿	(11.0)				10	大窯第4段階
3042	小天目茶碗	(8.3)				10	大窯前期
3043	水注	(3.9)				20	大窯後期
3044	香炉	(11.2)				10	大窯後期
3045	甕	(28.5)				10	大窯後期
3046	折縁皿	(11.5)				25	速房II期
3047	丸碗	(10.7)				10	速房II期
3048	丸碗	(10.5)				20	速房I期~II期
3049	丸碗				6.0		速房IV期
3050	青織部大皿				(10.6)		速房I期~II期
3051	腰錫湯鉢	(11.0)				10	速房IV期
3052	壺	(6.6)				20	速房IV期後半~V期
3053	土瓶	(6.8)				15	速房IV期後半~V期
3054	染付箱型湯鉢	(7.6)				10	速房IV期後半
3055	染付箱型湯鉢					5	速房IV期後半
3056	輪壳皿				5.8		速房I期
3057	漆黒碗				3.9		速房III期後半
3058	漆黒碗				4.0		速房III期後半

※()は復元値を示す。

※口径は口縁残存率が低いため、誤差が大きい可能性がある。

第3節 石器

陰地遺跡から出土したいわゆる定形的な石器類（楔形石器及び敲石・砥石は今回便宜上この範疇に入る）は遺構内・外、表採品を合わせ計11器種に及ぶ。内訳は打製石斧73点、石鎌1点、石鎌139点、石錐36点、楔形石器16点、削器7点、敲石1点、石錐1点、石匙1点、石槍1点、砥石3点である。その他石器製作時に出来る石核が17点、剥片多数（第9・10表参照）、2次加工のある剥片が33点、使用痕のある剥片が109点、未製品が22点である。

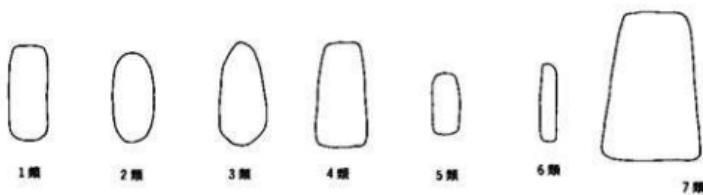
調査区域内における石器類の平面分布は1号住居跡を中心とした5B区周辺と、2号住居跡を中心とした13E区周辺に集中するが、もう一つこれら住居跡の中間的な位置になる9C区付近にも集中する傾向がある。小形の定形的石器において使用された石材は圧倒的に下呂石が多く、次いでチャート、その他僅かながら黒曜石があり、石鎌においては水晶、瑪瑙の製品もみられる。

以下、器種ごとに概観していくことにする。

（1） 打製石斧 （第32図2001～第33図2017）

総数は73点を数え、完形品は22点で破損率は70%である。形態を両側縁の形状と器長・器幅の組合せにより以下のように分類した。

- 1類：両側縁が直線的ではなく平行する。いわゆる短冊型。刃部と基部は丸く処理される（斜刃になるものあり）。これらの中には刃部側が若干幅広になるもの、基部側に抉りが入るものもある。
- 2類：両側縁が外反するもの。胴部中央に最大幅をもち、刃部・基部に向かって幅狭になる。刃部・基部は丸く処理され、全体に刃部の磨耗が著しい。
- 3類：基部は細く、刃部に向けて幅広になり、最大幅は刃部付近にある。いわゆる撥型。刃部は丸く処理され、器厚が大きいものが目立つ。
- 4類：3類に近い形態をもつ一群と考えられるが、頭部を水平に調整するところでこの類に区別した。
- 5類：器幅に対し器長が小さい。形態的には1類に近似し、製作中もしくは使用中に欠損したものを見出された可能性が高い一群。
- 6類：器長に対し器幅が小さく細長い形態をもつ。平面形には1類や4類に近いものなどバリエーションがある。盤状節理を有する石材には限定されていることが特徴。
- 7類：他に比べ大型の一類。平面形態は4類に近似する。縄文後期の所産と思われる。
- 8類：その他、欠損小破片で分類不可のもの。



第30図 打製石斧形態模式図

この内、1類から7類までを計測表にまとめた。石材は凝灰岩、花崗斑岩、粘板岩の順に多く、まれに頁岩、安山岩、流紋岩、砂岩が選択されている。多くはこの付近の河原、道路傍の崖などにみられる石材を用いている。この石材のもつ特性からか花崗斑岩を素材とするものは自然面を大きく残し、縁辺部に調整を加えただけのものが多い。また凝灰岩を素材とするものは、基部又は刃部を大きく欠損するものが目立つ。

(2) 石鎌 (第33図2018)

4A区から1点出土した。横幅は残存部位で6.9cm、縦幅3.7cm、最大厚1.0cm、重量44.6gを測る。粘板岩製で盤状節理面を表裏に有する。調整加工は一侧縁に限定され、刃部は半月状に弧を描く。

(3) 石鎌 (第34図2019~2033)

石鎌は139点の出土があった。本遺跡の石器群の中で最も多い。これらを基部の形状(凹基・凸基)によって二つに大別し、その抉入又は茎部の作出と両側縁の剥離の方向、大きさなどの諸特徴によって以下のように分類した。

無茎

I類：平面形状は逆V字状、抉入は深く三角形のもの。56点出土。

II類：側縁に丸みがあり、抉入も調整により丸く仕上げられている。この中には脚が鎌身體に対して著しく長いものを含める。17点出土。

III類：抉入が小さく平面形状は三角形。24点出土。

有茎

IV類：長形のもの。両側縁は直線的か外反するか二種に細分が出来る。19点出土。

V類：短形のもの。両側縁は内反する。3点出土。

VI類：いわゆる柳葉形のもの。4点出土。

この他、無茎に属すが身部の器厚が較りこまれるものをVII類とした。これは3点出土した。

石材はほとんどを下呂石が占め、チャートが22点で全体の16%、黒曜石が4点、水晶、瑪瑙

が各1点であった。



第31図 石器形態模式図

風化が激しいものが多いため、各類の詳細な観察は困難であるがⅠ類とⅢ類は全般に調整が粗く、特にⅢ類はチャート製以外、鋭利さに欠ける。Ⅳ類は茎部作出の技法によって細分が可能である。鎌身の下半部の両側縁に深く大きい剥離を一回程度加えることによって茎部を作り出すものと、鎌身の縁辺と同様な調整を連続して加えているが、調整剥離の方向を変化させることによって茎部を作り出すものの二種である。これらはまた、茎そのものの末端が尖るものと、舌状に丸く仕上げられるものに分けられる。共通するのは鎌側部と茎部の境界が非常に明瞭であることである。

(4) 石錐 (第34図2034~2038)

石錐は36点出土した。棒状を呈すものが16点、つまみ部を有すものが20点である。後者は不定形な剥片に錐部を設けたもので、多くの先端部は扁平で鈍い。この中にあって2037の錐部断面は菱形を呈し鋭利である。錐部に磨耗痕を認めるものは9点ある。2038はつまみ部の形状が大きく、五角形を呈す。また錐部は表裏両面から比較的大きな剥離を加え、その後細かな調整を加えている。つまみ部の形状は多様である。中には一見して錐部がどの一角になるのか迷うような三角形状の剥片を素材としたものがある。石材はチャートを2点認めるほかはすべて下呂石である。

(5) 楔形石器 (第34図2039~2043)

上下両縁辺または両先端から剥離があり、細かな碎片が剥落した痕跡が残されるという点に注目し楔形石器としてまとめた。これは16点確認された。多くは不定形ではあるが平面形態は上下が直線状になる四角形と、上下両端が尖る細長い形状を呈すものに分類が可能であろう。もちろん中には手頃な剥片を用いたものもある。2039が本遺跡中では最大のものである。2040は四角形を呈す中で大きさが平均的である。これは裁断された両側縁をもつ。2041は細長い形状を呈し、自然面を留める上端には加擊の集中した痕跡がみられる。このように紡錘状になるものはこの他1例ある。この楔形石器も下呂石が多用されている。チャートは3点である。この石器類に入れなかったが、5B区から加擊か反作用による衝撃か判然としないが剪断面で明瞭に残す剥片が出土した。黒曜石製で縦長の形状をもつ。ボジ面にはバルブが残り、リング

が末端近くまで及ぶ。

(6) 削器 (第35図2044~2047)

削器は7点出土した。すべて下呂石製である。いずれも縦長の剥片を素材としている。2044は幅広の剥片で2回から3回の調整により肉厚な部分を減じている。刃部は正面右と下縁部の二ヶ所に作出されている。右の刃部は背面側からほぼ均一な角度と深さで剥離を施しているが、下縁部は浅いながらもノッチ状に剥離を加えている。主に正面右の刃部先端は使用によると思われるつぶれが確認される。2046も幅広の剥片で一側縁に折断面をもつ。素材の形状を大きく変えることなく、折断面以外の縁辺に表裏両面から調整を施しているため2044より刃部の角度は小さく、刃部そのものが鋭利な感をもつ。2047はバルブ付近の厚みを除去する数回の剥離を施した後、背面側から打撃を加え一側縁に刃部を作出している。下縁部には刃部は認められないものの範様に使用したかのようなつぶれが観察される。2045は背面右の剥離痕をみると素材としてはいくぶん幅広であったものと思われる。一側縁の上端から下端までまず深い剥離を施し、後に浅く細かな調整剥離を加え刃部としている。加撃は背面側からである。図示できなかつた3点は、いくぶん小形の不定形剥片を素材とするもので、この素材本来の形状を大きくは変えていないものである。

(7) 敲石 (第35図2045)

敲石は1点、8E区から出土した。端部に敲打痕を有する亜円礫で、重量137gの流紋岩を用いている。長さは7.6cm、幅は5.4cm、厚さは2.1cmを測る。

(8) 石錘 (第35図2046)

石錘は1点、5B区から出土した。頁岩製で、重量は73.2gを測る。扁平な梢円礫の上下両端に抉入部を設けている。3枚程度の剥離の結果、階段状に剥離面が残るが、硬質な石材のためかえぐりそのものは浅い作出となっている。

(9) 石匙 (第35図2047)

石匙は1点、5B区から出土した。下半部は欠損しているが、つまみ部と刃部の位置関係から形態は縦型の範疇に入ると思われる。つまみ部の形状は角張っており、身部への移行点付近が磨耗している。石質は下呂石で、つまみ部高さは0.9cm、幅は0.6cmを測る。

(10) 石槍 (第35図2048)

石槍は1点出土した。下呂石製の輪郭がよく整った完形品である。長さは4.5cm、最大幅は2.

1cm、最大厚は1.1cm、重量は8.7gを測る。分厚く幅広の剥片を用いており、表裏共に右側縁に入る調整には比較的安定した剥離面がみられる。

(11) 砥石 (第36図2049)

砥石は3点出土した。いずれも破損品で全体の形状は不明であるが、板状の素材を利用していいる。石質は砂岩が2点、粘板岩が1点である。図示したものは表面と面どりされた側縁に擦痕が顕著にみられる。その他は側縁のみに擦痕がみられる。

(12) 石核 (第36図2050)

総数17点で下呂石が11点、チャートが4点、瑪瑙が1点、凝灰岩が1点である。各総重量は下呂石が115.5g、チャートが74.7g、凝灰岩は112.3g、瑪瑙は2.0gである。下呂石については原石として3点確認した。この内1点は外皮の状況を観察すると河原石の円錐面を残したものがある。その他は自然崩壊の角礫であることを表皮の一部に残す。打製石斧の石材に多用された凝灰岩は剥片数を第9・10表のその他の剥片に示したとおり多量に出土しているが、明らかに石核としたものは1点のみである。下呂石については外皮の色調が乳白色に変色しているものがある。これは被熱を受けた可能性がある。

(13) 剥片・碎片 (第9・10表、第38~41図)

これらの総数は3145点である。石材による内訳は下呂石が2312点、チャートが366点、黒曜石が69点、その他凝灰岩・花崗斑岩・流紋岩等が398点である。やはり下呂石が75%を占め卓越した状況を示す。視点を仮に小形の定形的な石器に求め、下呂石の占有率を求めるとき84%になる。総重量は9351gであるが、石材と製品との関係において、打製石斧に主に使用された凝灰岩等を省くと総重量は4463gになる。この内訳は下呂石が3810g、チャートが600g、黒曜石が53gである。重量における下呂石の占有率は85%を占め、点数の数値と近接する。本遺跡で明らかになった下呂石の優位さは、産地との距離およびこの遺跡が位置する白川流域の地勢に還元される。剥片等の平面分布は第38図~41図を参照されたい。

(14) 二次加工のある剥片 (第36図2051~第37図2054)

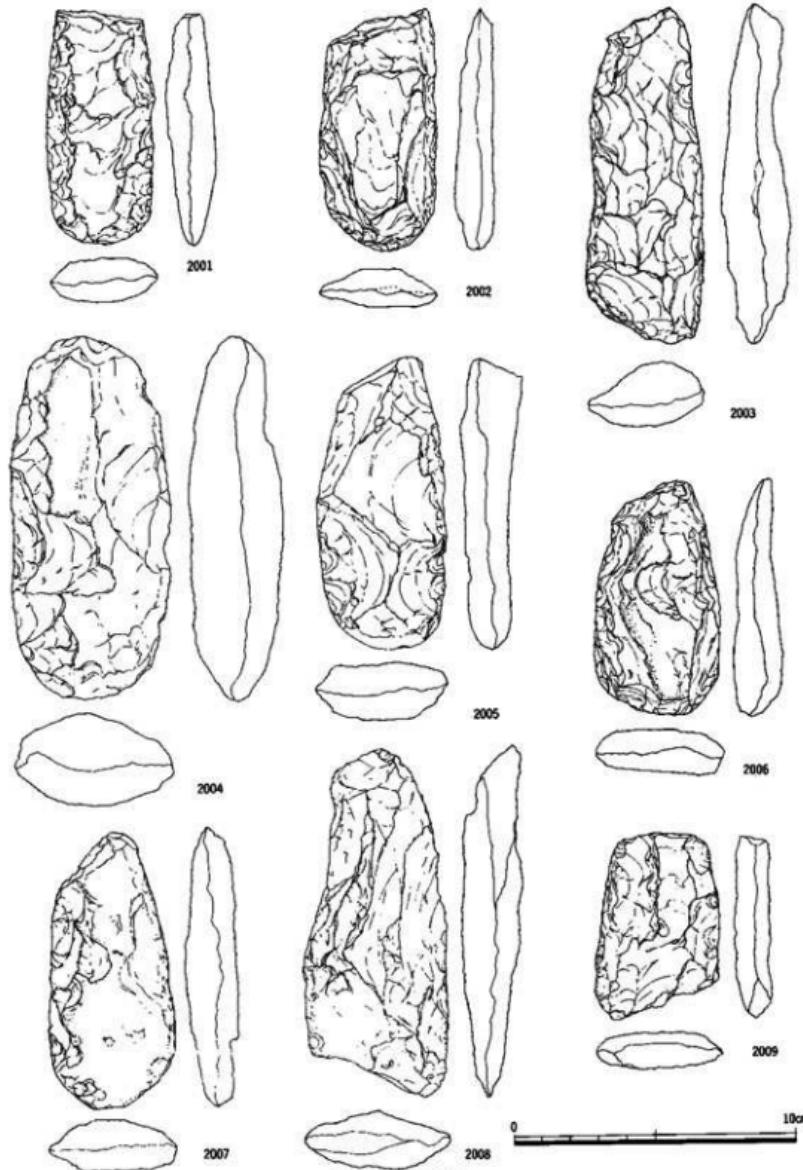
不定形な剥片の縁辺に連続的な又は不規則な調整痕を認めたものをここにおさめた。総数は33点である。横長の剥片に調整が施されたものは10点、その他は縦長の剥片である。未製品や製品の破損したものも含まれるとと思われる。石材は下呂石が26点、その他はチャートである。

第9表 地面跡石質別剝片出土状況(1)

グリッド	下呂石剝片数	重量(g)	チャート剝片数	重量(g)	黒曜石剝片数	重量(g)	他の剝片数	重量(g)
1 A	7	10.6	2	1.0	1	0.7		
1 B	11	14.1	2	3.4			3	14.2
1 C	8	4.2	3	1.4			3	1.4
2 A	11	7.6	2	0.4				
2 B	24	19.4	3	4.5	4	1.0	1	6.1
2 C	22	31.0	6	7.3			3	95.6
3 A	18	57.2	1	0.7			2	22.2
3 B	18	23.3	1	0.5			2	51.7
3 C	33	47.4	3	2.1			6	90.9
3 D	4	14.6						
4 A	52	102.0	10	8.9	3	2.0	78	771.2
4 B	18	53.8	4	13.5			19	245.1
4 C	5	5.6	1	0.6			1	4.7
4 D	8	14.1			1	0.5	1	0.5
5 A	43	104.6	13	23.9	3	2.4	54	921.3
5 B	83	103.7	36	30.9			65	566.4
5 C	27	69.0	5	6.8	1	0.2	1	6.7
5 D	18	34.5	3	18.2			2	3.1
6 A	23	30.2	6	2.4	1	1.5	12	116.3
6 B	67	87.2	22	38.0			20	203.2
6 C	40	58.0	14	19.7	1	1.3	9	105.3
6 D	18	30.7	2	1.2			3	23.1
7 A	1	1.0					2	49.8
7 B	57	89.2	10	13.0	1	0.2	6	92.8
7 C	42	88.5	4	5.1	3	1.6	6	42.9
7 D	35	69.7	9	4.3	2	0.8	3	28.9
8 B	24	33.3	4	4.0			4	21.6
8 C	84	156.7	10	9.6	6	6.1	4	15.5
8 D	45	72.6	5	5.8			2	292.1
8 E	6	4.6						
9 B	22	65.1	4	2.2			1	42.3
9 C	192	249.9	22	22.6	4	1.6	3	35.1
9 D	117	159.3	9	4.7	3	2.4	1	79.7
9 E	16	50.0	4	4.1			1	18.7
10 C	49	144.3	6	7.6	1	0.4	1	1.7
10 D	58	80.4	5	5.3	1	0.5		

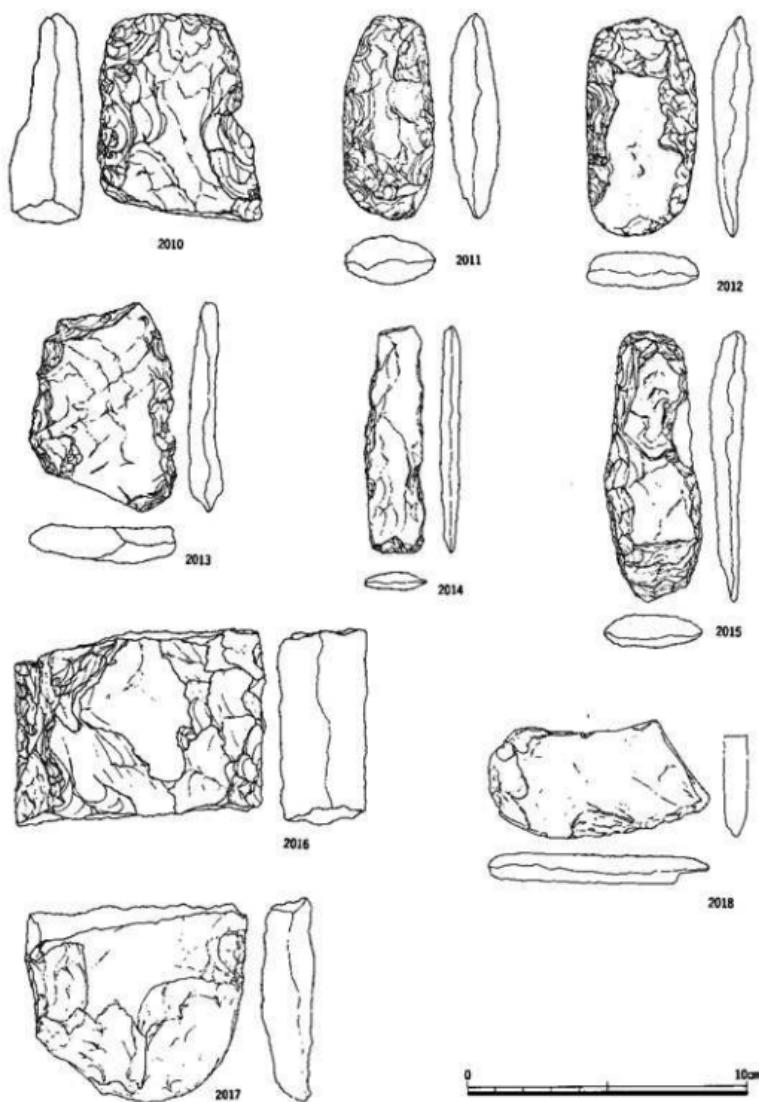
第10表 障地遺跡石質別剝片出土状況(2)

グリッド	下凹石剝片数	重量(g)	チャート剝片数	重量(g)	黒曜石剝片数	重量(g)	その他の剝片数	重量(g)
10E	21	35.2	9	90.2	1	0.5	1	3.2
11C	30	69.4	2	0.9	1	0.2	1	14.1
11D	19	33.6	1	6.0				
11E	91	125.1	7	16.8	3	2.0		
11F	10	21.7	6	19.6				
12C	9	24.3	1	1.8				
12D	75	151.0	5	12.1				
12E	13	93.8	5	14.9			3	35.7
12F	20	50.6	3	11.2			2	14.5
13D	50	60.9	3	4.9			3	38.8
13E	69	112.0	11	13.6			6	46.5
13F	50	104.0	9	12.0	2	1.5	4	23.1
14D	44	34.7	3	3.3				
14E	61	84.6	4	12.8	3	5.1		
14F	24	47.3	6	5.5	1	0.1	2	15.4
14G	5	6.1	5	7.3				
15D	3	11.2						
15E	40	55.7	7	11.9			42	29.0
15F	17	25.0	4	5.6	1	0.8		
15G	4	3.4	4	14.0				
16E	21	16.4	1	0.2			1	5.0
16F	44	63.6	6	5.0	2	1.1		
16G	7	19.7	4	19.9				
17F	6	7.0						
17G	8	15.4	5	7.0	1	0.1	1	10.7
18F	55	31.5	1	1.2			4	79.5
18G	39	38.8	3	2.3				
19F	11	51.2	1	0.7			3	39.0
19G	39	66.4	4	4.0			4	20.4
19H	26	59.6	6	15.4			3	4.1
20F	12	10.9	1	1.1	1	0.1	1	0.4
20G	20	32.0	3	3.5			24	456.3
21H	22	31.2	1	0.2			1	82.0
21I					1	0.7		
合計	2230	3751.7	358	596.8	53	35.4	396	4887.6

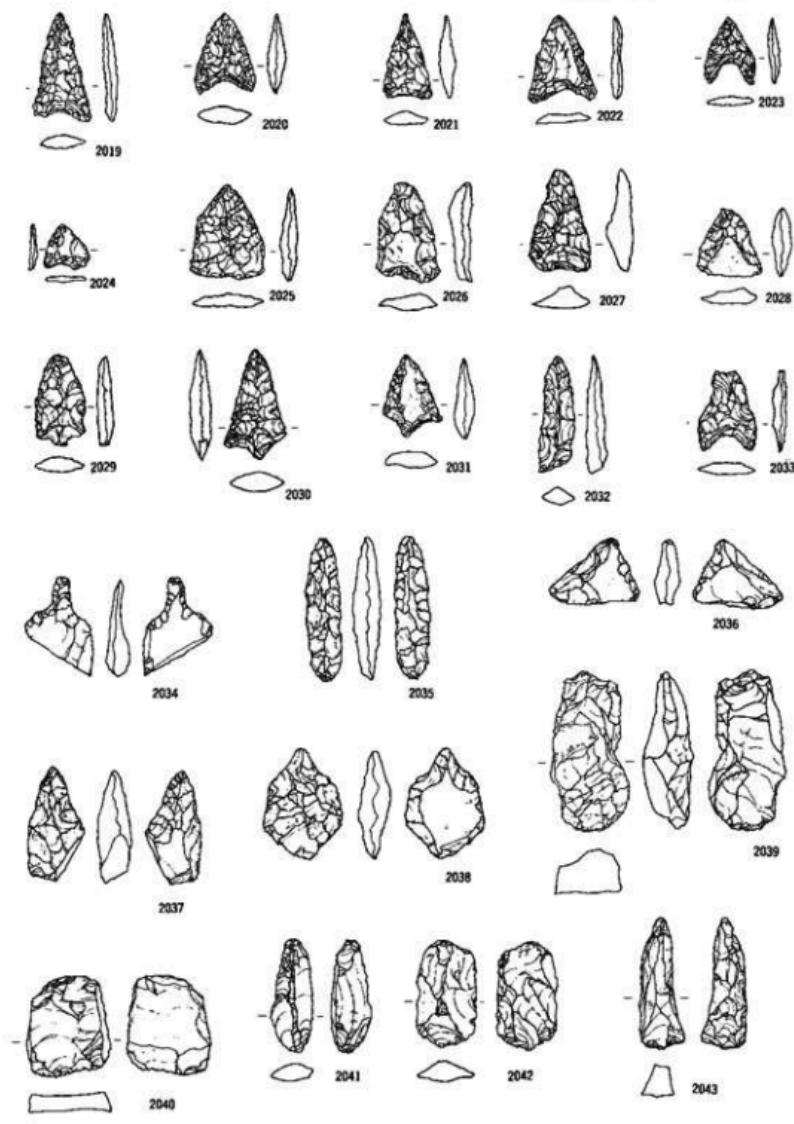


第32図 打製石斧(1)

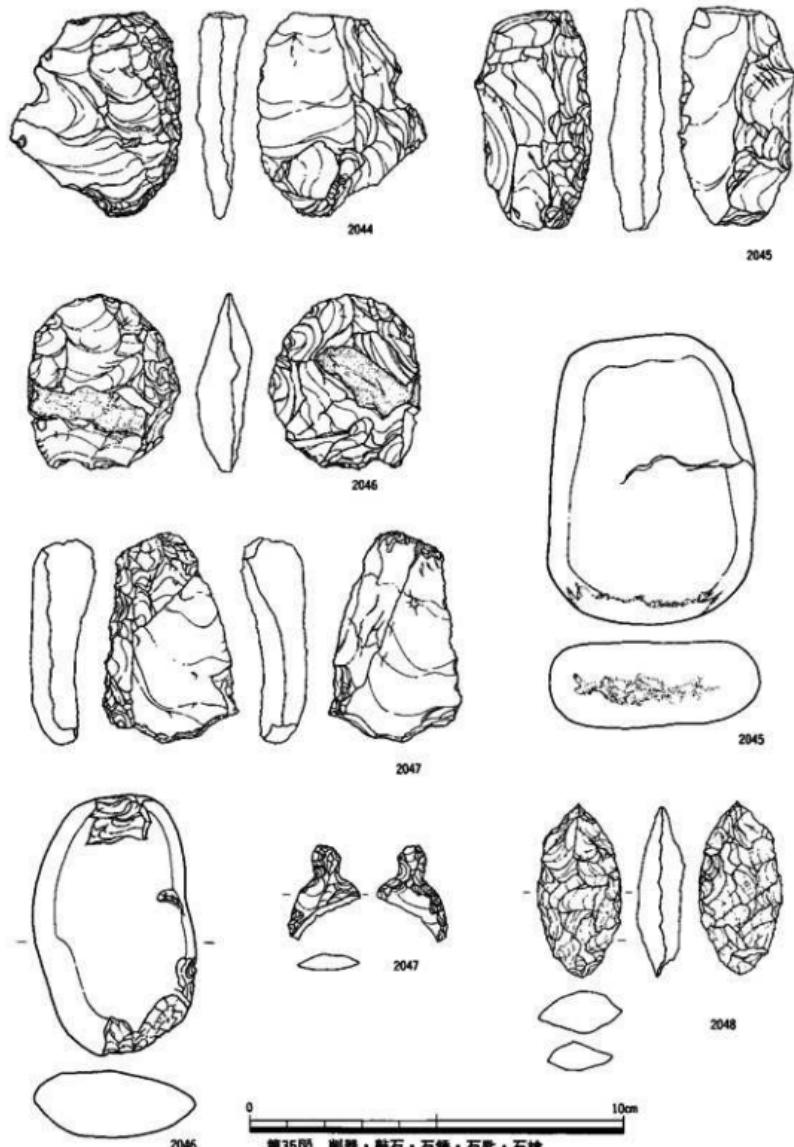
0 10cm



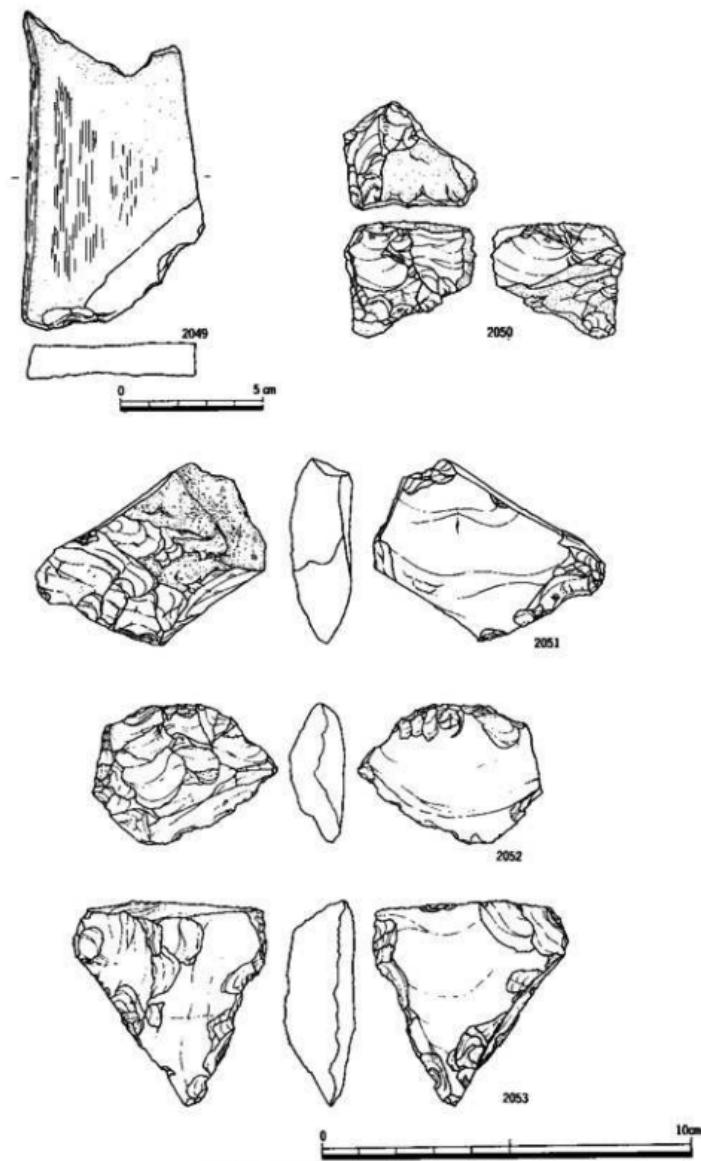
第33図 打製石斧(2)、石錐



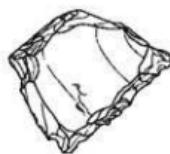
第34図 石器・石錐・複形石器



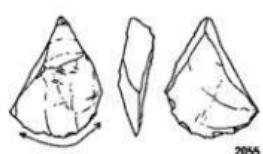
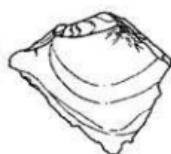
第35図 刮器・敲石・石鏟・石匙・石槍



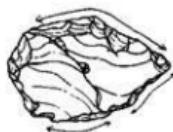
第36図 岩石・石核・二次加工のある剥片



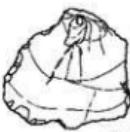
2054



2055



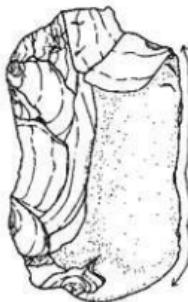
2056



2057



2058



2059



第37図 使用痕のある剝片

第11表 打製石斧 1類計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石質	備考	標図番号
1	6B	IV	10.9	4.1	1.6	109.3	完形	花崗斑岩		
2	4A	IV	10.7	4.7	1.5	95.1	完形	花崗斑岩	自然面残す	
3	5B	III	11.8	3.8	2.3	105.6	完形	花崗斑岩	着柄部に調整多し	2003
4	5B	III	(7.3)	4.3	1.6	62.7	頭部少欠	花崗斑岩		
5	5B	III	7.9	3.8	1.4	53.8	完形	花崗斑岩		
6	5B	IV	(8.2)	3.2	1.5	57.0	頭部少欠	花崗斑岩	自然面残す	2001
7	5B	I	8.9	3.5	1.7	86.1	完形	花崗斑岩		
8	1C	I	(7.3)	3.6	1.6	61.4	頭部少欠	花崗斑岩	風化	
9	20G	I	7.8	4.0	1.1	50.0	完形	ホルンフェルス		
10	20G	III	8.7	4.0	1.3	57.2	頭部1/2欠	花崗斑岩	刃部磨耗	
11	6B	III	(8.1)	4.1	1.3	49.3	頭部少欠	花崗斑岩	面理面で剥落	2002
12	5A	IV	(7.7)	3.7	1.4	43.2	刃部少欠	花崗斑岩		
13	4B	III	(5.1)	3.6	1.0	26.3	削傷のみ	花崗斑岩		
14	4A	IV	(6.0)	3.7	0.9	29.1	下部欠	花崗斑岩		
15	6A	IV	(3.3)	(3.8)	1.1	16.2	刃部のみ	花崗斑岩		
16	12E	I	(3.7)	4.4	1.1	31.8	削傷のみ	花崗斑岩		
17	15D	I	(4.7)	4.1	1.2	35.8	頭部のみ	花崗斑岩	風化	
18	5B	IV	(5.3)	3.7	1.0	23.1	頭部欠	花崗斑岩		

第12表 打製石斧 2類計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石質	備考	標図番号
19	2C	III	10.5	4.5	2.0	123.4	完形	花崗斑岩		
20	3C	I	(10.1)	4.5	1.7	95.6	頭部少欠	花崗斑岩		2005
21	5A	IV	(9.5)	4.8	1.5	85.7	頭部少欠	花崗斑岩		
22	20G	III	9.5	4.6	1.9	92.7	完形	花崗斑岩		
23	7C	II	9.9	4.5	1.0	57.8	完形	花崗斑岩		
24	5B	III	9.8	4.3	1.8	91.8	完形	花崗斑岩		
25	17F	I	(7.2)	5.4	1.5	74.0	下部欠	花崗斑岩		
26	11C	I	(7.3)	4.2	1.8	74.5	刃部少欠	花崗斑岩		
27	5A	III	(7.6)	4.1	1.2	46.9	刃部少欠	花崗斑岩		
28	21G	I	(6.3)	4.5	1.6	58.7	下部欠	花崗斑岩		
29	10E	I	(5.5)	4.8	1.0	35.3	上半分のみ	花崗斑岩		
30	S K18	-	(4.8)	4.6	1.1	36.3	上半分のみ	花崗斑岩		
31	13E	III	(4.7)	4.4	1.1	25.2	上半分のみ	花崗斑岩		
32	5B	IV	(3.0)	4.3	0.8	11.8	刃部のみ	花崗斑岩		
33	6A	IV	12.6	5.5	3.2	257.1	完形	花崗斑岩		2004

第13表 打製石斧 3類計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石質	備考	標図番号
34	表層	-	(7.5)	5.1	2.6	117.3	下部少欠	花崗斑岩		
35	12E	I	(6.6)	4.0	1.2	43.1	完形	花崗斑岩	刃部磨耗	
36	5B	III	(5.8)	4.9	1.2	34.5	上半分のみ	花崗斑岩	側縁に月念な調整	
37	2A	I	(6.9)	4.8	2.0	73.3	上半分のみ	花崗斑岩		
38	10C	I	(6.1)	3.3	0.7	16.9	下部少欠	花崗斑岩		
39	5B	III	(6.6)	5.0	2.9	109.1	上部のみ	花崗斑岩	削傷肥厚	
40	5A	V	(6.9)	4.3	1.9	65.6	下部少欠	花崗斑岩		
41	5A	V	(4.8)	3.3	1.6	29.5	刃部少欠	安山岩	風化悪い	
42	5A	IV	(8.2)	4.3	1.4	59.5	頭部少欠	花崗斑岩		
43	S B2	-	9.7	4.4	1.6	76.7	完形	石英安山岩	理上上層より出土	2007
44	2B	I	9.7	4.7	1.5	47.4	完形	花崗斑岩		
45	5A	III	(11.5)	4.9	1.9	108.1	刃部少欠	花崗斑岩	着柄部内窓する	2008
46	10C	I	(5.9)	5.5	1.5	56.4	下半分のみ	花崗斑岩		
47	12E	I	(3.3)	4.7	1.0	24.2	刃部のみ	粘板岩	刃部先端磨耗	

第14表 打製石斧 4類計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石質	備考	辨団番号
48	S B 2	-	(6.5)	4.2	1.0	37.6	刃部欠	燧灰岩	炉縁石に近接して出土	2009
49	6 A	IV	(6.5)	4.6	2.0	62.5	上半分のみ	燧灰岩		
50	6 B	IV	(4.9)	4.6	1.0	34.7	上半分のみ	粘板岩		
51	5 A	V	(6.8)	4.7	1.9	81.7	下部欠	玄山岩		
52	4 A	IV	(6.9)	5.5	2.3	103.0	下部欠	花崗斑岩	自然面残す	2010

第15表 打製石斧 5類計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石質	備考	辨団番号
53	5 B	V	7.1	3.1	1.6	40.0	完形	燧灰岩		2011
54	S B 2	-	7.6	3.8	1.2	43.2	完形	燧灰岩	裡土上層より出土	2012
55	4 B	III	6.3	3.5	0.9	28.7	完形	燧灰岩		
56	3 D	I	7.9	4.2	1.7	67.2	完形	ホルンフェルス	自然面を大きく残す	
57	17 G	I	(5.3)	3.4	1.0	24.1	上半分のみ	燧灰岩		
58	19 G	I	6.7	3.4	0.7	24.3	完形	砂岩	主要剥離面を残す	
59	15 D	I	7.9	5.0	1.9	89.2	完形	流紋岩	未製品	
60	12 E	I	(7.2)	5.1	1.0	42.3	刃部欠	鈍石		2013
61	6 B	I	(7.7)	4.3	0.8	30.7	刃部欠	粘板岩		

第16表 打製石斧 6類計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石質	備考	辨団番号
62	S B 2	-	8.0	2.0	0.6	14.5	完形	粘板岩	床面に斜位に刺さる	2014
63	5 B	IV	9.5	3.2	1.1	35.6	完形	粘板岩	刃部を薄く仕上げる	2015
64	7 B	I	(4.2)	2.2	1.0	11.6	下部欠	粘板岩		
65	19 F	I	(5.7)	2.2	1.0	16.4	刃部欠	粘板岩		

第17表 打製石斧 7類計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石質	備考	辨団番号
66	5 A	I	(6.1)	8.7	3.0	277.1	剝離のみ	燧灰岩	自然面を残す	2016
67	5 A	I	(7.0)	7.7	(1.4)	103.8	下部のみ	花崗斑岩	裏面は大きく剥落する	2017
68	4 A	IV	(8.7)	6.5	2.2	164.7	刃部欠	燧灰岩		
69	5 A	IV	(17.1)	(9.4)	(3.6)	764.0	-	燧灰岩	未製品	

第18表 石器計測表(1)

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石質	分類	備考	博物館番号
1	1 B	I	1.7	(1.1)	0.3	0.3	片脚欠	下呂石	I		
2	1 C	I	(1.3)	1.6	0.3	0.6	上部欠	下呂石	II		
3	1 C	I	(1.6)	1.3	0.4	0.6	頭部欠	下呂石	I	側縁は屈曲状	
4	2 A	III	(1.7)	1.5	0.3	0.9	頭部欠	下呂石	III	脚一部欠損	
5	2 C	III	1.8	1.3	0.3	0.5	ほぼ完形	下呂石	I	風化	
6	2 C	III	(2.4)	1.3	0.4	1.1	基部欠	下呂石	IV	側縁丸く脚上部で内湾	2029
7	3 C	I	(1.7)	1.5	0.4	0.7	先端部欠	下呂石	I	風化	
8	3 C	I	2.9	(1.6)	0.5	1.7	片脚欠	チャート	IV	基部先端鋭利	2030
9	3 C	III	(2.3)	(1.2)	0.5	1.1	先端部欠	下呂石	IV	調整粗い	
10	4 A	I	1.5	1.1	0.2	0.3	ほぼ完形	下呂石	I	風化	
11	4 A	III	2.3	1.7	0.5	1.2	完形	下呂石	IV		
12	4 A	III	(1.4)	(1.5)	0.4	0.8	下部欠	下呂石	-		
13	4 A	III	1.5	1.2	0.2	0.2	完形	下呂石	II	いわゆる長脚鉢	
14	4 A	III	(1.3)	(1.1)	0.3	0.3	頭部欠	下呂石	I	片脚部欠	
15	4 B	III	(2.3)	1.9	0.4	1.8	頭部欠	下呂石	III	偏平	
16	4 D	I	(1.8)	1.3	0.5	0.7	先端部欠	下呂石	I		
17	5 A	I	(1.6)	1.6	0.5	1.0	上部欠	チャート	IV	基部先端鋭利	
18	5 A	I	1.7	1.2	0.3	0.5	ほぼ完形	下呂石	I	基部先端鋭利	
19	5 B	III	(2.3)	1.7	0.6	2.1	頭部欠	下呂石	III	調整粗い	
20	5 B	III	(1.5)	(1.4)	0.5	1.1	側部のみ	下呂石	-	後形	
21	5 B	III	1.9	(1.6)	0.2	0.4	片脚部欠	チャート	II	側縁直線状	
22	5 B	III	1.5	(1.0)	0.3	0.2	片脚部欠	下呂石	II		
23	5 C	I	(2.1)	1.5	0.3	0.9	頭部欠	下呂石	VII	側部下位紋り込まれる	2033
24	5 C	I	2.3	1.3	0.5	1.0	ほぼ完形	下呂石	VI	無基部幅広	
25	6 B	III	1.6	1.5	0.4	0.7	ほぼ完形	下呂石	I	先端部折れ後に再側整	
26	6 B	III	1.6	1.2	0.3	0.5	ほぼ完形	下呂石	II	片脚縁屈曲状	
27	6 C	I	1.5	1.2	0.3	0.5	ほぼ完形	下呂石	I	調整粗い	
28	6 C	I	3.3	1.4	0.6	2.0	完形	チャート	IV	精緻なつくり	
29	6 D	I	2.9	1.5	0.4	1.0	ほぼ完形	下呂石	I		2019
30	6 D	III	(1.7)	1.9	0.4	0.9	上部欠	下呂石	I		
31	6 D	III	(1.8)	1.2	0.3	0.7	基部欠	チャート	IV	側縁の一部に屈曲点	
32	7 B	I	2.1	1.5	0.5	1.2	ほぼ完形	チャート	V	自然面を残す	2031
33	7 B	I	1.5	1.5	0.4	0.6	完形	下呂石	I	先端部丸味	
34	7 C	I	2.7	1.5	0.5	1.1	完形	チャート	IV	側縁外反	
35	7 C	III	1.8	1.4	0.3	0.5	完形	下呂石	III		
36	8 C	I	2.3	1.4	0.4	0.7	完形	下呂石	IV	基部先端丸味	

第19表 石鎚計測表(2)

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石質	分類	備考	採団番号
37	8 C	II	2.2	(1.3)	0.5	0.9	片側部欠	チャート	I	先端部錐状に尖る	
38	8 D	I	(2.0)	1.3	0.4	0.8	先端部欠	下呂石	IV		
39	8 D	I	(1.4)	1.2	0.3	0.3	先端部欠	下呂石	II		
40	9 C	I	(1.5)	(1.4)	0.4	0.6	頭部欠	下呂石	III	調整棍錐	
41	9 C	I	1.9	1.4	0.4	0.5	完形	下呂石	I	片側錐外反	
42	9 C	II	(1.1)	(0.9)	0.3	0.2	頭部欠	チャート	I	片側部欠	
43	9 C	II	(1.6)	(1.0)	0.3	0.5	右側錐欠	下呂石	I		
44	9 C	III	(3.0)	0.9	0.4	1.0	下端部欠	下呂石	VI		2032
45	9 C	III	2.1	(1.7)	0.3	1.1	完形	下呂石	III		
46	9 C	III	3.4	1.6	0.5	1.7	完形	下呂石	IV		
47	9 C	III	2.0	1.5	0.2	0.4	ほぼ完形	チャート	III	扁平	
48	9 C	III	2.0	(1.5)	0.3	0.7	片側部欠	下呂石	I		
49	9 C	III	(1.7)	(1.4)	0.4	0.7	頭少欠	下呂石	I		
50	5 A	IV	2.2	1.8	0.8	2.4	完形	下呂石	III	先端部丸味	
51	6 A	IV	1.6	0.8	0.3	0.2	完形	下呂石	I		
52	6 B	IV	2.0	(1.4)	0.4	0.7	片側少欠	下呂石	I		
53	5 B	IV	1.8	0.9	0.3	0.3	ほぼ完形	チャート	I	先端部肥厚	
54	5 B	III	2.4	2.0	0.4	1.9	完形	チャート	I		2025
55	S B 2		2.1	1.6	0.5	1.1	完形	チャート	I	貯藏穴様土坑埋土上層	2020
56	5 B	IV	1.8	1.3	0.2	0.3	完形	下呂石	II	抉入縫かな調整	2023
57	5 B	IV	1.7	1.3	0.3	0.3	完形	下呂石	II	抉入縫かな調整	
58	9 C	II	1.3	1.0	0.3	0.5	完形	水晶	II	側縁に丸缺	
59	9 D	I	2.0	1.2	0.3	0.6	ほぼ完形	下呂石	III		
60	9 D	I	(1.4)	1.6	0.3	0.7	上部欠	下呂石	III		
61	9 D	I	2.0	1.1	(0.2)	0.5	ほぼ完形	下呂石	I	裏面剥落	
62	9 D	III	2.5	1.7	0.5	2.1	ほぼ完形	下呂石	III	自然面残す	2026
63	9 D	III	2.2	1.8	0.4	1.4	ほぼ完形	下呂石	III		
64	9 D	III	(1.8)	1.4	0.3	0.7	頭部欠	下呂石	I		
65	9 D	III	2.2	(1.4)	0.5	1.1	片側部欠	チャート	IV	茎部舌狀	
66	9 E	III	2.3	1.5	0.3	1.2	完形	チャート	V	基部断面は横円形	
67	9 E	III	(3.4)	1.2	0.4	1.8	頭部欠	下呂石	IV	作用部位菱形	
68	10 C	III	2.3	1.7	0.2	1.0	完形	下呂石	I		2022
69	10 C	III	2.0	1.6	0.3	0.7	完形	下呂石	I		
70	10 C	III	1.8	1.3	0.3	0.5	完形	下呂石	I	風化	
71	10 D	I	2.4	1.5	0.4	1.0	完形	下呂石	IV		
72	10 D	I	(2.2)	(1.5)	0.4	1.2	両側部欠	チャート	-		

第20表 石鑿計測表(3)

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	遺存状態	石質	分類	備考	標識番号
73	10D	I	2.7	1.7	0.5	1.2	完形	下呂石	I		
74	10D	I	2.5	1.4	0.4	0.8	完形	下呂石	I	鋸部は逆剥状	
75	10D	III	1.6	1.8	0.6	1.2	完形	黒雲石	III	先端部丸味	
76	10E	I	(1.7)	1.2	0.5	1.0	先端部欠	チャート	IV	顎面はかまばこ型	
77	10E	I	(2.3)	(1.7)	0.2	0.6	片側部欠	下呂石	I		
78	11E	I	2.2	(1.5)	0.4	0.8	片側部欠	下呂石	III		
79	11E	I	1.4	1.6	0.4	0.6	上部欠	下呂石	I		
80	11D	III	2.5	2.2	0.8	3.7	-	下呂石	-	未製品	
81	11E	I	2.7	1.6	0.7	2.0	完形	下呂石	III	中央部位肥厚	2027
82	11E	I	1.9	(1.6)	0.2	0.5	片側部欠	下呂石	II		
83	11E	III	(2.6)	2.0	0.5	2.8	頭部欠	下呂石	III	全体に偏平	
84	11E	III	(2.1)	1.5	0.3	0.7	先端部欠	下呂石	I		
85	11E	III	(1.2)	1.3	0.5	0.7	頭部欠	下呂石	III	風化激しい	
86	12D	I	2.7	1.6	0.5	1.3	完形	下呂石	IV	側縁や外反	
87	12D	I	2.4	1.4	0.3	0.9	先端部少欠	下呂石	I		
88	12D	I	2.6	(1.2)	0.3	0.8	片側部欠	下呂石	I		
89	12D	I	2.1	1.4	0.4	0.9	完形	下呂石	I		
90	12D	I	2.6	2.0	0.5	1.8	ほぼ完形	下呂石	III		
91	12D	I	2.6	1.3	0.5	1.3	ほぼ完形	チャート	IV	先端部角度純い	
92	12D	I	(1.3)	(0.7)	0.4	0.3	下部欠	チャート	-		
93	12F	III	(1.5)	1.2	0.3	0.4	頭部欠	下呂石	I	片側部欠	
94	13D	I	2.5	1.2	0.4	1.0	先端部欠	下呂石	I		
95	13D	I	1.0	1.5	0.2	0.4	上部欠	下呂石	I		
96	13E	III	1.3	1.7	0.5	0.9	基部欠	めのう	V		
97	13E	III	(2.0)	1.3	0.5	1.3	ほぼ完形	下呂石	VI	先端部少欠	
98	13E	III	(1.8)	1.3	0.3	0.7	頭部欠	下呂石	I		
99	14D	I	2.1	1.5	0.3	1.1	ほぼ完形	下呂石	III		
100	14D	I	(1.8)	1.8	0.3	0.9	頭部欠	下呂石	I		
101	14D	I	(2.0)	1.5	0.3	0.7	先端部欠	下呂石	I		
102	14D	I	(2.7)	(1.4)	0.4	0.9	側縁部欠	下呂石	I	先端部角度純利	
103	14E	I	2.6	1.7	0.6	1.8	完形	チャート	I		
104	14F	III	1.7	1.5	0.4	0.6	完形	下呂石	II		
105	15D	I	1.8	1.5	0.3	0.4	完形	下呂石	II		
106	15F	I	2.4	1.4	0.5	1.0	完形	下呂石	I	側縁外反	
107	16F	I	(1.4)	(1.1)	0.4	0.5	下部欠	下呂石	-		
108	16F	I	3.0	(1.7)	0.4	1.3	片側部欠	下呂石	I	偏平	

第21表 石器計測表(4)

No	出発区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石質	分類	備考	標図番号
109	16F	III	(1.3)	1.3	0.3	0.3	上部欠	下呂石	I		
110	16G	III	1.2	1.2	0.4	0.3	ほぼ完形	下呂石	I		
111	17F	III	2.4	1.3	0.4	0.6	完形	下呂石	I	先端部角度鋭利	2021
112	19G	I	1.8	(1.4)	0.5	0.9	片脚部欠	下呂石	I		
113	19G	I	1.6	1.3	0.4	0.7	完形	下呂石	I		
114	19G	I	2.3	1.2	0.3	0.7	ほぼ完形	下呂石	I		
115	19G	I	(1.7)	1.5	0.5	0.9	先端部欠	下呂石	I		
116	19H	I	(3.3)	1.4	0.5	1.8	先端部少欠	下呂石	IV	基部断面三角形	
117	20G	III	(2.1)	(1.0)	0.3	0.5	下部欠	下呂石	I		
118	20G	III	1.8	1.5	0.3	0.5	完形	下呂石	II		
119	20G	III	(1.5)	(0.9)	(0.2)	0.2	-	チャート	II	先端から片脚のみ残	
120	20G	III	(1.6)	(1.0)	0.3	0.5	脚部のみ	下呂石	-		
121	20H	I	2.7	1.3	0.4	1.3	先端部欠	下呂石	III		
122	20II	I	1.9	1.5	0.3	0.6	片脚部欠	下呂石	I		
123	22II	I	1.9	(1.4)	0.2	0.3	片脚部欠	下呂石	I		
124	表様	-	(1.7)	1.5	0.4	0.5	先端部欠	下呂石	II		
125	17G	I	(4.0)	1.6	1.0	5.0	先端部欠	下呂石	IV	基部断面三角形	
126	17G	I	2.8	(1.4)	0.3	0.8	片脚部欠	下呂石	I		
127	S K 5	-	1.8	1.7	0.4	1.1	ほぼ完形	下呂石	III		2028
128	5 C	I	1.2	1.2	0.1	0.2	-	黒曜石	II	未製品	2024
129	7 C	II	1.0	0.7	0.1	0.1	-	黒曜石	II	極小	
130	20F	III	(1.5)	1.3	0.3	0.6	頭部欠	黒曜石	I	頭部下位で外反	
131	13D	III	2.8	1.3	0.4	1.5	ほぼ完形	下呂石	IV		
132	13D	III	1.7	1.2	0.2	0.3	片脚少欠	下呂石	I		
133	13D	III	3.7	2.1	0.7	4.5	完形	下呂石	III		
134	13D	III	1.8	1.2	0.3	0.4	ほぼ完形	下呂石	II		
135	13D	III	2.0	1.3	0.5	1.0	完形	チャート	I		
136	4 A	IV	2.2	1.7	0.5	-	下呂石	-	未製品		
137	5 B	III	2.5	1.3	0.4	-	下呂石	-	未製品		
138	5 B	III	2.6	1.3	0.5	-	下呂石	-	未製品		
139	11E	I	2.4	1.6	0.7	-	下呂石	I	未製品		

表22 石錐計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	錐部長さ	石質	備考	標図番号
1	14F	I	2.5	1.8	0.5	(1.4)	つまみ部折損	0.9	下呂石	錐部断面格円形	2034
2	20F	III	2.5	1.4	0.7	3.6	ほぼ完形		下呂石	錐錐調整階段状	
3	表様	-	1.6	2.1	0.3	(1.9)	つまみ部折損	0.4	下呂石	錐部断面格円形	
4	6C	I	1.7	2.3	0.6	1.7	完形		下呂石		2036
5	13E	III	2.3	1.7	0.3	1.0	完形		下呂石		
6	10D	III	2.6	1.2	0.4	1.1	完形		下呂石		
7	不明	-	2.5	0.7	0.5	0.9	完形		下呂石	錐部断面三角形	
8	16F	III	2.4	0.8	0.5	0.8	完形		下呂石		
9	9D	III	1.4	1.2	0.2	(0.6)	錐部少欠	0.2	下呂石		
10	9C	I	1.8	0.9	0.4	(0.6)	錐部少欠		チャート		
11	9B	I	3.2	1.7	0.8	(3.5)	錐部少欠	0.2	下呂石		
12	9C	III	3.8	0.9	0.7	2.0	完形		下呂石		2035
13	1B	I	2.5	0.9	0.5	1.0	完形		下呂石		
14	13E	III	3.0	1.4	0.8	3.0	完形	1.3	下呂石	つまみ部周縁錐切斷	2037
15	15E	I	1.8	0.7	0.4	(0.6)	錐部欠		下呂石		
16	10D	I	2.3	0.8	0.4	0.7	完形		下呂石		
17	12D	I	1.8	0.6	0.4	(0.2)	一部欠		下呂石		
18	14F	I	3.2	1.2	0.5	(1.7)	錐錐欠		下呂石		
19	15F	III	2.9	2.1	0.7	3.3	完形	0.6	下呂石	つまみ部形態五角形	2038
20	14E	I	2.4	0.9	0.5	(1.2)	一部欠		下呂石		
21	2B	III	1.5	1.3	0.3	0.6	完形	0.7	下呂石	錐部断面扁平	
22	表様	-	2.1	1.5	0.4	0.8	完形	0.7	下呂石		
23	9D	III	2.3	0.8	0.5	0.8	完形		下呂石		
24	5B	I	1.9	1.9	0.5	(1.4)	一部欠	0.5	下呂石		
25	14E	I	2.2	0.9	0.5	0.9	完形		下呂石		
26	13E	III	2.5	1.6	0.7	1.2	完形		下呂石		
27	10D	I	2.5	1.3	0.6	1.6	完形	0.2	下呂石	両肋錐の可能性	
28	7B	III	2.0	1.1	0.4	0.7	完形		チャート		
29	17F	I	2.1	0.8	0.5	0.5	完形		下呂石		
30	13F	I	1.4	0.7	0.5	(0.5)	一部欠		下呂石		
31	12F	III	2.6	1.0	0.5	(1.2)	つまみ部欠		下呂石		
32	10D	I	2.5	0.8	0.5	(0.8)	錐部少欠		下呂石		
33	14E	I	1.7	0.6	0.3	0.3	完形		下呂石	細少 磨減大	
34	13D	III	3.0	0.9	0.5	1.4	完形		下呂石		
35	8D	I	3.6	1.5	0.9	4.2	-	-	下呂石	未製品	
36	15E	III	3.7	1.7	1.2	6.8	-	-	下呂石	未製品	

第23表 横形石器計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考	挿図番号
1	9C	I	4.2	1.9	1.1	9.2	下呂石	上縁に階段状の剥離痕	2039
2	8C	I	2.5	0.9	0.8	1.7	下呂石	一側縁に折断面あり	
3	3C	I	2.8	1.1	0.9	2.7	下呂石		
4	9C	III	2.0	1.5	0.6	1.7	チャート	本遺跡では最小の部類	
5	9C	III	2.3	2.3	0.7	3.7	下呂石		
6	10D	I	3.0	1.1	0.8	2.4	チャート	上下に打撲痕集中	2041
7	4D	I	2.3	1.3	0.6	1.6	チャート		
8	19H	III	3.3	1.6	1.2	7.1	下呂石	一側縁に折断面あり	
9	19H	III	2.9	1.6	0.6	2.5	下呂石		2042
10	7D	I	2.3	1.8	0.6	2.6	下呂石		
11	19G	I	3.5	1.0	0.9	3.3	下呂石		2043
12	19H	I	3.2	2.2	1.2	8.7	下呂石	上下につぶれ状の剥離	
13	2C	III	2.7	2.1	0.8	4.9	下呂石		
14	13E	I	2.7	2.4	0.7	4.1	下呂石		
15	4C	III	2.5	2.2	0.7	4.9	下呂石	両側縁に折断面をもつ	2040
16	9B	III	3.0	2.6	0.8	6.7	下呂石		

第24表 削器計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考	挿図番号
1	12E	I	5.3	4.5	0.9	21.5	下呂石	抜入刃部あり	2044
2	15E	III	3.2	2.4	0.9	6.4	下呂石	表裏両面からの調整	
3	11C	I	4.6	4.0	1.2	22.9	下呂石	自然面一部残す	2046
4	11E	I	4.1	2.6	0.8	9.5	下呂石		
5	9C	III	5.6	3.7	1.5	25.6	下呂石		2047
6	9C	I	2.7	2.3	0.6	3.6	下呂石		
7	5B	III	5.7	3.0	1.3	22.3	下呂石	一側縁に規則的な調整	2045

第25表 二次加工のある制片計測表

No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	神岡番号
1	14E	III	4.5	5.0	1.3	33.9	下呂石	2051
2	14E	III	3.5	4.8	1.4	20.1	下呂石	2052
3	4C	I	5.3	5.0	1.8	35.6	下呂石	2053
4	6B	III	5.2	3.5	0.9	13.6	下呂石	
5	5B	IV	3.0	3.8	0.9	13.6	下呂石	2054
6	6B	III	3.2	3.6	1.3	10.0	下呂石	
7	5B	III	2.9	2.2	0.6	4.2	チャート	
8	9G	I	4.4	1.9	0.9	5.5	下呂石	
9	11E	III	2.2	4.0	0.4	9.4	下呂石	
10	3B	I	2.1	4.0	0.4	3.1	下呂石	
11	3D	I	2.7	3.4	1.0	7.1	下呂石	
12	9C	III	3.0	4.5	0.7	10.3	下呂石	
13	8C	III	4.5	3.0	1.1	13.8	下呂石	
14	9D	III	3.5	3.5	0.9	9.5	下呂石	
15	9D	I	2.9	2.9	0.7	5.0	下呂石	
16	5B	III	2.1	2.6	1.5	6.7	下呂石	
17	9C	I	1.5	3.1	0.4	2.0	下呂石	
18	8C	III	2.2	1.2	0.9	2.7	チャート	
19	2B	I	1.1	1.9	0.3	0.8	下呂石	
20	10D	I	2.0	1.5	0.7	2.3	チャート	
21	3A	I	2.5	1.2	0.4	1.3	下呂石	
22	5B	III	2.3	2.0	1.1	5.1	チャート	
23	12F	I	1.3	1.1	0.3	0.4	チャート	
24	12D	I	2.8	0.6	0.4	0.6	下呂石	
25	10D	I	2.1	1.1	0.5	1.6	チャート	
26	9B	III	4.1	3.2	1.1	15.2	下呂石	
27	10C	III	3.0	3.7	1.0	9.3	下呂石	
28	7D	I	2.6	3.6	0.9	8.8	下呂石	
29	8C	III	2.4	3.0	1.1	6.4	下呂石	
30	2A	I	1.6	2.5	0.7	2.0	下呂石	
31	12F	I	3.1	2.8	0.6	5.4	下呂石	
32	13D	III	3.3	2.2	0.6	5.4	下呂石	
33	13D	III	3.7	3.4	0.9	8.8	下呂石	

第26表 使用痕のある割片計測表(1)

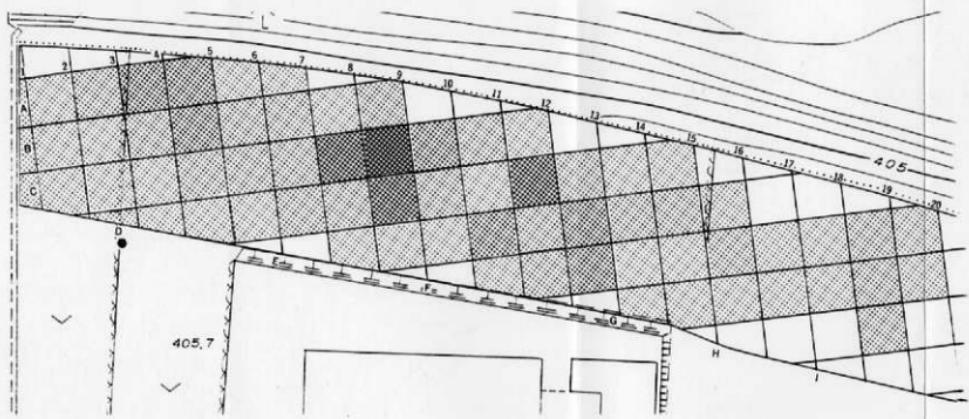
No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	標図番号
1	9 C	II	3.4	1.7	0.3	1.9	下呂石	
2	9 C	II	1.8	1.4	0.4	0.7	下呂石	
3	6 D	III	1.9	2.5	0.6	2.3	下呂石	
4	9 C	I	1.2	1.2	0.2	0.3	下呂石	
5	9 C	I	3.8	2.1	1.2	9.1	下呂石	
6	12D	I	2.2	1.6	0.4	0.9	下呂石	
7	9 D	III	4.3	2.1	0.9	8.3	下呂石	
8	15E	III	5.2	2.5	0.8	8.8	下呂石	
9	19G	I	1.7	2.7	0.5	0.9	下呂石	
10	19F	I	1.5	2.5	0.5	1.4	下呂石	
11	9 C	I	1.7	1.7	0.5	0.8	下呂石	
12	15F	III	2.3	1.3	0.5	1.3	下呂石	
13	19G	I	1.2	1.4	0.2	0.8	下呂石	
14	18F	III	2.4	1.2	0.2	0.6	下呂石	
15	19G	I	1.7	1.2	0.4	0.7	下呂石	
16	11C	I	2.9	5.4	1.8	26.7	下呂石	
17	11E	I	2.3	3.0	0.7	5.4	下呂石	
18	2 C	III	1.6	2.5	0.8	1.0	下呂石	
19	11E	I	2.8	1.6	0.4	1.7	下呂石	
20	6 B	IV	1.4	2.5	0.5	1.4	チャート	
21	14F	I	2.1	2.9	0.5	2.6	下呂石	
22	12D	I	2.7	1.8	0.8	3.7	下呂石	
23	4 A	III	1.9	2.7	1.1	4.4	下呂石	
24	10E	I	4.5	2.1	0.9	10.4	チャート	
25	4 A	III	4.1	2.3	0.9	6.3	下呂石	
26	不明	-	2.7	4.3	0.8	8.4	下呂石	2056
27	15F	I	2.3	4.6	1.1	11.7	下呂石	2058
28	15E	I	4.1	2.4	0.7	5.3	下呂石	
29	13E	III	3.6	2.7	0.6	4.3	下呂石	
30	15E	I	3.5	1.4	0.6	3.8	下呂石	
31	S B 2	埋土中	7.9	4.5	1.4	55.2	溶結凝灰岩	2059
32	4 D	I	4.9	3.8	0.9	22.3	凝灰岩	
33	11E	I	3.6	2.1	0.5	4.1	チャート	
34	11F	I	2.4	3.2	0.7	4.5	チャート	
35	11E	I	4.6	4.1	0.9	18.8	凝灰岩	
36	11D	I	4.0	2.1	0.7	6.6	チャート	

第27表 使用痕のある銅片計測表(2)

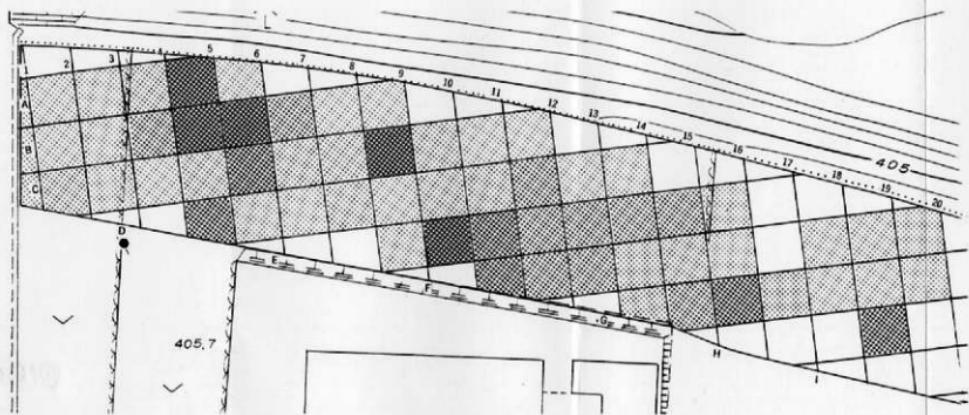
No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	鉢回番号
37	8 E	V	1.7	2.3	0.3	1.6	チャート	
38	10C	I	2.7	2.7	0.6	3.8	下呂石	
39	9 C	I	2.7	2.0	0.5	2.4	下呂石	
40	9 C	I	2.8	3.2	1.1	8.5	下呂石	
41	8 D	I	4.7	2.0	0.9	6.3	下呂石	
42	9 D	I	2.2	3.5	0.8	5.2	下呂石	
43	10D	I	3.2	3.3	0.8	8.6	下呂石	2057
44	7 D	I	3.5	1.9	0.6	3.3	下呂石	
45	9 D	III	2.7	2.4	0.8	3.1	下呂石	
46	10C	I	2.2	1.9	0.4	1.7	下呂石	
47	9 C	III	3.0	3.0	0.7	5.2	下呂石	
48	9 C	III	1.8	2.3	0.9	2.3	下呂石	
49	10C	III	2.2	2.3	0.6	2.0	下呂石	
50	8 C	I	3.8	2.0	0.6	3.6	下呂石	
51	7 D	I	2.0	3.0	0.6	3.5	下呂石	
52	9 C	I	2.2	1.8	0.6	1.9	下呂石	
53	4 A	III	2.2	1.5	0.4	1.0	下呂石	
54	10D	I	2.1	3.1	0.6	3.2	下呂石	
55	9 C	I	2.9	1.9	1.0	3.8	下呂石	
56	10D	I	1.2	2.8	0.3	1.0	下呂石	
57	9 D	III	2.0	2.5	0.8	3.3	下呂石	
58	9 D	I	2.6	3.0	0.8	5.2	下呂石	
59	10D	III	2.3	1.6	0.9	2.5	下呂石	
60	8 D	I	3.4	1.4	0.8	3.3	下呂石	
61	10C	I	1.9	2.7	0.6	3.9	チャート	
62	9 C	I	1.7	1.5	0.3	1.3	下呂石	
63	9 D	I	2.0	1.5	0.4	1.6	チャート	
64	5 D	I	1.5	1.2	0.6	0.7	下呂石	
65	8 C	I	1.8	1.7	0.5	1.8	下呂石	
66	7 D	I	2.2	1.8	0.5	1.8	下呂石	
67	2 A	III	1.6	2.6	0.9	2.8	下呂石	
68	2 A	III	2.5	1.4	0.7	2.0	下呂石	
69	2 A	III	2.1	1.4	0.3	1.1	下呂石	
70	3 B	III	4.3	3.8	1.1	12.5	下呂石	
71	10D	III	3.1	2.2	0.8	4.0	下呂石	
72	5 A	I	2.6	2.0	0.7	3.5	チャート	

第28表 使用痕のある刮片計測表(3)

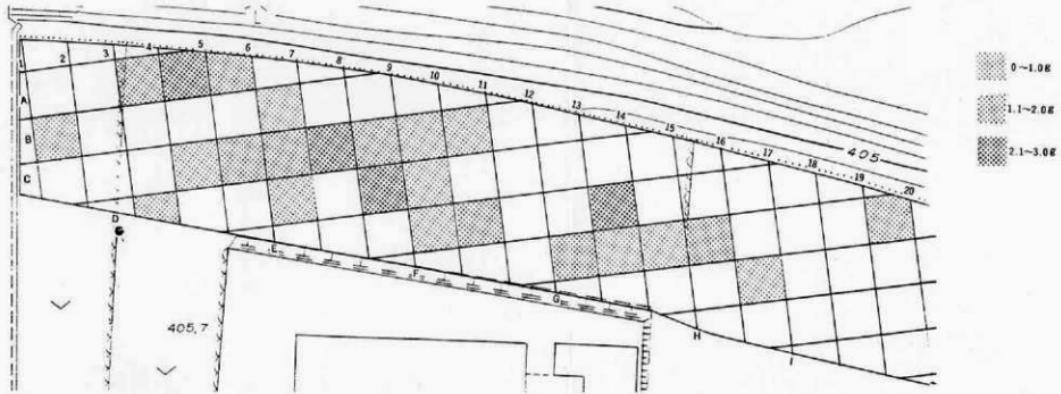
No	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	検査番号
73	2B	I	3.4	2.1	0.6	4.0	下呂石	
74	10C	I	2.3	2.2	0.6	2.3	下呂石	
75	6C	I	2.2	1.5	0.4	1.5	下呂石	
76	2C	I	2.9	1.8	0.5	3.3	下呂石	
77	9C	I	2.4	1.7	0.7	2.7	下呂石	
78	9D	III	3.0	2.5	1.3	8.1	下呂石	
79	4B	III	2.7	1.2	0.4	1.4	下呂石	
80	6B	II	2.9	2.1	1.0	4.7	下呂石	
81	6B	II	2.0	2.8	0.7	4.3	チャート	
82	2A	III	3.1	4.5	1.0	15.3	下呂石	
83	2C	I	4.9	2.4	1.6	16.7	下呂石	
84	3B	I	1.8	2.0	0.6	2.7	下呂石	
85	4A	III	2.3	2.0	0.7	3.0	下呂石	
86	4B	I	3.3	2.2	0.7	4.0	下呂石	2055
87	5A	III	1.9	2.3	0.6	3.3	下呂石	
88	5B	III	3.3	2.3	1.1	6.2	下呂石	
89	5B	III	2.7	2.9	0.7	5.6	下呂石	
90	5D	I	2.6	3.9	0.9	8.7	下呂石	
91	8C	I	2.6	2.0	0.8	5.0	凝灰岩	
92	8C	III	3.5	2.1	0.6	4.2	チャート	
93	8B	I	4.0	2.7	0.9	10.4	下呂石	
94	8D	I	3.3	1.8	0.6	4.2	チャート	
95	8D	I	2.9	1.8	1.1	4.4	下呂石	
96	9C	I	3.1	2.0	1.2	8.7	下呂石	
97	9C	III	2.3	2.3	0.5	3.0	下呂石	
98	9D	I	2.3	2.1	0.9	5.1	チャート	
99	9D	III	2.1	3.1	0.4	2.8	下呂石	
100	10C	III	3.0	1.5	0.9	3.7	下呂石	
101	11E	III	2.6	3.3	0.6	5.1	下呂石	
102	13E	III	2.4	3.2	0.7	4.8	下呂石	
103	13E	III	2.6	1.6	0.6	2.3	下呂石	
104	13F	I	2.2	3.3	0.8	5.1	下呂石	
105	14E	I	2.5	2.5	0.8	6.2	チャート	
106	15E	III	4.3	1.6	1.0	8.3	下呂石	
107	18G	I	2.2	3.5	0.5	3.7	下呂石	
108	16E	III	2.9	4.4	0.9	11.3	下呂石	
109	15E	I	3.2	5.3	1.2	23.0	下呂石	



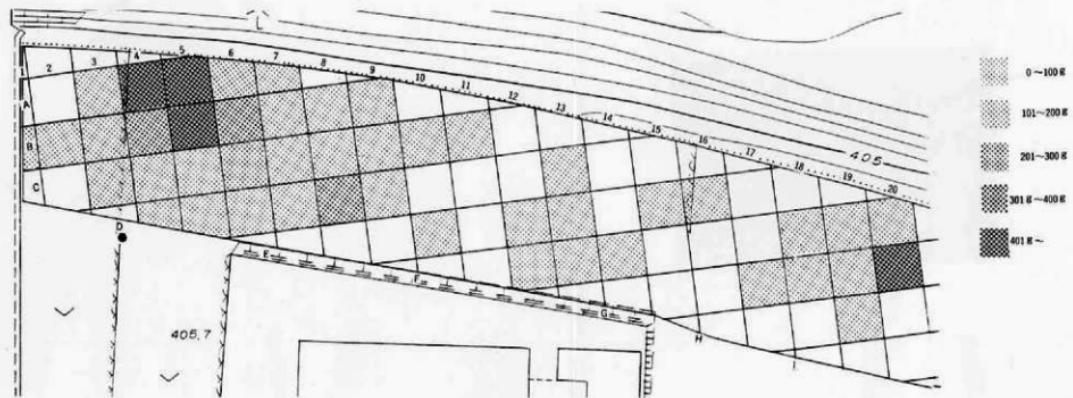
第38図 下呂石剝片重量分布図



第39図 チヤー石剝片重量分布図



第40図 黒曜石剥片重量分布図



第41図 その他の石材剥片重量分布図

(15) 使用痕のある剥片 (第37図2055~2059)

剥片の縁辺に刃こぼれの認められるものをここに含めた。総数は109点である。石材は下呂石が93点、チャートが12点、凝灰岩が4点である。形態、大きさなど極めて多様である。しかし、ものを切る・削るといった機能面を考えると、縁辺部の鋭利さ、側縁の形状に一定の選択があつたことも考えられ、多様な中にもまとまりが見いだせることが可能である。すなわち縁辺部(刃部)の形状が直線的なもの、曲線的なもの、この組み合わせさったもの…、そして素材のもつ刃部の角度である。今回は削器としての意味あいで分類の可能性を指摘するに留める。

第4節 その他

土錘 (第42図4001)

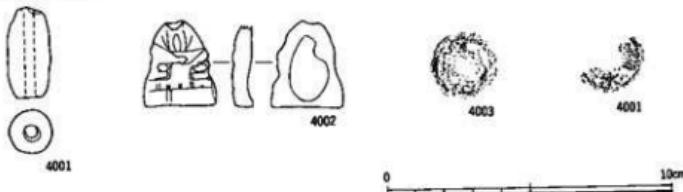
管状土錘が20G区から1点出土した。両側縁は内曲し端部にいたる。穿孔はほぼ直行し、径は3mm、重量は6.8gを測り小型の部類に入る。胎土に白色粒子を含み、磨滅が激しい。

玩具類 (第42図4002)

泥面子と呼ばれる粘土を型抜きした扁平な土製品が20H区から出土した。頭部が失われているが手に笏を持ち、台座に座している様子から天神をモチーフにしたものと思われる。裏面には指頭痕が認められる。型抜きの際にできたものであろう。残存する長径は30mm、短径は21mm、厚さ7mm、重量は5gを測る。

銭貨類 (第42図4003・4004)

19F区から4003、20G区から4004が出土した。腐食が激しいため識別困難であるが4003は寛永通寶と思われる。



第42図 その他の出土遺物

第5章 自然科学からの検討

陰地遺跡出土のサヌカイト、黒曜石製造物の原材产地分析

藤科 哲男

(京都大学原子炉実験所)

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圈を探ると言う目的で、蛍光X線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目指として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている^{1,2,3}。サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量元素組成には異同があると考えられるため、微量元素を中心元素分析を行い、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からぬという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

岐阜県加茂郡東白川村越原の陰地遺跡出土の縄文時代中期から後期の黒曜石製石片とサヌカイト石片の合計2個の産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト、黒曜石原石の分析

サヌカイト、黒曜石両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素は Al、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nb の12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Sr を、また黒曜石では Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zr をそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は

良くないか?考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて31ヶ所の調査を終えている。第43図にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多くの地点から良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると39個の原石群に分類できる(註1)。

金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6ヶの群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にはほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。また、和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、それぞれの群に帰属される頻度分布を求め、岩屋、和泉・岸和田原産地等の諸群と比較して確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心とした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、それぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州、の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を第44図に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成の上から、これら原石を分類すると95個の原石群にわかれる(註2)。黒曜石の原産地は、北陸地方では、富山県の魚津、石川県の比那、福井県の三里山、安島の各原産地が調査されていて、比那、魚津産黒曜石が石器原材料として使用されている。中信高原地域の黒曜石産地の中で、霧ヶ峰群は、長野県下諏訪町金明水、星ヶ塔、星ヶ台の地点より採取した原石でもって作られた群で、同町観音沢の露頭の原石も、霧ヶ峰群に一致する元素組成を示した。和田岬地域原産の原石は、星ヶ塔の西方の山に位置する旧和田岬トンネルを中心とした数百メートルの範囲より採取され、これらを元素組成で分類すると、和田岬第一、第二、第三、第四、第五、第六の各群に分かたれる。和田岬第一、第三に分類された原石は旧トンネル付近より北側の地点より採取され、和田岬第二群のものは、トンネルの南側の原石に多くみられる。和田岬第四群は男女倉側の新トンネルの入り口、また、

和田岬第五、第六群は男女倉側新トンネル入り口左側で、和田岬第一、第三の両群の産地とは逆の方向である。男女倉原産地の原石は男女倉群にまとまり組成は和田岬第五群に似る。鷹山、星糞岬の黒曜石の中に和田岬第一群に属する物が多数みられる。麦草岬群は大石川の上流および麦草岬より採取された原石で作られた。これら中信高原の原産地は、元素組成で和田岬、霧ヶ峰、男女倉、麦草岬の各地域に区別される。伊豆箱根地方の原産地は笛塚、畠宿、鎌治屋、上多賀、柏崎西の各地にあり、良質の石材は、畠宿、柏崎西で斑品の多いやや石質の悪いものは鎌治屋、上多賀の両原産地でみられる。笛塚産のものはピッチストーン様で、石器原材としては良くないであろう。伊豆諸島の神津島原産地は砂藤崎、長浜、沢尻湾、恩馳島の各地点から黒曜石が採取され、これら原石から神津島第一群および第二群の原石群にまとめられる。

結果と考察

遺跡から出土した石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性を考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。

今回分析した遺物の結果を第29・30図に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するために原石群との比較を行なうさいは、相間を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T^2 検定で行なう。この手法によって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する⁴³⁾。遺物の産地同定は各黒曜石原産地からの95個の原石群およびサヌカイト原産地31箇所の原石群と比較して、確率の高い原石産地のものだけを選んで第31表に記した。原石産地（確率）の欄にマハラノビスの距離 D^2 の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこの D^2 の値が原石群の中で最も小さな D^2 値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えてほほ間違ないと判断されたものである。

今回分析した黒曜石遺物には霧ヶ峰産原石が使用され、またサヌカイト遺物には下呂産原石が使用されているのが明らかになった。このことは、石器は日常品であることから、遺跡の住人がこれら原石産地地域の情報を日常的に入手していると推考しても産地分析の結果と矛盾しないであろう。

(註1) この分類結果、「各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差」データーは本センター発掘調査報告書「戸入村平遺跡」(平成6年度刊行)に掲載されている。参照されたい。

(註2) 黒曜石における元素比平均値と標準偏差についても(註1) 同様の文献を参照されたい。

参考文献

- (1) 菊科哲男・東村武信 (1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学、8: 61-69
- (2) 菊科哲男・東村武信・藤木義品(1977)、(1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学、10,11: 53-81; 33-47
- (3) 菊科哲男・東村武信 (1983)、石器原材料の产地分析。考古学と自然科学、16: 59-89
- (4) 東村武信 (1976)、产地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9: 77-90
- (5) 東村武信 (1990)、考古学と物理化学。学生社

第29表 隆地遺跡出土のサヌカイト製石片分析結果

分析番号	元素比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
34711	1.477	.197	.036	.695	.291	.052	.501	.042	.046	.561

第30表 隆地遺跡出土の黒曜石製石片の分析結果

分析番号	元素比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
34712	.174	.066	.085	1.121	.990	.336	.322	.093	.021	.284

第31表 隆地遺跡出土の黒曜石、サヌカイト製石片の原産地推定結果

分析番号	グリッド	層位	時代(伴出土器)	原石产地(確率)	判定	遺物品名
34711	11E	III	縄文時代中期～後期	下呂(1%)	下呂	剝片
34712	12E	III	縄文時代中期～後期	霧ヶ峰(D ² =37)	霧ヶ峰	碎片



第43回 サヌカイト原音地



第44回 無寶石原產地

第6章 考 察

1号住居跡の床面から検出された小穴の配置と各規模は、その用途・機能が十分に推定されるものである。中央部からやや東寄りに右開い炉、その炉の一側縁を中心にした四口の柱穴、さらに埋甕とそれに付帯する対ビットの存在は各々が主柱穴と出入口部であると認定する蓋然性が高いものである。住居跡全体の平面形状を含め、縄文時代中期後半において信州地方にみられるいわば典型的な配置を示し、シンメトリーな四本主柱穴の配置は規格性すら感じられる。床面の硬化部分を第8図に示したが、P1とP4の柱間においてそれは顕著にみられ、床面全体の使用頻度差も想像できる。

炉は一辺を欠くものの、出入口部から見た炉縁石は正面を意識させる。南側の一辺に配された礫は周囲の礫と石質をかえ、花崗岩で河原石ではない。これは一部赤化している部分と礫面トップのレベル差から灰土等の搔きだし口を示唆するものである。

出入口部から炉が直線的に間仕切りされる中で、その最奥部に凝灰岩の三角形状の角礫が床直上で存在する。中期の住居跡内部において広義の祭壇遺構が報告されることから注目されるものであるが、間仕切り線の延長線からややはずれた位置であることや遺物の出土がみられないことから、この意味あいを論ずるのは遠慮され、この付近の遺跡の報告例を俟ちたい。

次に埋甕についてその要素をまとめたい。存在位置は中期後葉からの諸例にみられるごとく出入口部に相当する床面に埋納される。出土状態は正位埋設で掘形は土器と同サイズのビットである。残存状態はほぼ完形である。口縁部が欠損しているためにはほぼ完形としたが欠損事由は埋甕が形成された時点以後の外的要因によってではなく、埋設する際の意図的な欠除を想起させる。口縁端部を同一レベルにて打ち欠き、そこに扁平な石あるいは板状の素材を置いたことによるものであろうか。管見にて不明な点が多いが、正位埋甕の場合においてこのことは通有であったと思われる。なお、底部穿孔または打ち欠きは認められない。内容物は径約5cm大の円礫が1点確認された(第10図)。土器そのものは中富IV式に比定される精製土器で、内面に炭化粒子が帶状に付着することから日常使用された土器であったことが推察される。ただ、飛驒方面を参考にすると深鉢形土器、なおかつ曾利系の土器が広く分布し、これが埋甕に使用されることが多い中で当地の本住居跡においては、極端なキャリバー形を呈する中富式土器(東海系の土器)が使われている。飛驒川中流域における類例を金山町乙原遺跡の3号住居跡の埋甕(曾利I式を伴出)に求められるほか、長野県と接する坂下町の門垣戸遺跡の2号住居跡の埋甕(曾利II式を伴出)、中津川市阿曾田遺跡の33号住居跡、長野県上伊那郡高森町の増野新切D遺跡29号住居跡、その他西濃地方であるが旧徳山村戸入村平遺跡の4号住居跡、山手宮前遺跡の5号住居跡にて確認されている。該期の親族構造を研究する場合、婚姻制度との関連が指摘され、妊娠呪術に関する立場からの論巧があるなかで、この中富式土器の埋甕使用は住居構

造に信州方面との関連をみることを含め当時の社会制度、文化的背景を考える際の好例といえよう。ただし、本調査区において中富式土器が客体、または異系統の土器なのかどうかについては土器そのものの出土量に難点があり、組成の中心をなすものが欠如していることから注意を要する。

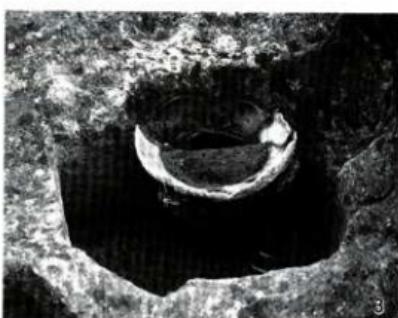
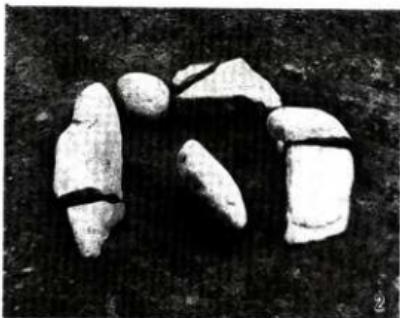
2号住居跡についてはまず住居跡の形状に注目したい。明確な五角形を呈す住居跡であるとする確信は持てないが、長野県、新潟県に五角形に關係する形態が認められ、照らし合わせる上でこの範疇に納まるものと考える。縄文時代中期後半における白川流域はその地勢から曾利式土器の分布圏下に組み込まれるものと調査前の予察をもっていたが、この住居跡の埋土中から出土した0001が東濃地方または飛驒地方を経由して間接的に信州地方とのつながりを示す結果となった。詳しい系譜を求めるることはできなかったが、先述した五角形という形態は土器以外の視点を与えることとなった。県内においては久々野町の堂之上遺跡の35・22号住居跡、高山市の寺東遺跡の3号住居跡に類似が知られ、県外では長野県中信地区の玉浦村御嶽神社里宮遺跡、南信地区的与助尾根遺跡・茅野和田遺跡・徳久利遺跡・井戸尻遺跡にその存在が認められる。1号住居跡の構造に規格性と信州との関連を考えたが、2号住居跡の平面形状においても住居構築技術の系譜を想定できるであろう。本遺跡出土の黒曜石が霧ヶ峰産であるとする結果を合わせ、縄文時代中期後半の本遺跡の包蔵する情報が土器・石器・住居構築技術に信州との強いつながりを伺わせる一方、東海地方の文化要素も流入していたことを提示する一資料になったことと思う。本遺跡の縄文時代の頂点が中期後半から後期にあったことは確実であるが、後期については、該期の遺構資料が断片的であるため十分な分析は今回できなかった。しかし、土器自体について後出的な時期ではあるが、質・量とも良好な資料を示す飛驒川右岸の広島遺跡・中の森遺跡の資料を交え、編年的分析に課題を残しつつ、巨視的な観点から再検討したい。

参考文献

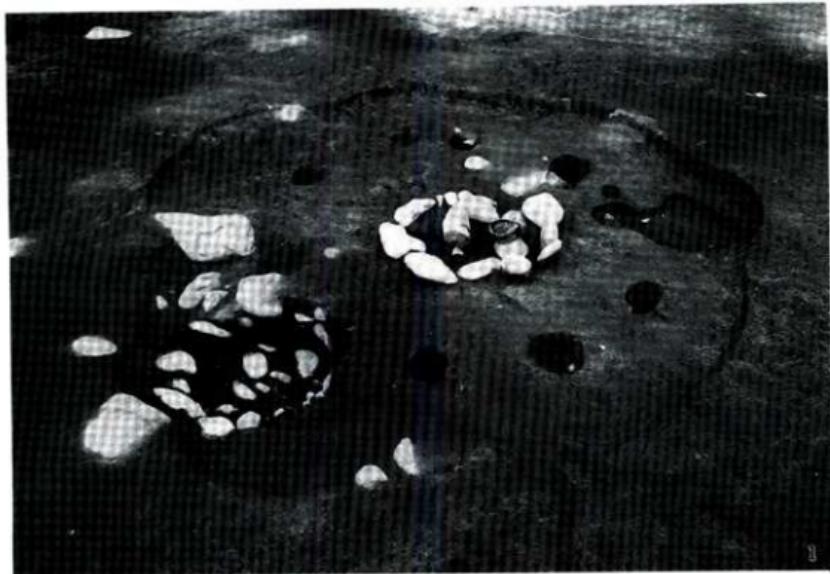
- | | | |
|--------------|------|------------------------------------|
| 岩瀬彰利 | 1991 | 「喫煙式土器の分布とその背景—縄文時代の過嫁団—」『三河考古』第4号 |
| 植田雄 | 1991 | 「括張、あるいは展開する縄文文化」『滋賀考古』第5号 |
| 恵那市教育委員会 | 1982 | 「下田遺跡」 |
| 大江 命 | 1981 | 「誰飛の縄文中期土器の分布圏とその課題」『岐阜県考古』第8号 |
| 岡谷市教育委員会 | 1987 | 『織沢押型文遺跡調査研究報告書』 |
| 各務ヶ原市教育委員会 | 1973 | 『炉畠遺跡発掘調査報告書』 |
| 可児町北条遺跡発掘調査団 | 1973 | 『北条遺跡』 |
| 金山町教育委員会 | 1985 | 『祖師野遺跡発掘調査報告書』 |
| 岐阜県 | 1991 | 「土地分類基本調査」「加子母・上松」5万分の1 |
| 岐阜県 | 1972 | 『岐阜県史通史考古編』 |
| 久々野町教育委員会 | 1978 | 『堂之上遺跡 第1次～5次調査概報』 |
| | 1980 | 『堂之上遺跡 第6次・第7次調査』 |
| 倉敷考古館 | 1971 | 『里木貝塚』『倉敷考古館研究集報』第7号 |

紅村 弘・増子康真他	1978	『東海先史文化の諸段階（資料編Ⅰ）』
紅村 弘	1984	『東海の先史遺跡』総括編
国際地学協会	1993	『日本地図』
坂下町教育委員会	1976	『門垣戸遺跡』
坂祝町教育委員会	1988	『芦戸遺跡』
島田市教育委員会	1989	『東峰原遺跡発掘調査報告書』
白川町教育委員会	1983	『広島遺跡発掘調査報告書』
高山市教育委員会	1988	『寺東遺跡、西保木（対岸）遺跡発掘調査報告書』
	1991	『垣内遺跡発掘調査報告書』
中津川市教育委員会	1979	『中村遺跡 第1～2次発掘調査報告書』
	1985	『阿曾田遺跡発掘調査報告書』
	1991	『久須田遺跡発掘調査報告書』
	1988	『落合五郎』
長野県史刊行会	1981	『長野県史考古資料編』全一巻
長野県教育委員会	1971	『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡高森町地内しの2—』
東白川村	1981	『東白川村誌』
藤森栄一	1965	『井戸尻・長野県富士見町における中期绳文遺跡群の研究』
福岡町教育委員会	1981	『下島遺跡発掘調査報告』
増子康真	1969	『木曾川下流域の繩文中期後半の土器について』『古代学研究』54号
	1986	『東海西部沿海地域縄文中期土器型式の検討—北屋敷式の綴別と浜畑式の再検討—』『知多古文化研究』2
南知多町教育委員会	1983	『林ノ峰貝塚Ⅰ』
	1983	『清水の上貝塚』
美濃加茂市教育委員会	1971	『神明遺跡発掘調査報告書』
	1973	『牧野小山遺跡七宗可児線道路工事埋蔵文化財調査報告書』
村田文夫	1992	『長野県棚橋遺跡縄文ムラの語り—中期聚落理解にむけての新想—』『縄文時代』3
八百津町教育委員会	1980	『南森遺跡発掘調査報告書』

図 版



1. 1号住居跡 2. 炉 3. 埋甕 4. 1号住居跡掘削状況 5. 2号住居跡・炉



1

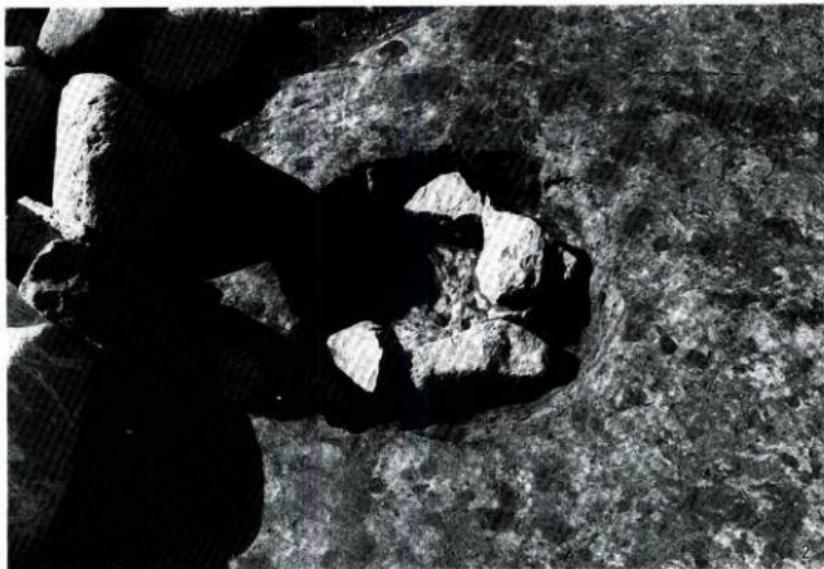


2

1. 2号住居跡 2. SK 4~7



1. SK 8・9 2. SK10



1. SK12 2. SK21

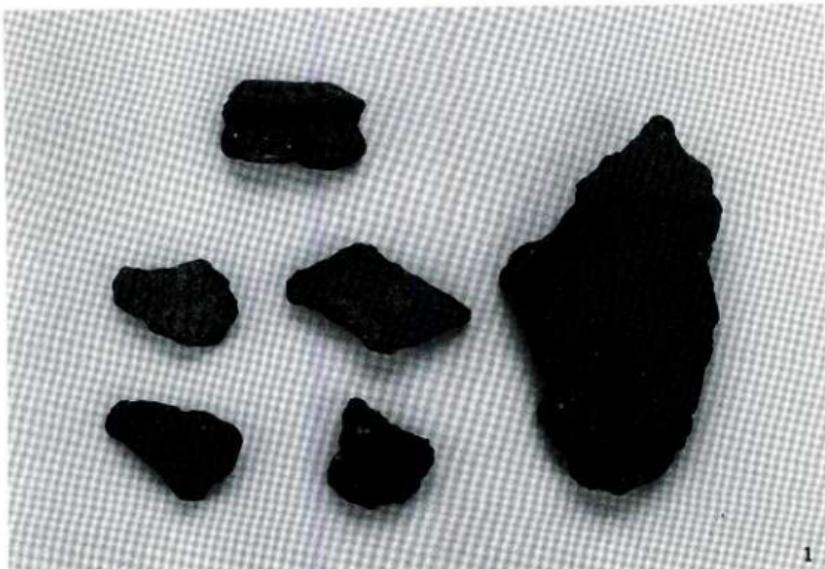


1

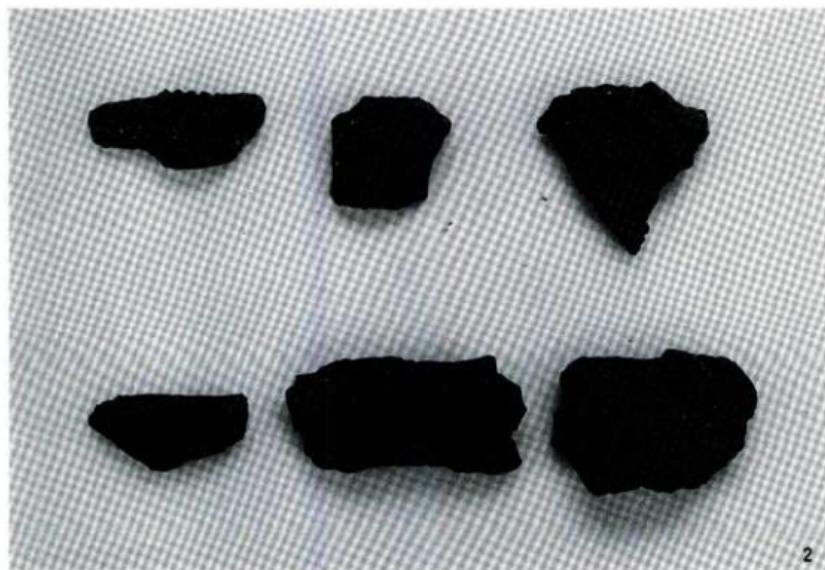


2

1. I群土器 2. II群土器



1



2

1. III群土器 1～3類 2. III群土器 4類①

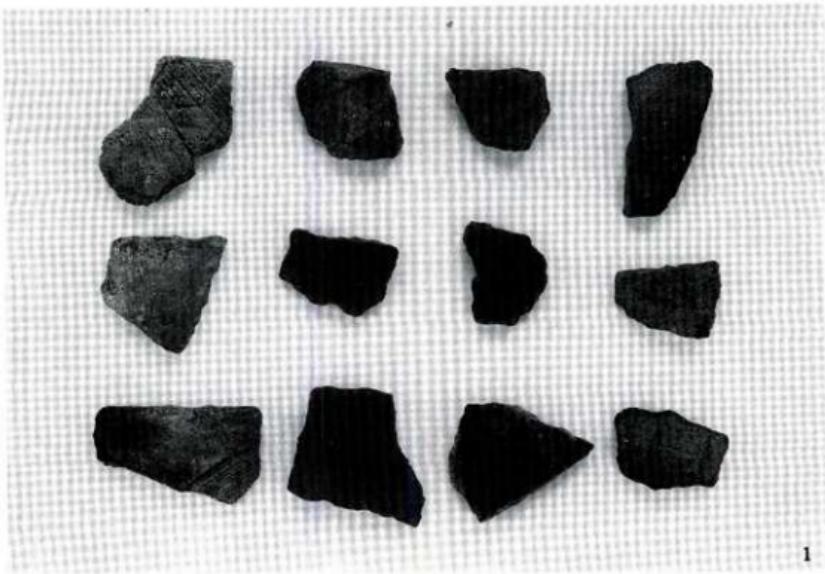


1

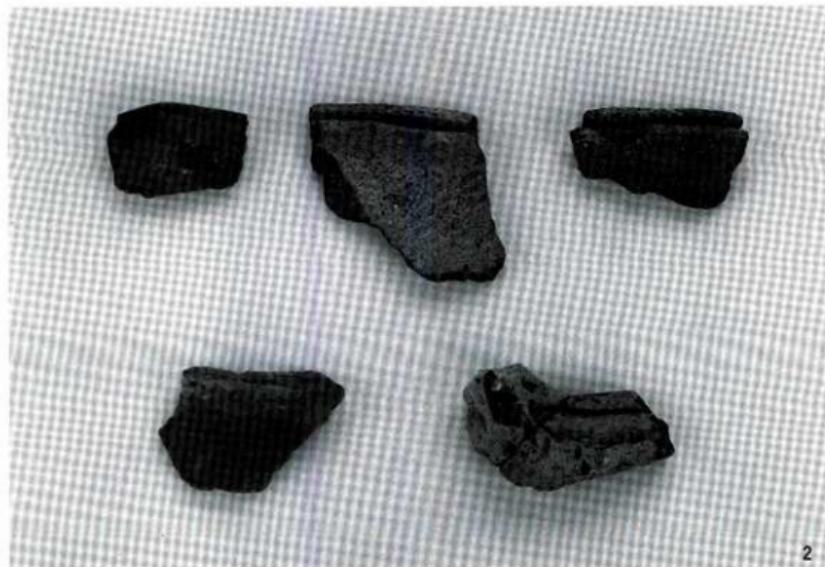


2

1. III群土器 4類(2) 2. IV群土器 1類



1



2

1. IV群土器 2・3類 2. IV群土器 4類



1

2

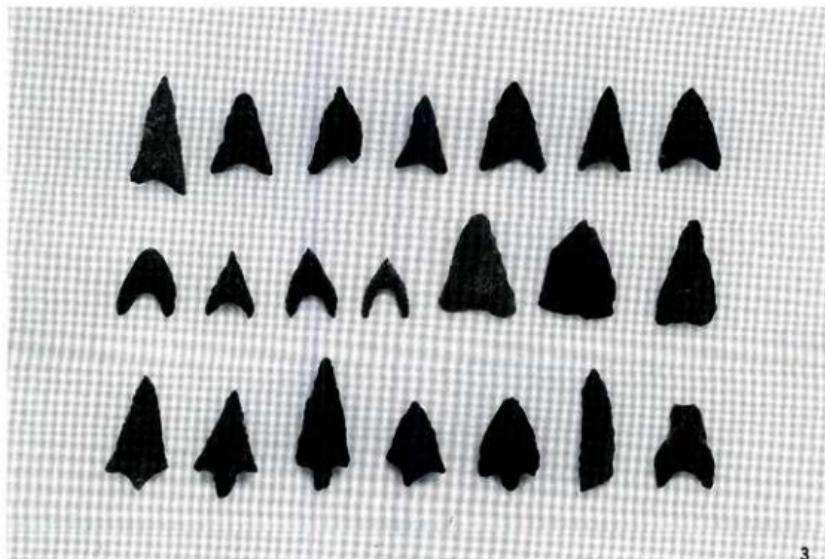
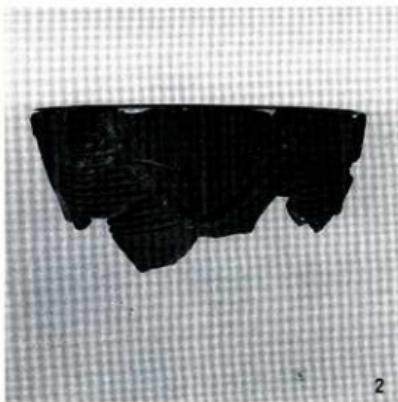


3



4

1. III群把手 2. V群土器 3. VI・VII群土器 4. 弥生時代中期の土器



1. 2号住居跡・炉体土器 2. III群土器4類 3. 石鏃

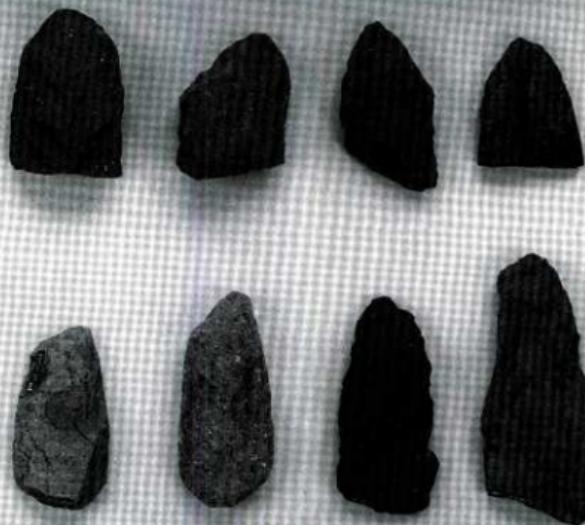


1



2

1. 打製石斧 1 類 2. 打製石斧 2 類



1

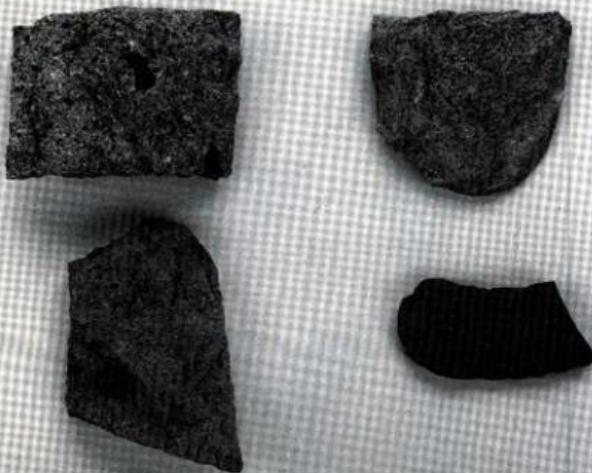


2

1. 打製石斧 3 類 2. 打製石斧 4 · 6 類



1



2

1. 打製石斧 5 類 2. 打製石斧 7 類・石鎚



1



2

1. 石錐・UF・RF 2. 石核

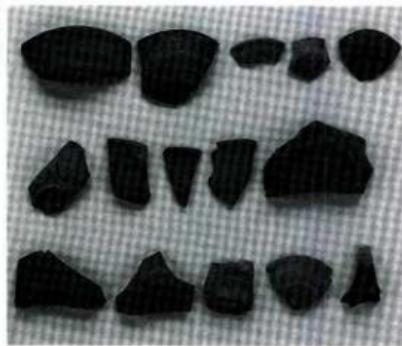


1

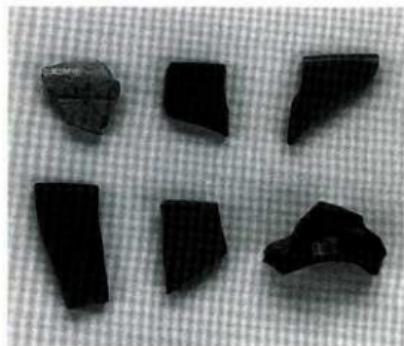


2

1. 橢形石器 2. 石槍・石錐・敲石・削器



山茶碗



青磁・白磁



青窯製品



青窯製品・その他の中世陶器



大窯製品・近世陶磁器



近世陶磁器

文献データシート

書名	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第15集 「陰地遺跡」		
執筆者	各務 光洋 小野木 学 萩原 哲男		
発行所	財團法人岐阜県文化財保護センター	発行年月	1994年3月
調査原因	国道256号公共道路改良工事に伴う		
遺跡名	陰地遺跡		
読み	おんちいせき		
所在地	岐阜県加茂郡東白川村大字越原字陰地		
種別	集落跡（住居跡・土坑他）		
時代	縄文（早・前・中・後・晚）、弥生中期・中世		

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第15集

おんちいせき
陰地遺跡

1994年3月25日 印刷

1994年3月31日 刊行

編集・発行 財團法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県本巣郡穗積町牛牧宮下395

印 刷 西濃印刷株式会社